

2007年度

# 地理学報告書

## —沖繩編—

田立あゆみ

西村翠

辻野菜穂

編集 山崎孝史

大阪市立大学文学部地理学教室

## 『地理学報告書—沖縄編』の刊行にあたって

本報告書は2007（平成17）年度に担当した「卒業論文演習」（一部四年生対象）および「地理学野外調査実習」（二部四年生対象）を受講した学生たちの成果である。この年度は、沖縄に関心をもつ一部四年生二名、二部四年生（卒業年の一年次前）一名の計三名の学部生（および大学院生の参加者一名）を引率し、平成19年9月に沖縄本島で調査・巡検を実施した。石垣島に向かった一部学生一名を除き、残るメンバーは南城市の旧知念村に一晩滞在し、翌日久高島にも渡った。その後、調査を継続する学生を久高島に残し、私を含めた三名が沖縄市に向かい、各自それぞれの調査を県内各地で実施した。この9月（およびその後の）調査の結果が本報告書であり、調査・巡検に参加した学生による卒業論文二本と課題レポート一本から構成されている。

まず、卒業論文の二編から紹介しよう。田立あゆみ「聖地の観光化—沖縄県久高島を事例に」は、久高島という聖地の現状を離島観光化の文脈から捉えたものであり、琉球文化圏における聖地久高島の宗教的儀礼が、離島が抱える過疎や少子高齢化の問題、そして沖縄観光の進展によっていかなる変容を迫られているかを、関係者の聞き取りから明らかにしたものである。西村翠「「沖縄移住ブーム」の成り立ちと現状—石垣島を事例として」は、近年の沖縄移住ブームのなかで、石垣島への本土からの移住者が増加した諸要因を分析しており、沖縄観光ブームの歴史的展開から離島志向の発生を見出し、石垣島および島内各地への移住者による居住地選択の過程をやはり聞き取りから明らかにした。最後の辻野菜穂「沖縄市の町づくり—コザミュージックタウン音市場と周辺商店街」は授業の課題レポートであるが、沖縄市中心部の各商店街、とりわけゲート通りを中心とする市街地再開発の問題を取り上げ、基地の街コザにおける音楽を軸にした市街地活性化事業の現状を明らかにしている。このレポートはいわば卒業論文に向けての予備調査レポートであり、新年度には卒論としての完成が期待される。

いずれの論考も、限られた調査期間ながら、精力的に現地調査を行った成果であり、それぞれの学生は真摯に課題に向き合っていた。その点で教員として指導が楽であったのがこの年度の特徴である。いずれにせよ、これら学生の調査にあたっては、関係者の一方ならぬご協力・ご支援を得た。指導教員としても心より御礼申し上げたい。なにとぞご高覧いただき今後とも引き続きご指導とご鞭撻をお願いできれば幸いである。

大阪市立大学大学院文学研究科 教授 山崎孝史

## 目次

『地理学報告書—沖縄編』の刊行にあたって（山崎孝史）	1
目次	2
聖地の観光化—沖縄県久高島を事例に（田立あゆみ）	3
「沖縄移住ブーム」の成り立ちと現状—石垣島を事例として（西村翠）	39
沖縄市の町づくり—コザミュージックタウン音市場と周辺商店街（辻野菜穂）	87

# 聖地の観光化－沖縄県久高島を事例に

田立 あゆみ

## 目次

はじめに 問題の所在	1) 島の祭祀の現状
I 調査方法と調査対象地の概況	(a) 伝統的な祭祀組織の構造
1) 調査方法	(b) 伝統行事と祭祀組織の現状
2) 久高島の概況	2) 久高島の観光の方向性と、その実態
3) 「神の島」久高島をめぐる社会的状況	3) 様々な対立する問題
II 久高島振興会の取り組みとその意義	(a) 内対外
1) 成立過程	(b) 男対女
2) 活動内容	(c) 伝統行事の存続に対する考え
III 調査結果と考察	おわりに

キーワード：聖地 観光 総有制 自治 精神世界

## はじめに 問題の所在

沖縄では信仰と暮らしが密接に結び付いており、古くから祖先祭祀と御嶽（ウタキ）信仰<sup>1</sup>をおもな内容とする独特の信仰が、時代とともに変化しつつあるものの、現在でも民衆の習俗として定着しており、その実例は住まいや日常生活、御嶽、祭事、俗信など多岐にわたる。このように固有の信仰をもっている沖縄では、神聖であるとされる場所が多くある。

近年沖縄では、92年の首里城の復元、2000年のグスク関連遺産の世界遺産登録などに伴い、首里城を中心として様々な儀礼が復興・再現・創出されている。

沖縄では本土復帰後、経済自立と生き残りをかけた観光化が進められ、上記のように聖地と呼ばれる場所もその対象となったと言える。平良は、聖地が観光資本として利用されるなかで沖縄人の沖縄意識や文化的アイデンティティの構築がなされてきている、と主張

---

<sup>1</sup> 御嶽とは、沖縄の固有信仰の場で、琉球王国が制定した沖縄の聖域の総称である。沖縄の神話の神が来訪する場所であり、祖先神を祀る場所でもある。王国時代は完全に男子禁制であった。御嶽の形態は、森の空間や泉や川などで、島そのものでもあることもある。

している<sup>2</sup>。また、聖地を保護・保存・活用にとまなう管理を、競合の場として聖地を捉える文脈の中に位置づけると、文化遺産・観光資源・教育のための資料として活用され、あらたな「聖地」の意味が付与されるという「聖地の非聖地化とあらたな聖地化」という側面が見えてくるとしている。

沖縄県南城市の、大里地区、佐敷地区、知念地区、玉城地区は、古くから東四間切(あがりゆまじり)または、東方(あがりかた)と称され、琉球開闢神話、稲作の発祥、太陽神信仰と密接な地域であった。14世紀に佐敷から出た尚巴志によって琉球が統一され、首里に王府が築かれて後、この地域の聖地を国王が巡礼する「東御廻り(あがりうまーい)」は、王府の大切な行事とされていた。また、琉球神話において、開闢の神アマミキヨが作ったとされる7つの御嶽の中で、最も重要視され、近年世界遺産に登録された斎場御嶽も南城市に位置し、その他にもたくさんの聖域と呼ばれる場所を有している。平成18年1月1日の4町村の合併の背景には、このような聖域というアピールポイントでまとまろうという側面もあった<sup>3</sup>。

そして南城市では、地域文化を活かした観光として、南城市全体でこの聖域という点を押し出している。南城市は、「再生と復活」の地として、「東御廻り」と「統合医療」をキーワードに、地域活性の試みをスタートさせている。

沖縄の離島である久高島は、上記の合併により、南城市の一部となった。久高島は神話や多くの祭祀行事などにより、「神の島」と呼ばれ神聖視されており、斎場御嶽からもその姿を望むことができ、琉球の独自信仰の中心となっている場所である。

久高島では久高島振興会を中心として様々な島の活性化事業が進められており、「聖地の観光化」という現象が起こっていると考えられる。

本稿では、久高島を事例に、聖地が観光化される時、その場所は本来もっていた聖地としての機能をどのように変化させるのかといった「聖地の非聖地化とあらたな聖地化」といった流れを明らかにしたい。また、聖地の観光化に関わる人々の中で、聖地との関り方によってどのような軋轢が生じているのかについても明らかにしたい。そして、久高島が今後持続的な聖地の観光化により島の自治力を向上させるためには何が必要なのかを考えたい。

---

<sup>2</sup> 場所の記憶と中心の再構築—沖縄意識の形成と観光という舞台— 平良直 より

<sup>3</sup> 南城市のホームページの中で、合併の経緯として「佐敷町、知念村、玉城村、大里村は、平成17年1月25日に、歴史・文化・生活圏などの面で密接なつながりを持ち、地理的にも隣接しており、一体的な行政施策の展開による沖縄本島南部の中核を担うまちづくりが可能なことから任意協議会を設立し、同年2月28日には法定協議会を設立して、協定項目及び事務事業の調整を行い、平成18年1月1日に南城市の誕生となりました。」と紹介されている。



写真 1-1 斎場御嶽入口  
(平成 19 年 9 月 3 日 18 時 6 分 筆者撮影)



写真 1-2 斎場御嶽 三庫理  
(<http://ja.wikipedia.org/wiki/より> 2008/01/9)



写真 1-3 齋場御嶽  
(平成 19 年 9 月 3 日 17 時 58 分 筆者撮影)



写真 1-4 齋場御嶽から望む久高島  
(平成 18 年 9 月 3 日 17 時 58 分 筆者撮影)

## I 調査方法と調査対象地の概況

### (1) 調査方法

本稿の主題は、久高島が「神の島」として観光化されていく中で、久高島のもつ「聖地」としての意味がどのように変化し、島の中でどのような軋轢が生じているのかということ を明らかにしていくことにある。このことを調べるためには、実際に島に出向き、そこで生きる人々の考えを知ることが必要不可欠であると考え、聞き取りを中心に調査を行うことにした。インフォーマントとしてはまず、現在の久高島の活性化政策の中心になっており、島の観光化にも大きな影響を与えていると考えられる久高島振興会の方にお話しを聞く必要があると考えた。そして、振興会の中でも中心的な役割を果たしている、4名の方からお話しを伺うことができた。

さらに、島の自治の方向性を示す上で、久高島留学センターは重要な役割を果たしていると考え、館長の坂本清治さんにもお話しをうかがった。次に、「神の島」としての久高島を考える上で無視することはできない祭祀の担い手である女性の考えも知る必要があると考えた。そして、イザイホー経験者である女性、イザイホーは経験していないが、現在神職者としての役目も担っている方からお話しを伺うことができた。

そして最後に、南城市全体で聖域という点をアピールポイントとして観光化を進める中で、久高島がどのように位置づけられ、また行政からどのような観光の方向性が考えられているのかを知るために、南城市役所観光・文化振興課の方にお話しを伺った。

調査は平成19年9月4日から7日にかけてと、平成19年11月19日から22日にかけての2回に分けて行った。

また、聞き取り調査を行う前に、「神の島」としての久高島の歴史や、現在の久高島の概況、またそれに対してどのような活動が行われているのかということ、先行文献やインターネットなどからも収集した。

聞き取りの結果に言及する前に、文献やインターネットなどで調べた島の概況、歴史などについて言及する。

なお、聞き取りの結果の言及の際には、インフォーマントの方のプライバシーの保護のために必要だと思われる部分は、実名を伏せて述べさせていただく。

### (2) 久高島の概況

久高島は、沖縄本島知念岬の東海上5.3kmに浮かぶ、面積1.37平方km、周囲8kmの島である。知念村を含む4町村の合併により、平成18年1月1日をもって、知念村字久高

は、南城市知念字久高となった。主な生業は漁業と観光業で、交通は南城市知念より高速船で 15 分、フェリーで 20 分であり、高速船、フェリー共に 1 日 3 往復出ている。平成 17 年度の国勢調査の結果では人口が 295、世帯数が 139 であり、平成 12 年度国勢調査における人口 229、世帯数 109 という結果と比較して共に増加している。(表 1) 平成 18 年度 5 月 1 日現在の学校生徒数は、小学校 27 名、中学校は生徒数 19 名の計 46 名である。

島には最高議決機関として字総会があり、ここでの決定が絶対的なものとなる。この下に評議委員が 13 名、土地管理委員が 12 名、区長、副区長、会計がいる。

久高島には総有制という特殊な土地制度があり、島の土地は、国有地、村有地、一部私有地(沖縄電力用地)をのぞき、全てが共有地(総有)とされ、住民はそれぞれの土地について利用権はあっても、所有権(処分権能)は認められていない。何か新しく建設物を建てる時には、12 名で構成される土地管理委員<sup>4</sup>に審査の申立てを行う。そこで、公共性があるかどうか、主義・主張がはっきりしているか、久高島にとってそれは何であるか、という 3 点が議論され、審査を通れば字総会にかけられる。字総会には島の住人が常時 50 名ほど集まり、ここで多数決がとられ最終決定が下される。この総有制という制度により、島外者等に対する土地の流出を防ぎ、「島」としての地域共同体を維持している。

この、土地の私有が認められず、土地は島全体のものであるという思想は、慣習的ではなく、「久高島土地憲章」(1989 年策定)という、前文<sup>5</sup>と 10 条からなる自治憲章として現代的に再生されている。

この土地憲章が作られた背景には、島外出身者の定住に対して土地利用の関係を明確に定める必要が生じたこと、リゾート開発などの観光事業の対象として久高島が取り上げられている中で、字久高としてどのように島づくりを進めていくのか、土地利用の秩序の守り方を考えていかなければならなくなったということなどがある。このような背景から、離島である久高島にも近代化の波が押し寄せていることが分かる。

それに加えてもう一つ重要なことは、慣習で残されてきた土地制度が、成文化しなければ存続が危ぶまれるほど、島に伝わっている精神文化が希薄化しているという事実である。

---

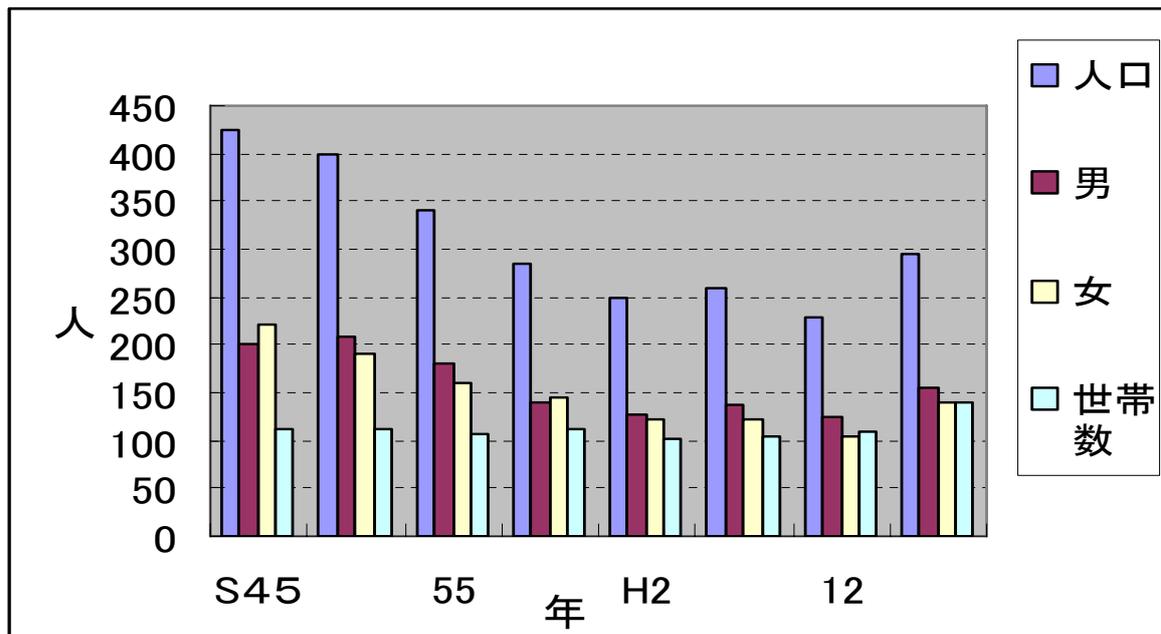
<sup>4</sup>南城市のホームページの中で、合併の経緯として「佐敷町、知念村、玉城村、大里村は、平成 17 年 1 月 25 日に、歴史・文化・生活圏などの面で密接なつながりを持ち、地理的にも隣接しており、一体的な行政施策の展開による沖縄本島南部の中核を担うまちづくりが可能なことから任意協議会を設立し、同年 2 月 28 日には法定協議会を設立して、協定項目及び事務事業の調整を行い、平成 18 年 1 月 1 日に南城市の誕生となりました。」と紹介されている。

<sup>5</sup>久高島土地憲章前文

久高島土地憲章は次のことを確認して宣言する。久高島の土地は、国有地などの一部を除いて、従来字久高の総有に属し、字民はこれら父祖伝来の土地について使用収益の権利を享有して現在に至っている。字はこの慣行を基本的に維持しつつ、良好な自然環境や集落景観の保持と、土地の公正かつ適切な利用、管理との両立を目指すものである。

次に、島の主な産業となっている観光業について見てみる。島の宿泊施設は平成 18 年 4 月 1 日現在でホテルが一つで収容人数が 50 人、民宿が 3 つで収容人数が 37 人となっている。また、観光客入込数は昭和 50 年で 2000 人であったのが、平成 17 年度は 30143 人と大幅に増加している。

表 1 久高島国勢調査人口・世帯数の推移



沖縄県企画部市町村課「住民基本台帳人口の概況（平成 17 年 10 月）」より。



図1 久高島の位置



写真2 久高島の地割制度

(平成19年9月5日14時42分 筆者撮影)

### (3) 「神の島」久高島をめぐる社会的状況

沖縄の固有信仰では、神の住む国として海上のはるかにあるニライカナイという国が信じられている。そこにはあらゆる富、豊穡、生命の根源があるとされ、生者の魂も死後にニライカナイに渡って肉親の守護神になる。沖縄の伝統的村落には、ニライカナイから1年に一度神が訪れてきて、人々に祝福を与えて再び帰っていくという信仰がある。

久高島には、久高島を神の島たらしめている創生神話が多く残っている。「昔、アマミヤ（女神）とシラミキヨ（男神）が東方の海の彼方（ニラーハラー）から久高島にきた」という創世神の神話や、「シラタル（兄）とファガナシー（妹）が鳥の交尾を見て夫婦になり、子どもを産んだ。」という人創り神話、「アカツミー（男）がイシキ浜で漁をしていたところ沖の方から白い壺が流れてきた。アカツミーは壺を拾おうとするが沖に戻されてなかなか取れない。ヤグルガー（井泉）で身を清めて白い着物を着て挑むと、ふしぎなことに難なくアカツミーの白衣の袖の中に入った。その白い壺には、麦、粟、アラカ、小豆の種が

入っていた。」という穀物伝来神話などである。

このような神話が残っている久高島は、ニライカナイにつながる聖地として「神の島」という名のもとに、沖縄において宗教的に特別な意味を持っている。琉球王朝最高の聖地である斎場御嶽も、久高島を臨む構図となっている。

そしてこれらの神話に登場する神々は久高島の伝統行事の中で、神職者に憑依して、直接この世に顕れ、神話を再現する。島には現在でも年間 30 余りの祭祀行事が行なわれている。

久高人が亡くなったとき、その魂はニライカナイに行き、神女の場合はニライカナイに行った後、魂は神として島に戻り、島内に 9 箇所ある御嶽に戻るとされている。島内にはこれらの御嶽の他にも、拝み所、殿、井などの聖域が散在しており、中でも島中央部にあたるクボー御嶽は久高島第一の聖域であり、男子禁制である。これらの聖地には標識がないため、島外の間人が一人でまわるのは難しい。

久高島の伝統行事の中で、久高島を「神の島」として一躍有名にしたのがイザイホーである。イザイホーは、久高島で 12 年に一度午年に行われていた伝統行事である。イザイホーでは、島で生まれ育った 30 歳から 41 歳までの女性が、祖母の霊力(セジ)を受け継ぎ、島の祭祀組織（詳しくは 3 章で述べる）に加入するとされている。しかし、イザイホーに参加できるのは島出身で島の男性と嫁いだ人というしきたりにより、1978 年は該当者はわずか 8 名であり、1990 年にはついに該当者がいなくなり、司祭する神役も生まれなかったため、1978 年を最後にイザイホーは行われていない。

伝統的なイザイホーは途絶えているものの、今も 30 余りの祭祀行事が残っている久高島は近年、「神の島」として様々なメディアなどで取り上げられ、また離島地域活性のイベントへの出展<sup>6</sup>、シンポジウムの開催など、注目を集めている。

メディアを通じたアピールの代表的なものとしてドキュメンタリー映画「久高オデッセイ」を紹介する。

久高オデッセイは、特定非営利活動法人沖縄映像文化研究所により制作されている長編記録映画である。4 部作となっており、「起」「承」「転」「結」で構成され現在は 2 部まで完成し、全国で上映会が行われている<sup>7</sup>。

「起」の部は、陸の文化中心の現代に、海の文化の重要性を思い起こさせる構成となっ

<sup>6</sup> 離島地域での交流人口の拡大、U・I ターン促進を図り、離島地域の活性化に資する目的で行う「離島」と「都市」との交流イベントであり、国土交通省が主催している「アイランダー2006」や、離島フェア開催実行委員会（18 離島市町村・沖縄県・沖縄県離島振興協会）主催の離島フェアでパネル展示・DVD 放映による久高島の紹介、試食コーナー、おみやげプレゼントなどを行っている。

<sup>7</sup> <http://www.lico.jp/kudaka/schedule.html>  
「久高オデッセイ」4 部作制作スケジュールより

ている。そして、西太平洋に開けた東南アジアから日本は、世界で最も島々が密集する多島海であり、中でも琉球弧は独自の海洋文化を築いてきたことを強調する。特に久高島はその原点ともいえる島であるが、現代文明の洗礼のまえに再生の道を模索し始めたことが描かれている。

「承」の部は、男たちが海へ出て、漁業に交易に活路を求めてきた一方で、島に残り狭い土地に糧を求め、男たちの無事を祈ってきた女の生き方を強調する。そしてその生き方の中にあつた精神を現代に蘇らせることが描かれている。

「転」の部は、離島での困難な日常生活の中で、新たな試みを始めた島人たちのすがたを描く。そして、彼らの気運をうけて島の外からも人が集まり、島が一定の方向にむかって動き出す様を描く。

「結」の部は、これまでの大人たちの努力を見て成長した子どもたちによる、世代交代と島の変化を描く構成になっている。生活基盤が整備され始めた島で、島民が活力を取り戻し、若い神人も登場し島人たちが団結してイザイホーに代わる祭りの原型を生むすがたが描かれる。

この映画の目的は、自然万物を神が宿るものとして畏れ敬ってきた精神を有し、土地総有制が守られてきた久高島で、近年急速に風土と文化が荒廃し、人々の活力も失われてきているという状況下で、島の再生に全力で取組む島人の姿を追い、現代に希望と励ましを与えるというものである。

上映された映画の中では、「新たな試みを始めた島人たちの苦しい戦い」として、2章で詳しく述べる島の有志団体である久高島振興会の活動が取り上げられている。また、この映画製作の手伝いをしていた方が、そのまま振興会のメンバーとなり、振興会が経営する久高島宿泊交流センターで現在も働いておられることから、この映画製作に振興会が深く関わっていることが分かる。したがって、この映画が目指す起承転結の流れは、振興会が目指す久高島の未来像と、大きくは一致しているはずである。

この映画は、その内容と目的からも分かるように、久高島の精神世界と、島民の活力の復活というテーマを中心に置いて製作されている。そして上映後のアンケートには、この久高島の精神世界を羨望する感想が多く寄せられる。

しかし、島の精神世界を誰よりも深く継承しているはずの、イザイホー経験者がこの映画の存在を知らなかったりするという事実がある。これは、精神世界をアピールする側と、精神世界を担っている側との間にある溝を示しているのではないだろうか。映画の「結」の部分では、イザイホーに代わる新たな祭りの原型が生まれるとされているが、この溝が埋まらない限り、同じ精神世界を維持した祭りが創出されることは難しいと思われる。そ

してこの溝が、島が観光化される上で大きな問題となるのではないだろうか。

次に、こうしてメディアにも取り上げられるようになった久高島の今後の方向性を考える上で重要な契機となった活動としてシンポジウム『ゆいまーる「琉球の自治」』の存在がある。

この定期シンポジウムは、琉球の島々における自治を実現するために必要な活動を実施し、その活動を通じ、琉球に住む人々が自治を自らの問題として考え、住民一人一人が自治の担い手として実践することを目的としている。

この第1回目が、平成17年3月10日から12日にかけて、久高島宿泊交流館で行われ、約20名が参加した。会の内容は、私有地のない土地制度を始めとする久高島における「自治」のあり方を学び、その後、各島々の自治の取り組みについて報告し合い、「自治」のあるべき姿、島嶼間のネットワークづくり、相互協力の可能性について話し合うというものであった。また、当日の参加者<sup>8</sup>の論考が学術書『環』の30号で特集されている

この座談会は、通常のシンポジウムのような専門家・学者・エリートが特殊な専門用語を用いて権威付けをして上から諭すように話すものとは違い、参加者全員が平等な立場で誰もが分かる言葉で語りあう、というスタイルで開かれた。そして、「他者への依存によっては混迷の度をさらに深めるばかり」とし、「現在抱えている課題は自分たちの力で解決する」という姿勢、つまり、島のために島の人間が当事者として立ち上がる、ということが大切だということを参加者は確認し合った。

そしてこの姿勢が、後で詳しくみていく「神の島」として久高島を観光化していく上でも、重要なものとなってくるのではないだろうか。

この集いに参加した、経済学博士で東海大学海洋学部准教授の松島は、山村留学の制度を久高島に導入した久高島留学センター<sup>9</sup>を、「外の開発手法を適用しようとせず、人間に着目し、人間の力によって島を育てようとしている」と評価し、「自分のエゴを押し付け、欲望を解消するために来島する観光客、移住者とは全く異なる位相に立っている」としている。そして、「島外者は自己利益の追求のために島を利用するのか、自治を促す担い手になるのかによってその存在意義が問われる」と述べている。

---

<sup>8</sup> 呼びかけ人は、松島泰勝（経済学者・石垣島出身）、安里栄子（作家・沖縄島）、石里金星（文化伝承者・西表島）、上勢頭芳徳（貴宝院館長・竹富島）、内間豊（久高島振興会顧問・久高島）、海勢頭豊（音楽家・平安座島）、高良勉（詩人・沖縄島）、金城馨（関西沖縄文庫・大阪大正区）、新元博文（平田部落森林組合長・奄美大島）、前利潔（経済史家・沖永良部島）、藤原良雄（出版社）である。

<sup>9</sup> 久高島留学センターは、離島振興、子どもの教育といった大きく2つの目標を掲げ2001年にスタートした。児童生徒数が廃校寸前のところまで減っている状態であった久高島で、「生徒数の確保」という点でも重要な役割を果たしている。



写真3 ヤグルガー  
(平成19年9月4日10時09分 筆者撮影)



写真4 イザイホーの祭場 (左・神アシャギと右・シラタル拝殿)  
(平成19年9月5日15時39分 筆者撮影)



写真 5-1 クボー御嶽入口

(平成 19 年 9 月 5 日 14 時 8 分 筆者撮影)



写真 5-2 クボー御嶽へ続く道

(平成 19 年 9 月 5 日 14 時 8 分 筆者撮影)



写真 5-3 クボー御嶽出入り禁止の立て札  
(平成 19 年 9 月 5 日 14 時 8 分 筆者撮影)

## II 久高島振興会の取り組みとその意義

久高オデッセイで描かれ、『ゆいまーる「琉球の自治」』で確認された、「島のために島の人間が立ち上がる」という久高島の自治を実現するために、中心的な役割を果たそうと活動しているのが久高島振興会（以下振興会）である。

振興会は、以下で説明する活動からも分かるように、島内と島外を結ぶ上でも重要な役割を果たしている。したがって、この組織の活動が島の外に対しての「神の島」久高島の観光化にも大きく影響を与えているといえることができる。

また、「神の島」久高島が観光化されていく上で生じる様々な軋轢も、振興会の現在の活動が、その内外からどのように受け止められているのかということにその一面が表れてくると考えられる。

ここでは、久高島振興会はどのような組織で、具体的にどういった活動を行っているのかということについてみていく。

### (1) 成立過程

沖縄開発庁は、離島の特性を生かした観光・レクリエーション施設などの整備を行い、他地域の人々との交流を推進し、明るい開かれたコミュニティの形成に資することを目的に平成2年度からコミュニティ・アイランド事業というものを推進している。9年度からは従来の施設整備事業に加え、新たにイベントなどを通して他地域との交流の推進を図ることを目的とした「沖縄離島交流推進事業」を実施している。

久高島振興会は、このコミュニティ・アイランド事業を知念村字久高に導入するために平成8年12月に区の組織として設立したコミュニティ推進委員会(内間豊会長)に端を発する。この推進委員会を起こした目的を内間豊氏は「島のおばあやおじいさんが死ぬまで安心して暮らせるような自治力をつけるため」と語っている。知念村(現南城市知念)によってハード面は誘致したが、ソフト面が全く整っていなかった状況に、島民、郷友会のメンバー12名が立ち上がり、36万円ずつ出し、その他にも島の関係者から少しずつ寄付が集まり、600万円の元手で振興会はスタートした。振興会は4年目で50万円の黒字となり、平成17年度は100万円の黒字となっている。主な財源は食事処とくじんと久高島宿泊交流館の収益である。

次に、振興会が具体的にどのような活動を行っているのかについてみていく。そこから振興会が、「神の島」久高島の今後にいかにか大きな影響力をもっているかということが見えてくる。

## (2) 活動内容

平成13年4月から離島体験宿泊施設、レストラン、特産品売り場などの運営が始動した。

久高島では、平成17年度よりニライカナイ久高島「神々の恵み」ブランド化事業<sup>10</sup>、体験滞在交流促進事業、沖縄離島地域観光情報発信事業などの公的資金を投入した久高島を活性化するための複数の事業が同時に進行しており、これらにより、過疎化の進行を阻止し、豊かな経済環境の基礎を整備することが期待されている。そして、振興会はこれらの事業の窓口機能も果たしている。

このように、振興会は島の外からの働きかけを、島の中へとつなぐ上で重要な役割を果たしている。

振興会が担おうとしている重要な役割に特産品開発があり、その中心となっている商品

---

<sup>10</sup> 久高島は、平成17年度に設けられた内閣府補助金による沖縄離島活性化特別事業の一環として取り込まれた「離島地域資源活用・産業育成事業」の対象となった。島ごとにストーリー(活性化の方向性を示すキーワード、キーワードの具体的な中身)を考え、それに沿った支援を行うというもので、これは、久高島での事業名である。現在、島の農産物であるノニを使用した「ノニ茶」に関しては、商標名を島の方言名で「ぷっかかー茶」とした商品のパッケージデザインも完成し、試験的な段階から本格的な生産販売へと移行する段階にある。

が「イラブーの燻製」である。

ここで、イラブーの燻製の歴史について、概説する。イラブーとは、エラブ海蛇のことで、イラブー漁の歴史は古く、ノロ制度以前からあったと言われている。イラブーを捕る権利は昔から久高ノロ家、外間ノロ家、外間根家の三家に決まっていた。1980年代頃からは、久高ノロ家だけがイラブー漁を行っていた。

イラブーは神の使いとして神聖視されているため、道具を使って捕ることは許されず、素手で首根っこを押さえて捕る。捕ったイラブーは生きたまま袋に入れ、久高ノロ家の小屋に保管しておき、捕ったものが120匹から140匹といった一定量になると、男たちが中心になって「バイカン小屋」と呼ばれる専用の燻製小屋で、丁寧に燻製処理をおこなう。とぐろ状とステッキ状に燻製されたイラブーは、強壯剤として那覇の市場に出荷された。イラブー漁を始める前と漁が終わった後に、久高ノロが守護神に対して礼拝を行っていた。しかし久高ノロが亡くなってからは、伝統的なイラブー漁はおこなわれず、一般のシマ人が漁をする状態になっていた。しかし、10年前からはイラブーが獲れない、イラブー漁を行うための神役人の不在などを理由として、イラブー漁は途絶えていた。

10年前から途絶えていたイラブー漁を、過疎化が進む島の活性化にはイラブーしかないという考えのもと、2年前に、振興会のメンバーの一人の方が、復活させた。イラブー漁の権利が与えられるハッシャという男性の役人になるには、配偶者がいるという条件があり、この方はその条件を満たしていないため、ハッシャ代行という形でイラブー漁を復活させた。彼は「久高島の生き方に直結して、そのまま商売になるものはイラブー漁しかないし、そうゆうところから島を活性化させていかなければならない」という考えでイラブー漁を再開した。現在は、外の男性が、正式なハッシャとして、神人から認められイラブー漁を継承している。

久高島宿泊交流館では、燻製の他に、イラブーの抜け殻をお守りとして売り、その利益で島のDVDを作ったり、文献収集を行ったりしている。

このように、久高島の特産品は「神の島」としての歴史を利用したイラブーが中心となっている。そしてここから、「神の島」というものが商品化されているという一面をみることができる。

そして、久高島での伝統行事であったイラブー漁を振興会の人間が復活させ、継承していることから分かるように、振興会は伝統保存においても主体的に働きかけており、島で行われる祭祀のバックアップも振興会が行っている。さらに、久高島の歴史や現状などを紹介するホームページも振興会が担っている。このような活動は「神の島」というブランド力を強める上で、重要な役割を果たしているといえる。



写真6 振興会が経営する久高島宿泊交流館  
(平成19年9月4日13時50分筆者撮影)



写真7 振興会が経営する食事処とくじん  
(平成19年9月4日13時24分筆者撮影)



写真 8 振興会が経営する久高島の待合所  
(平成 19 年 9 月 7 日 7 時 39 分筆者撮影)



写真 9-1 バイカン小屋  
(平成 19 年 9 月 5 日 15 時 39 分 筆者撮影)



写真 9-2 イラブー

(平成 19 年 9 月 5 日 15 時 39 分 筆者撮影)

### Ⅲ 調査結果と考察

上記のように、振興会が中心となった島の活性化政策に、メディアによるアピール、島の外からの働きかけも加わり、「神の島」として注目を集めている久高島では、その精神世界に惹かれてやってくる観光客も増加している。

しかし実際に聞き取りを行うと、「神の島」というものとはかい離した島の実情も浮かんできた。まずは、「神の島」と呼ばれる上で欠かせない、伝統行事の危機的状況、そしてその背景にある島の精神世界の希薄化である。その一方で、長い歴史の中でつくられてきた島独特の考え方は根強く残っており、それが久高島を「神の島」として観光化する上で、様々な対立関係を生じさせている一因ともなっている。それらの現状を、以下で詳しくみていく。

#### (1) 島の伝統行事の実情

##### (a) 伝統的な祭祀組織の構造

伝統行事の実情を検討するには、久高島での伝統的な祭祀の形態について理解しておかねばならない。本節ではまず、先行文献をもとに島本来の祭祀組織の構造を説明する。

久高島では、人は誕生とともに魂を体内に生きる力として宿していると考えられている。人が死ぬと肉体は消滅するが魂は不滅である。魂はニライカナイに行き、「シジ」と呼ばれ

るものになる。そして、シジになった魂は、この世に新たな「依代」になる存在が生じた場合、この世に、守護力を備えた存在として1. 神職者 2. 一般の人々という二つのケースに分かれて再生する。一般の人々のケースは祖父母から孫へおこなわれるものであり、誕生とともに体内に宿る魂のことである。

このような守護霊をひきうける者に構造的に順序をつけ、守護力を発揮させる仕組みとしたのが久高島の祭祀組織である。祭祀は家レベル、血族レベル、シマレベルという3つのレベルで展開される。まず家レベルでは、神職者就任式であるイザイホーを経て神女になった主婦がおこなう。

次に血族レベルでは、それぞれの始祖家の神職者が行う。久高島では、血族の始祖家をムトゥ（草分けの家の意）という。ムトゥ神とは、ムトゥに祀られている守護神であり、守護の範囲はその始祖家に帰属する人々である。それぞれのムトゥには守護神の依代としての香炉が置いてあり、人々は香炉を通してニライカナイのムトゥ神に礼拝する。

最後に、シマレベルの祭祀組織について見ていく。家レベル、血族レベルの祭祀がおこなわれていた久高島で神職者組織をあらたに編成することになったのは、500年程前、琉球王朝の第2尚氏王統第3代・尚真王の時代に祭政一致政策として、ノロ制度が施行されたからである。それまでのムトゥ神を求心力とするムトゥが存在する時代から、ノロを中心とするシマ全体を束ねる祭祀制度に移行した。

ここで、ノロ制度の構造を簡単に説明しておく。首里王府は琉球弧の間切と島々に、「ノロ」「ツカサ」と称する、土地を給する官人としての女性神職者を任命し、王府の祭祀を定めて、これをおこなわせた。間切、島々のノロ、司の上位に「三十三君」と称する高級神女を配し、さらにその上位に王妹（後に妻も就任）がなる「聞得大君」が君臨した。

ノロ制度ができたとき、久高島では東側の外間根家（フカマニーヤー）と西側のタルガナーの二大ムトゥを中心に家々が集まっていた。そこで、ノロ制度を施行するにあたり、この二つの始祖家のムトゥ神の引き受け者をノロ職に昇格させた。シマレベルの祭祀の司祭者は外間ノロ、準司祭者が久高ノロである。それからこの二人のノロの出た家に、殿（トウン）というシマレベルの祭祀場が設置され、それが現在の外間殿、久高殿である。この二大ノロにつきしたがう神職者が各家の30歳から70歳の年齢の主婦がつとめる神女である。70歳になると、フボー御嶽でノロや後輩神女たちに祝福されて引退する式、フバワクを行い、引退後は、大きい祭祀になると、祭場の隅で後輩達を見守っている。なお、家の祭祀はひきつづき行う。

両ノロには根人と称する男性神職者が対になるように配置されて、祭祀のときにはノロとは別座に座し、祭祀の経過を見守っている。さらに、補助者としてウメーギという神職

者がついている。両ノロを中心に、根人、ウメーギの六神職者と、さらに、外間根家から出る「外間根人」とそのウメーギを加えた八神職者を「クニガミ」と称している。クニガミはウメーギを除いて継承の形式が明確であり、ムトゥ神の神職者のように霊魂を感受する能力を備えていることは求められていない。

久高島では、ムトゥ神が男神であろうと女神であろうと、それを引き受ける神職者は女性が担っている<sup>11</sup>。ただし近年になって、男性がムトゥ神を担うケースも出てきているが、それは本来のかたちではない。現人神になれるのは、本来は女性だけであったが、ノロ制度以降、シマレベルの祭祀を行うにあたって必要上、男性も神職を担うことになった。その中でも、ソールイガナシーは、「竜宮神」という海の神を司り、漁労にたずさわる男たちを代表する神職者である。ソールイガナシーは、祭祀の裏方である村頭（ハッシャ）という、50代でつとめる役職を終えた、久高で生まれ、居住している健康な男性が年齢の順おくりで就任する。しかし、自分が先にたつて行う漁労関係の祭祀も、実際の儀式はノロとソージャク（40代の神女）に依頼する。このように、男性の神職者は形式的なもので、女性の神職者のように神霊を憑依させその守護力を発揮するというような種類のものではない。



写真 10-1 外間殿

(平成 19 年 9 月 5 日 15 時 52 分 筆者撮影)

<sup>11</sup> 久高島に限らず、沖縄では神と交渉し、神の力を引き出す「セジ」という力は男性より女性の方が強く、この霊力によって女性が男性より優位にたつという「をなり神信仰」という固有信仰がある。



写真 10-2 外間殿の中の香炉

(平成 19 年 9 月 4 日 9 時 51 分 筆者撮影)

(b) 伝統行事と祭祀組織の現状

以上のような伝統的な祭祀形態に対して、今日そのような祭祀がどのように運営されているのであろうか。祭祀の維持をめぐる様々な問題点について、聞き取りから明らかにしたい。

沖縄の固有信仰においても重要な意味をもち、伝統的な祭祀組織と豊富な行事により、今も「神の島」としてメディアなどからも取り上げられ、その精神世界を求めて観光客がおとずれている久高島の祭祀は、実はぎりぎりの状態である。現在、祭祀組織の最高責任者とされるノロは、久高・外間共に不在である。ノロ・ニーガン・ウメーギ・ニーチュの 4 役 8 名のクニガミがいなければ、伝統的な「イザイホー」を行うことは形式的に不可能であるが、今在職のクニガミは、外間ウメーギ・外間ニーチュの二名であり、この二名が島の祭祀組織のトップに立ち、行事の指揮をとっている。

クニガミの不在は島の伝統行事にとっては致命的で、島で暮らしておられる方の言葉によると、島の伝統行事の実情は、「ノロなどの最高責任者がいれば、少ない人数で従来の形式からかけ離れた祭祀行事を行うことは、それを担う神職者がかわいそうだし、神様にも失礼だというような理由で、中止の決定を下すかもしれないが、現実には最高責任者が不在で祭祀の存続に関して決定を下すことができない状態なので、祭祀は惰性で続いている」というような状態であるようだ。さらには「本当の意味での島の祭祀は、既に終わってしまったのかもしれない」とも語っていた。実際に、久高島を「神の島」として有名に

させた行事であるイザイホーに 1990 年に中止の決定を下したのは外間ノロで、その決定の理由は、神職者の不足などから従来の形式通りの祭祀を行えなければ、神から祟りや罰などがあるかもしれないという畏れと、その影響が子や孫世代に現れるというもので、これは現在までも根強く残っている久高島の固有信仰における考え方である。

このように、ノロが担ってきた、祭祀の内容の変更の最終的な決断とその責任を引き受けるという役割は、今現在残っているクニガミが代わることができないものであり、この「最高責任者であるノロの不在」は島の祭祀にとって非常に大きな問題となっている。

また、イザイホーを経て祭祀組織に加入した現役の一般神女は現在 3 名残っているが、2008 年のフバワクにおいて、全員が引退の儀式を行い、島には現役の神女が一人もいなくなることになる。厳密に言うと、従来の祭祀組織の規則に従うと 2008 年が引退の年になる神女は二名で、もう一名は 2009 年が引退の年なのだが、一人で神女の役割を果たすことは不可能で、一人だけ残されるのはかわいそうだという理由で、クニガミが三名同時に引退するように決定した。

祭祀組織においての一般神女の役割は、酒神の接待、クニガミの補佐などで、祭祀中の実質的な役割はほぼ一般神女が担っており、その一般神女が一人もいなくなるということは、伝統祭祀を従来の形で続けるということが決定的に不可能となり、祭祀行事の中身をこれまでよりもさらに大幅に省略、変更せざるを得なくなるということである。伊豆氏の話によると、この危機的状況に対して「誰も立ち上がろうとしていない」という現状で、その背景には「立ち上がろうとする者は集団の中で浮いてしまう」という島の考え方が共有意識としてあるからだそうだ。

島の伝統的な祭祀組織は、厳しく階層化され、導く役割と、ついていく役割が明確であったが故に、ノロというリーダーの不在により導く役割がなくなり、実質的な組織が崩壊しつつある今も、厳密な祭祀組織の構造によって長い時間をかけてつくられた伝統的な考え方は消えずに、それが逆に残された者の中で「誰も立ち上がろうとしないし、立ち上がれない」という状態を生んでいるのではないだろうか。

また、島の重要な伝統行事である旧正月の祭りなどには、島の外に出て行った若者は帰ってこない。「それはある意味で島への反発でもあるし、伝統行事を継承する価値がないと考えられている」という面もあるそうだ。80 代、70 代の方とそれより下の世代では伝統への意識に大きなギャップがあるということである。ここに、久高島の精神世界の希薄化が表れている。

聞き取りを通して、島の実情と、メディアなどによりアピールされている「神の島」久高島との間には差があるということが明らかになった。そしてここから、「神の島」として

神聖視されている久高島は、聖地を観光化しているというよりは、観光化により、実際は危機的状態にある島を聖地化しているという構図が浮かんでくる。

ではその観光化の方向性は、一体どのようなものなのだろうか。そして観光化が、島にどのような影響を及ぼしているのだろうか。

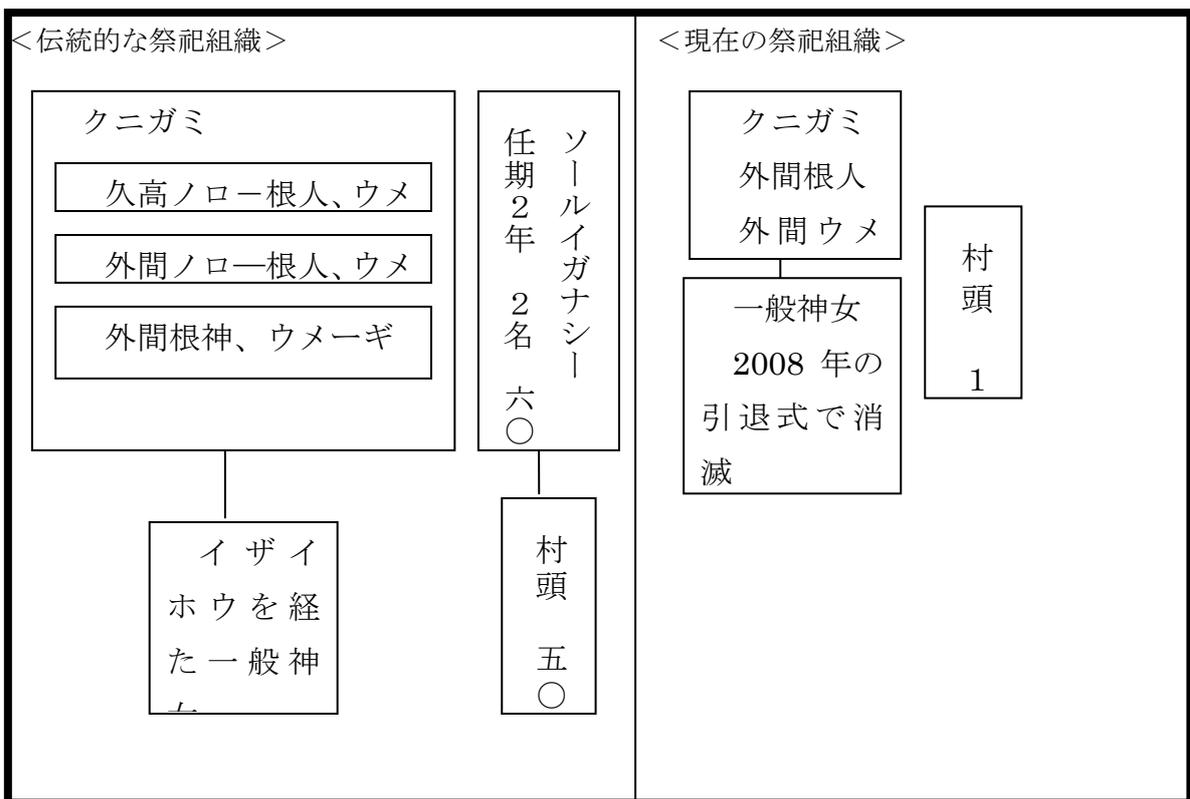


図2 久高島における祭祀組織の現状

## (2) 久高島における聖地観光の方向性と、その実態

南城市の行政側は、南城市全体で聖域というアピールポイントを押し出す観光政策の中で、世界遺産に登録されている斎場御嶽と、「神の島」久高島が2大聖域であるという意識を強く持っている。そして、南城市の観光政策の中で、それらの聖域を生かしたイベントも、振興会と協力しながら行っている。その一つが、2006年6月24日から25日にかけて行われた「東御廻い国際ジョイアスロン in 南城市大会」である。この大会は、世界遺産「斎場御嶽」を中心に、琉球王朝聖地巡礼「東御廻い」を体験し、その歴史遺産と精神文化に学ぶというものであった。久高島をめぐるコースは、6月24日に開催され、振興会が全てを取り仕切った。

このイベント内容からは、「巡礼」という信仰心を前提とした行いが、果たして「体験」

できるようなものなのかという疑問が生じてくる。聖地巡礼は「体験」となった時点で、本来の巡礼の精神とは離れてしまうのではないだろうか。

上記のもの他に、南城市と振興会が協力して行ったイベントに、南城市役所の観光・文化振興課が担っている体験滞在交流の拠点であるがんじゅう駅・南城により開催された「世界遺産と久高島めぐり」というものがある。



写真 11 南城市体験滞在交流センター・がんじゅう駅・南城  
(平成 19 年 11 月 21 日 16 時 30 分筆者撮影)

このイベントは平成 19 年 11 月 17 日の 10 時から 17 時にかけて催され、内容は世界遺産の斎場御嶽と久高島を専門のガイドが案内するというものであった。定員 20 名で、当日の参加者は 16 名で、既に久高島に訪れたことがある方が多かったそうである。そして、実施後のアンケートによると、満足という声が多く、その理由としては「専門のガイドがついていた」というものが多かったそうである。

このことから、久高島に来る観光客は、「神の島」という精神世界に惹かれてやってきているが、その意味、歴史について詳しく知っている訳ではないという実態が浮かんでくる。

付け加えると、このイベントで久高島における「専門のガイド」を担当したのは振興会に属する男性であり、実際に島の祭祀などに関係の深い女性ではない。ここにも、後でも

詳しく述べる「神の島」としての観光化を進める側と、観光化される対象である島の祭祀の担い手である側との間に、観光化に関する意識の差が表れているのではないだろうか。このように、久高島における観光のイベントを積極的に催している南城市役所だが、久高島の観光の方向性は、基本的には振興会に任せ、行政はあくまでそれをサポートしようと考えている。その考えの背景には、「島のことに外から口を出すべきではないし、また出すこともできない」という意識がある。

次に久高島の現区長で元久高島振興会副会長、また南城市の体験滞在型交流検討委員でもある西銘政秀氏が考える久高島観光の方向性についてみていく。区長は、自身を「久高島の営業担当」とであると語っており、観光についても積極的な考えをもっている。

久高島の観光は、地域文化を生かすという点で、「必然的に神行事と共に歩んでいかなければならず、そのために神役人も十分に話し合っていかなければならない」と考えている。一年を通してある数々の伝統行事は観光客にとっては非日常でも、島の人間にとっては日常のことで、島の行事を最優先とし、行事の期間中は場所なども制限して、見せられる部分だけを見せるようにしていく。このように、制限をしなければ持続可能な観光にはならないと考えている。また、この制限ということに関しては先進地に学ぼうと、竹富島<sup>12</sup>の観光の在り方などを参考にしている。伝統保存と、観光誘客のバランスが難しく、保存についても、島人が考えている「保存の程度が違う」から難しい。「今の沖縄のように数だけを求めたら島はつぶれる」と考え、「量は求めず、島の価値を認めてくれるリピーターの人々に続けて来てもらえるようになって欲しい」と語っていた。また、観光については、南城全域のネットワークが必要であると考え、自身は島と本島を結ぶパイプ役であると考えている。このように見てくると、観光化を担う側に、「神の島」としての地域文化を生かす、という方向性の一致が見られる。

ただし、こうした観光化からいくつかの問題が表れている。区長によると、島に来る観光客の7割は女性であり、スピリチュアルな世界を求めて来る人が多い。また、リピーター率も7割にのぼる。沖縄では、久高島は神の島であり、簡単に足を踏み入れることはできないという意識が琉球王府の頃から続いており、観光客は圧倒的に内地の人が多いそうである。

久高島には前記の通り、土地の所有権を認めず使用権のみ与えるという総有制が伝わっているため、観光化に目をつけた外部の資本によって島の土地が荒らされるという心配は

---

<sup>12</sup> 沖縄県の八重山諸島にある島。沖縄県八重山郡竹富町に属している。八重山の中心地である石垣島からは高速船で約10分程（約6km）の距離にある。周囲8kmのこの島で、平成元年には86,721人だった観光客数が、平成18年度には424,965人まで増加している。区長は、「竹富島で観光を進めた人が今は後悔して、久高島のことを心配して忠告してくる」と語っていた。

あまりない。

しかし、調査を通して、観光化により島で発生している様々な問題を見て取ることができた。

まず、観光客側の問題として、観光客が島で神聖とされている場所に興味本位で入ってしまうということがある。また、島の神聖性に惹かれてやってくる人たちが、勝手にそのような場所で儀式を行ったりしてしまう場合もあるそうである。このような問題が生じた結果、島の第一の聖域であるクボー御嶽は、従来は島の女性のみ立ち入りを許可されていたが、今は島民も含めて誰も、特別なとき以外は入ることを許されていない。その他、インターネットなどで流される久高島の神聖性にまつわる、事実ではない内容を信じて島にやってくる観光客もいるそうである。

次に島側の問題をみていくと、島の精神世界を案内するガイドツアーにおいて大きな問題が起こっている。島のガイドツアーは、振興会が中心となって内間豊氏、西銘政英氏、西銘康男氏が担当している。料金は最も安くて2時間5500円で、時間、参加人数によって増えていく。しかし、島民の中から、島にいる観光客に声をかけて、振興会のものより高い料金でガイドを行う者が出てきたそうである。さらに、現在ノロ職は不在である島で、「私は島で唯一のノロである」といった嘘をついて、観光客に声をかける人も出てきている。同じ人物が、NHKが島の精神世界についての取材を行う際にも、代表として出演したりしてしまっている状況である。

現在の久高島振興会の理事長である西銘史則氏は、「沖縄型エコツーリズムの試み」(対米協出版)のレポートの中で、「観光産業によって、外来者を案内することにより生活の糧を得て、内在者に誇りを持たせ、精神文化の継承を容易にすることも狙っている」と述べている。しかし、上記のようなガイドの問題をみてみると、島の実情は西銘史則氏が考えているような方向には向かっていないと考えられる。調査を進めるとむしろ、本当に「神の島」としての精神文化を大切にしている人間ほど、観光化自体に違和感を持っているのではないかという一面が見えてきた。振興会の初代会長である内間豊氏も、「観光という言葉からは、ビジネス的なにおいがするからあまり使いたくない」と考えており、「観光というより、島の外の人々と交流がしたいだけ」であるという。そもそも振興会が発足した当初の目的は、初代会長の内間豊氏の言葉を借りれば、「おじいやおばあが一生島で暮らせるような島にする」ための島の自治力を高めるというものであった。そして内間氏自身は、観光産業によってそれを進めようという認識はもっていなかったようである。この点で、振興会理事長の西銘氏が、『季刊しま』で連載している「神の島と久高島振興会」の中で述べている「NPO久高島振興会は、島の経営資源である人、モノ、金を有効に使って、「神

の島」に恥ずかしくないビジネスを展開させることを優先させるべきだと、個人的には常にそう思っている。」という意見と一致していない。ここから、島の活性化を担っている振興会の内部でも、意見の対立が存在しているということが分かる。

このように、島の観光化に関しては様々な問題が起こっているが、その問題の根底には、久高島を「神の島」としてまなざしながらも、島の歴史や伝統的な考え方、今の島の現状については深い知識をもっていない観光客が非常に多いという問題があるように思われる。神職者でもある島の女性からお話を伺ったところ、「‘神の島’に来たという優越感に浸っているだけで、神の島と呼ばれる意味の深さを分かっていない」観光客が多いと感じているそうである。

また、島側の問題からは、昔から伝わってきた島の精神文化が希薄になってきているという現状が浮かんでくる。

以上のようにみえてくると、まず、観光化を担う立場にある人間の、観光の方向性に関しては、地域文化を生かした観光として「神の島」ということをアピールポイントとする点で、大きくは一致している。しかし、そのアピールポイントとされている「神の島」ということをめぐって、観光化が進む中で多くの問題が生じているということが分かる。

そして、さらに聞き取りを進めると、久高島が地域文化を生かした観光を進める上で、無視することはできない様々な対立する認識が島の中に存在していることが明らかになってきた。

### (3) 様々な対立する認識

#### (a) 内対外

聞き取りを進めると、観光化をめぐる認識の対立として、まず、沖縄と大和という、内と外の対立が浮かびあがってきた。イザイホーを経験してきた島の高齢者たちは、島の神聖性を目的にやってくる本島からの観光客が島で祈りなどを行っていく姿が目立ってきたため、「大和に久高島のエネルギーを持っていかれる」「久高島はどうなってしまうだろう」と心配しているそうである。島を一回出た後、神に呼ばれて久高島に戻ってきた人間に対しても、「声の主は久高島の神ではなく大和の神ではないのか」というような声が上がります。

また、久高島対それ以外の沖縄というスケールでの内対外という対立も見られた。例えば、現在の久高島振興会の理事長は、久高ノロの三男を父に持つが、久高島で生まれ育った訳ではなく、現在も那覇で仕事をしている。島に住んでいない人間が久高島振興会の理事長を務めていることに対して、振興会の内外から不満の声が上がっている。そして、このことが島民と振興会の溝を深めている大きな要因の一つになっているように感じた。

## (b) 男対女

振興会と、島民の溝を深めているもう一つの大きな要因が、男と女の対立である。そしてこの対立こそが、「神の島」として久高島を観光化する上で大きな課題となっているのである。

久高島の長い伝統の中では、男の一生と女の一生はほぼ決められていた。男は海人、女は神人である。久高島では基本的には女は守護する者、男は守護されるものであった。結婚を通して結ばれた夫婦は、女は神人として、一生、夫や子どもたちの守護者として生きる。一方、男は16歳になると久高島の一人前の男・正人となり、70歳で引退するまで、妻や母たちがおこなっている祭祀を経済的に助ける。戦前まで、働き盛りの男たちは出漁し半年以上島を留守にするのが常であった。男たちが出漁中、女たちは祭祀を行い、出漁中の男たちの安全と大漁を祈ってひたすら帰りを待っていた。

このような伝統が背景にあり、イザイホーを経験した年配の女性の中には「ずっと祈り続けてきたのは女だから、男は祈りの意味を分かっていないし、イザイホーの意味も分かっていない」という考えがある。

また、この女と男の違いに対する認識が、そのまま振興会に対する考えにシフトしているように思われた。それは、この男と女の違いの話が、振興会のことを聞いた時に出てくるということからも伺える。そして振興会に対しては、「振興会の人間が島のものを何でも外に売り出すのが良くない」という言葉が出てきた。また、振興会の活動の中心の場所でもある久高島宿泊交流館が建っている場所は、島の祭祀にとって重要な場所であるので、そこに建てることには神事に関わる者から反対の声が上がっていたという経緯もある。このように、女性と男性は神に対しての思いに差がある。

この長い歴史の中で形成された男と女の違いが、現在の久高島でも根強く残っている。そして、島を活性化するために何とかしなければならないと考え、「神の島」を経済的に引っ張っていかこうとする振興会を中心とする男と、実際に祈り、「神の島」を「神の島」にしている女たちの間に溝が生まれているように思われる。

振興会の人間も島の神事に関してはイザイホーを経験した高齢者に相談なしに進めることは許されない。内間豊氏も「久高島に人生を捧げてきたおばあ達には頭が上がらない」というようなことを語っていた。

このように、島の祭祀に関しては女性の絶対的な優位性が残っているのである。

## (c) 伝統行事の存続に関する考え

「神の島」として久高島を語る上で、島の伝統行事は大きな意味をもっている。したがって、「神の島」として観光化を進めるならば、この伝統行事の存続も、一つの大きな課題となるはずである。上に述べたような二項対立の図式ほど単純ではないが、この伝統行事の存続をめぐっても、島には微妙な考え方の違いが存在している。

1978年を最後に途絶えているイザイホーを経験した世代の方にお話を聞くと、イザイホーが本来行われる時期になると、やはり寂しい気持ちになるということであった。しかし、後継者の不足などからもイザイホーが復活することはもうないだろうとおっしゃっていた。

これに対し、イザイホーの復活も可能だという意見も聞かれた。久高島で小やどSAWAという民宿を営んでいる西銘佐和子さんは、最後のイザイホーが行われた年にはまだ小学校4年生で、その意味も深く考えることもなく島の外で暮らしていたが、神の声を聞いて久高島に戻ってくる決心をし、今は神職者としても活躍されている。西銘さんの話では、「祭祀が途絶えていくのは何故なのか、神様の子（神職者）が育たないのは何故なのか」それを知ることが大切で、今は神の声を聞いて、祭祀が復活できる基盤作りをしているところだそうである。したがって、その基盤ができれば、イザイホーも必ず復活すると考えている。ただし、「それを外に見せるかどうかは分からない、もしかしたら見せたことによって祭祀が途絶えてしまったのかも知れないし、それはまだ分からない」とも話されていた。

また、今の島で神の子、すなわち神職者が育たないのは、今の神人たちにも問題があると指摘していた。その問題とは、神人たちが後継者を育てることに力を注がず、今の組織の中で自分が上になることばかりに気をとられているということである。西銘さんは「そんな状態では神の声は聞こえない」と非難している。そして、観光客に対して勝手にノロだと名乗る人間が出てくるのも、そういう神人たちの態度にも責任があると考えている。

内間豊氏も、「形式ばかりが目されているが、何故行事ができなくなったのか、久高島にとってそれは何だったのか」という議論をこれからしていかなければならないと話しており、また「その議論の場を提供できるのは振興会しかない」と考えている。そして個人的には、「行事を残すことが大切なのではなく、島に住む人の心に何が残っているのかが大切だ」と考えており、イベント化された偽物は切り捨てた方が良く考えている。そして、「皆の意識の中に本物が残っている間に、偽物は切り捨てないと、いつか偽物が本物になってしまう」という危機感をもっている。

次に、南城市役所の観光・文化振興課の方は、「今のおばあ達の世代がいなくなれば、もしかしたらイザイホーは復活するかもしれない」と語っている。それは、イザイホーを経験した人々は、本来のものとはかけ離れた儀式が行われることは許さないが、若い世代は

観光のためにイベント化して行くかもしれないと考えているからである。しかし、そのような偽物は、「おばあ達が大切にしてきた精神とは違うものなので行くべきではない」と考えている。

区長は、「歴史に反してゆがめて再開することはできないが、イザイホーに参加できる資格を広げることも考慮に入れなければならない」と述べている。

最後に、振興会の理事長である西銘史則氏は『季刊しま』での連載の中で、「掟やシステムを変えない限り、神行事の継続が極めて困難になる時期が、以外に近い将来にやってきそうである」と述べている。

このように、島の伝統行事の存続に対しては様々な立場があるが、その中に、形式を重んじる立場、意味を重んじる立場、伝統行事を残すこと自体を重んじる立場といった対立が見えてくる。そして、イザイホーを経験した世代は、従来の形式の中に伝統行事の意味が含まれていると考え、島の伝統行事との精神的な関わり方が薄くなると、逆に、伝統行事を残すこと自体を重んじるといった傾向があるように思われる。

伝統行事の中でも、イラブー漁の復活に関しても様々な意見がある。イラブー漁の復活が決定される際に、神人たちは「喜ばしいことです」と言ってそれを許可した。これに対して島の中から「それは本当に神が望んでいることなのですか」という反対の声も上がったそうである。そして、お話しを伺った女性の中には、イラブー漁に対して「今行われているものが、どれだけそのもとの深さ、意味を残して行われているのか」といった違和感をもっている方もいた。「伝統行事の深さの表面だけをすくいにとって、神の島ですよと言って売り出しても、長く続かない」と考えている。

ここまで、伝統行事の存続に対する様々な立場をみてきたが、伝統行事の存続は、形式よりもその意味を残すことの方がはるかに難しいのではないだろうか。齋藤ミチ子(國學院大學日本文化研究所助教授)による「記録されたイザイホー 画像から見た祭祀状況と聖域の変容」の中でも、「形式のみの踏襲であれば、収録されたVTRや画像、夥しい量の関連報告書や著書の類を参照すれば、型通りの再現は可能であろう。しかし、担い手のひとたび萎えた祭儀への心意性の復活は期待出来ない。イザイホーにおいては、何にも増してこの心意性こそが必須な要因なのである。」と述べられている。

おわりに

これまでの検討で明らかになったように、久高島には様々な、相反する立場が存在している。しかし、これらの考え方の違いは、字総会などの集会ではなかなか表に出てこない

そうである。それは、久高島に古くから伝わる「メーナイメーナイしてはいけない」すなわち、人より前に出てはいけない、といった考えが島民、特に女性高齢者の中に根強く残っているということが大きな要因であると考えられる。しかしその一方で、伊豆氏の言葉によると、「歴史がある分、一つずつの家系にそれぞれの歴史があり、それが一つの国のようになっていて、それぞれが自分たちに正当性があると信じている」というような状態でもある。

振興会の内部でも、個人的な考え方の違いが絶えず、区長は「もっと大きな集団なら小さい食い違いにいちいち対応しなくても大丈夫だが、振興会のような小規模の集団では小さな食い違いも無視できないから大変だ」と語っている。そして、その小さな食い違いに時間をとられて、なかなか前に進まないという現状もある。

島の観光化についても、さまざまな立場がある。その中心になっている問題が、伝統保存と観光誘客という問題である。

ただし、この二つの主張は、久高島の場合、決して相反するものではない。したがって、この問題は保存対開発という、単純な二項対立ではあらわすことができない。観光客が求めているものは、「神の島」としての久高島であり、区長は「それがなければお客さんは来ない」と認識している。しかし、その「神の島」の捉え方に対して、認識の亀裂が生じているのである。

内間氏は、「伝統行事がこの島を神の島にしているのではない、この島での生き方、精神こそが神だったのだ」と語っている。そして、「物質としての神は存在しない」と考えている。

一方で島の女性たちは、伝統行事を残すこと自体を重要視せず、その意味の深さを重要視するという点では内間氏の考えと一致しているようだが、「神」という確かな存在がしっかりと意識の中にあるという点では少し違っているように思われる。

この女性と男性の認識の違いが、島でもう一つ、大きな問題を生じさせる原因になっている。それは、島を活性化させる上でのリーダーシップの不在である。昔は、男は漁に出て女は島に残って祈るという役割分担がはっきりしていたが、「近代化が波及すると、漁業以外の生業を追及し始め、島外に活路を見出すようになり、そのまま彼の地で家庭を築く例を少なからず見るようになった。」こうして若者もいなくなり、過疎化に拍車がかかった状態を食い止めるには、島の中で仕事をつくるしかない。そしてその仕事は、「神の島」であるという歴史を無視したものにはできない。しかし男性が中心となって「神の島」ということで活性化させようとした時、女性の優位性を無視することはできない。決して前に出て島をどうにかするという行動は起こさないが、久高島を「神の島」にしてきたのは女

性の方なのである。

こうして、ヒエラルキーが集約できずに、誰もリーダーシップを発揮しきれないでいるという現状がある。

リーダーシップを発揮する人物がいないという状況をつくりあげるもう一つの大きな要因に、「土地総有制」という特殊な制度がつくってきた島の精神がある。内間豊氏は「久高島はこの土地制度によって久高島になっている」と考えている。この特殊な土地制度により育てられてきた「平等・公正の精神」が一方で、誰も前に出ない、出ることを許されない、という状況を根強いものにする一端を担っているように感じる。

今回の調査で浮かんできた問題は、「神の島」と呼ばれる久高島が、「誰にとっての聖地なのか」という問題である。「神の島」という聖域性だけが注目され、メディアからも取り上げられ、その「聖域性」というアピールポイントで観光誘客が進められるにつれ、その本来の意味があいまいになり、イメージだけが強くなっているという流れがあるように感じる。そして、「聖地」の解釈が開放され、「聖地の非聖地化と新たな聖地化」という現象が起こっているのではないだろうか。この「新たな聖地化」という現象が進むと、聖地は一つの商品として対象化され、ある意味「誰のものでもない」という状態になってしまいかねない。そうすると、聖地は「遺跡」となり、その本来持っていた意味は過去のものとなってしまうのではないだろうか。

今の久高島の状況は、「過疎化が進み、このままだと島がまるごと廃墟になってしまいかねない」状態であり、その島を立て直すためには、久高島独自の文化を生かした観光も一つの有効な手段である。区長が先進地としてあげている竹富島も自然環境、伝統文化を軸とした自律型観光により、15年連続人口が増加している。

しかし、聖地が観光化される時、島に聖地としての精神性がしっかりと継承されていなければ、それは持続的なものにはならないし、一つのブームで終わってしまう危険性もある。「経済的な自治」は「精神的な自治」があってこそ成り立つものだと考える。「精神世界の継承」という点が、久高島にとって一つ、大きな課題であるように感じる。島の状況をみると、誰がこの「精神世界の継承」に責任をもってリーダーシップを発揮するのかという問題が浮かんでくる。

私は、伊豆氏の言葉を借りると、「外からの風も必要」なのではないかと感じる。竹富島の例を見ると、竹富島は現在国から7つの重要無形文化財の指定を受けている。そしてゆいまーる「琉球の自治」に竹富島から参加した上勢頭氏はこれらの指定が「自治の動機付けとなった」と語っている。これは、外の力に頼っているのではなく、外の力を利用してはいえる。久高島にも、このような「外の力を利用する」という側面が必要なのでは

ないだろうか。そしてこの「外の力を利用する」ということを進める人物に求められるものは、「当事者でありながら、島の状況を客観的に見ることができる」という姿勢である。当事者であるという事実は「内と外」という意識が根強く残っている久高島では必要不可欠な条件であり、また、当事者であるからこそ、外からのイメージとは違った島の実情を把握して動くことができる。

最後に、外から久高島をみる側にも求められるものがあると思う。それは、久高島を単純に「神の島」という枠組みの中に入れて、特殊な土地制度なども含めて、現代の日本社会と比較してむやみに神聖視するのではなく、久高島も現代の社会にある一つの離島だという視点である。それを無視して、島の文化が衰えていくことを嘆く資格は誰にもないのではないだろうか。私自身も、島の「精神世界の継承」という問題を考えたとき、では過疎化が進む島で、誰がその精神世界の、次の担い手になるのかということも考えていかなければならないと思う。外から島を考えるものには、「どこまで当事者として考えられるか」ということが要求されているのではないだろうか。

この論文を執筆するに当たり、貴重なお時間を割いていただき、真剣に質問に答えて下さり、勉強不足の私にたくさんのことを丁寧に教えてくださったインフォーマントの皆様、この場を借りて厚くお礼申しあげたい。

## 参考文献

安里英子 (2007) 『久高島・自治の可能性—島の霊力と「久高島土地憲章」』 藤原書店『環』  
116～122 頁

内間豊 (2007) 『久高島の思想—海と共に生きる聖地の人々—』 藤原書店『環』 98～111  
頁

沖縄県知念村 (2003) 『知念村観光振興計画』

上勢頭芳徳 (2007) 『久高島と竹富島』 藤原書店『環』 123～131 頁

斎藤ミチ子 (2003) 「記録されたイザイホー 画像から見た祭祀状況と聖域の変容」

阪本清治 (2007) 『久高島留学とは何か—現代社会が失いかけている学びの場』

南城市役所総務企画部 (2007) 『2006 年度沖縄県南城市/市勢要覧』

西銘史則 (1999) 『沖縄型エコツーリズムの試み』 対米協出版

西銘史則 (2007) 『神の島と久高島振興会』 日本離島センター『季刊しま』 210 号 96～102  
頁、211 号 116～122 頁

比嘉康雄 (2000) 『日本人の魂の原郷沖縄久高島』 集英社新書

藤原書店『環』 112～115 頁

松島泰勝 (2007) 『久高島で考える「琉球の自治」』 藤原書店『環』 78～97 頁

久高島ホームページ

<http://www.kudakajima.jp/> (2008/1/10)

南城市役所ホームページ

<http://www.city.nanjo.okinawa.jp/> (2008/1/10)

竹富町役場ホームページ

<http://www.taketomi-islands.jp/> (2008/01/8)

久高オデッセイへのいざない

<http://www.lico.jp/kudaka/index.html> (2008/01/8)

フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

<http://ja.wikipedia.org/wiki/> (2008/01/09)

がんじゅう駅・南城ホームページ

<http://nanjo-taiken.com/> (2008/1/12)

(25653 字)

# 「沖縄移住ブーム」の成り立ちと現状—石垣島を事例として

西村 翠

## 目次

I はじめに	2) 石垣島の移住の現状
II 沖縄イメージの形成・分化	3) 石垣島移住者に対する聞き取り調査
1) 沖縄イメージの形成	V 移住ビジネス
2) 沖縄イメージの分化	1) 書籍による移住紹介
III 沖縄の観光発展と移住	2) 移住仲介業者・不動産業者
1) 沖縄観光の歴史	VI おわりに
2) 沖縄観光の変容	注
IV 石垣島における移住の現状と聞き取り調査	参考文献
1) 石垣島の移住の歴史	参考 URL

キーワード：海洋博 沖縄イメージ 観光 石垣島 移住ビジネス

## I はじめに

近年、日本本土から沖縄への移住者や長期滞在者が増加しており、「移住ブーム」としてテレビ番組や雑誌など多くのメディアでとりあげられている。しかしながら、近年の移住者の中には住民票を移すことなく移住してくる「幽霊人口」が相当数存在していると予想されるため、移住者の動向について正確に鳥瞰できるデータは存在しない<sup>1)</sup>。

参考までに沖縄県における県外転入・転出・転入出超過数の推移(図1)をみると、1998年に転入超過に転じて以降、2001年には転入超過数が一度は激減するものの、その後は転入超過数が急激に伸びている。また、他都道府県からの転入者数の伸び率の推移(図2)をみても、2005年には全都道府県の中で最も高い伸び率となっており、沖縄県全体として転入者が2000年前後から急増しているということがわかる。近年の移住の傾向とし

<sup>1)</sup> 八重山毎日新聞 2006年7月27日付の「幽霊人口5000人？」という記事による。一部の新聞等の報道によると石垣島だけでも5千人を優に超えるのではないかとされるほどで、納税の義務を果たさないため市の財政が圧迫されるなどの問題を誘発している。

では中高年の早期退職者や定年退職者が多いことにある。近年、団塊の世代が定年退職をむかえるにあたって社会のさまざまな面で影響や問題が発生しているが、移住についても例外ではない。定年後、沖縄で永住もしくは長期滞在をしようとする人がこれからさらに増加することが予想される。

では、なぜ多くの人々が沖縄を移住先として選択し、「移住ブーム」とよばれるほどにまでなったのか。その理由の一つとして挙げられるのが、テレビや映画などのメディアを通して浸透していった「沖縄イメージ」である。個々人によって沖縄に対するイメージに多少の差異はあるとしても、「青い海」や「独特の文化」といったイメージを持っている人が大多数であるだろう。そこで「沖縄イメージ」がどのように形成され、人々の意識の中に浸透していったのかということについて検討する。また、沖縄には1972年の本土復帰後、沖縄国際海洋博覧会を経て観光発展してきた経緯があることから、本論では沖縄の観光に関する過去の調査結果や統計資料から沖縄の観光の変遷と近年の移住増加の関連性についても論じていく。

ここでひとつ留意しておかなければならないのは「沖縄」ということばはあくまでも総称であるということだ。「沖縄」と一口にいっても、本島だけでなく、宮古諸島や八重山諸島といった先島諸島やその他多くの島々が存在しており、それぞれの地域には独自の文化や風習が存在している。しかし、これまでの沖縄に関するイメージや観光に関する研究では離島は「沖縄」に含まれた状態で未分化のまま扱われることが多かった。そこで本論ではひとくくりに「沖縄」として論じるのではなく、本島や離島を分けてとりあげ、それぞれにおけるイメージ形成や観光発展にはどのような違いがあるのかを論じていく。

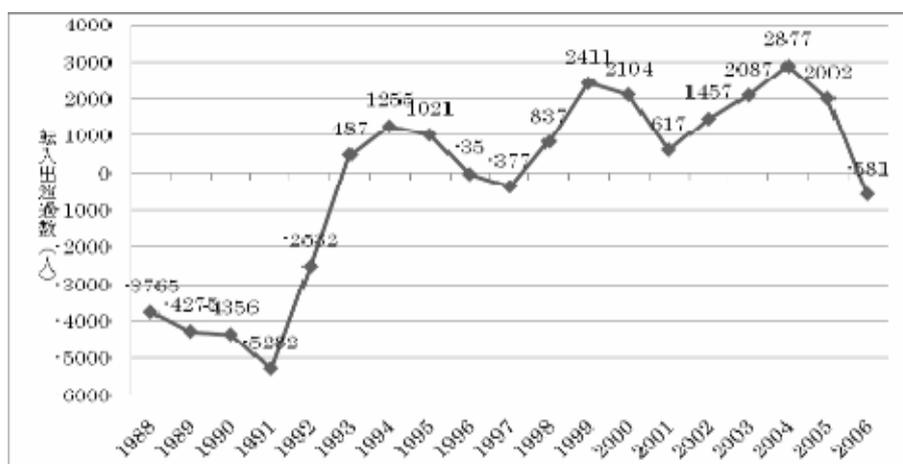


図1 沖縄県における転出入超過数の推移

総務省「住民基本台帳人口移動報告」をもとに作成

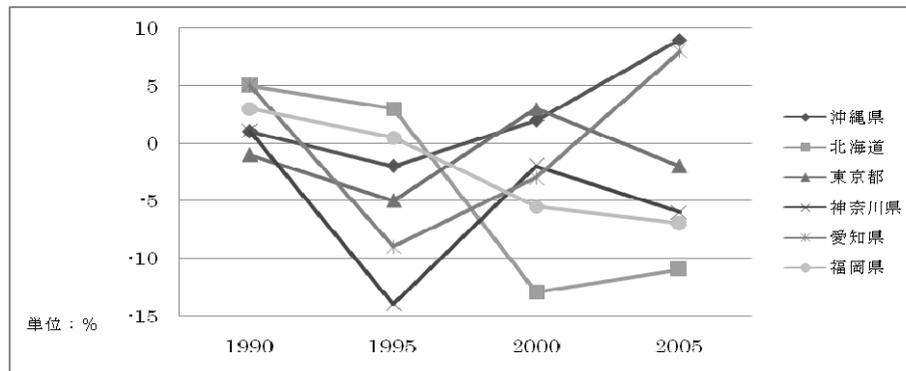


図2 他府県からの転入者数の伸び率の推移  
総務省「住民基本台帳人口移動報告」をもとに作成

## II 沖縄イメージの形成・分化

### 1) 沖縄イメージの形成

「沖縄」といえば、どのようなことをイメージするか。青い海などに代表されるような沖縄の自然の美しさやあたたかい亜熱帯の気候であったり、あるいはゴーヤーや豚の角煮などの健康食や三線を奏でる沖縄音楽などの沖縄独特の文化であったりするかもしれない。上に挙げたような沖縄イメージはテレビや雑誌などのメディアで頻繁に登場している。この章ではまず、沖縄イメージがどのようにして形成されていったのかを本章ではみていくことにする。

沖縄イメージについて研究した多田の著書『沖縄イメージの誕生—青い海のカルチュラル・スタディーズ』によると、今日広く一般的にいわれる沖縄イメージの原点は沖縄海洋博であるという。そこで、沖縄海洋博を通して沖縄イメージがどのように形成されていったのかをみていく。

多田（2004）によると、本土復帰前から本土のゼネコンが入域してきていたが、本土復帰以降、それまではアメリカの統治下にあった沖縄に高度経済成長期に本土で実践されていた「開発」が本格的に流れ込んでくる。そんな中、東京オリンピックや大阪での万国博覧会に続く形で沖縄海洋博の開催が決定する。大きなイベント開催に伴い、インフラ整備がいっせいに進められることによって、巨額の経済効果をあげ、大規模な観光開発をすすめることを狙った。

沖縄海洋博において沖縄の地理的・自然的条件は積極的に手を加えられ、「沖縄らしさ」を表現するものとしてディスプレイされた。そのことから現在われわれが沖縄といわれて

イメージするステレオタイプの沖縄イメージというのは沖縄のそのままの自然に基づくイメージではなく、観光開発という名の下に加工された自然に基づくイメージ、つまり、「創り出されたイメージ」と言えるだろう。そして、創り出される沖縄イメージには少なからず本土側が意図する方向へ沖縄を操作していこうとする側面が見出せる。そして、そこには本土と沖縄のあいだの力関係が見えてくる。先にも述べたように、アメリカから本土復帰した沖縄では本土政府が主導して開発が行われていく。野村（2005:163）は本土政府が米軍基地を沖縄に押し付けていることを「植民地主義的搾取」と表現しているが、沖縄における本土政府本位の開発も「植民地主義的搾取」の一部とみなすことができるのではないだろうか。そして、その搾取の中で創り出された沖縄イメージというのは本土側が沖縄に対して求める姿の一方的投影ともいえるのではないだろうか。

さらに、沖縄イメージを普及させる役割を果たしたのものとして、雑誌やポスターなどのビジュアル・メディアをあげることができる。多田（2004:30-31）によると、沖縄復帰直後の『anan』（1973年6月5日号）では「海の特集号」として沖縄の特集が組まれている。

「亜熱帯の海のリゾート」と称して、エメラルドグリーンの海に水着を着た女性モデルの写真が掲載されている。また、70年代以降航空会社を中心として大規模に行われた「沖縄キャンペーン」における大規模な宣伝活動も同様に視覚的な沖縄イメージを人々に浸透させ、定着させる働きをもっていたと考えられる。以上のことから沖縄イメージの普及・浸透には沖縄の観光発展も大きく影響しているといえるだろう。

## 2) 沖縄イメージの分化

これまでは海洋博をきっかけとしてどのようにして沖縄イメージが誕生したのかということについて述べてきたが、最初にも述べたように、「沖縄」というのはあくまでも総称であって、その言葉1つで沖縄をすべて形容できるというものではない。しかし、多田（2004）は沖縄本島におけるイメージとその他の離島におけるイメージを区別することなく論じている。未分化な状態のまま沖縄全体をトータルした漠然とした「沖縄イメージ」から本島や離島といったような具体的な地域に対してのイメージへとどのように分化していったと考えられるか。本論では主に沖縄の離島を人々に意識させる役割を果たした要因と思われるものを見ていくこととする。

### (a) 海洋博から離島ブームへ

まずは、沖縄イメージを誕生させた沖縄海洋博にまでさかのぼって、その中で離島はどのような役割を果たしていたのかを考える。沖縄海洋博のメイン会場は沖縄本島の北部お

よび本部半島であり、離島は本島に比べるとインフラ整備も遅れをとっており、航空輸送に関しては本土からの直通便も当時はまだ運航していなかった。しかし、離島にも海洋博関連施設が建設され、離島における関連施設は海洋博のテーマを沖縄全域に広めることを狙いとしていた。それと同時に各地域を空間的に個別化するはたらきをそれぞれの海洋関連施設は果たしていた（多田 2004:87）。このように、海洋関連施設を通して海洋博のテーマを各地域で共有すると同時に一方では個別化され、沖縄には本島以外にもさまざまな離島が存在しているということを多くの観光客に対して認識させた。ただし、この時点では沖縄イメージの分化がおこったとはいえないだろう。

具体的に離島へ人々の関心が向けられ始めたのは海洋博以降の観光ブームである。日経テレコン 21<sup>2)</sup> において、「離島観光」をキーワードにして新聞記事検索をしたところ（表 1）、1982 年 5 月 17 日付けの日経産業新聞で「東亜国内航空福岡、離島観光キャンペーン『沖永良部島』のスタート好調」という見出しの記事をみつけることができた。このことからわかるように、少なくとも 1980 年代の初めには「離島観光」に対する関心が広がっていたということになる。また、航空会社などの観光産業に携わる会社は離島への観光に目を向け、ツアーやキャンペーンを企画した。第Ⅲ章でもとりあげるが、この時期沖縄は国内の新婚旅行先としても注目されており、沖縄の離島も新婚旅行のコースの一部に含まれていることが多かった。以上をふまえると、こうしたツアーやキャンペーンの PR 活動を通じて沖縄の離島に対するイメージが少しずつ他の沖縄の地域とは分化された形で形成されていったのではないかと考えられる。

#### (b) 『ちゅらさん』効果

さらに、沖縄の離島のイメージをより視覚的に具体的にしたものとして、映画『ナビィの恋』、テレビドラマ『ちゅらさん』をあげることができる<sup>3)</sup>。特に『ちゅらさん』は長期間にわたって放送されており、またテレビ放送で広く多くの人に視聴されていたため、視聴者に与える影響力は絶大であったと考えることができる。

---

<sup>2)</sup> 日経テレコン 21 では日経四紙をはじめとして一般紙、業界専門紙など 60 紙以上の新聞記事、日経 BP 社などが発行する 60 誌以上の雑誌記事を、過去にさかのぼって自由なキーワードで検索することが可能である。

<sup>3)</sup> 『ナビィの恋』は 1999 年公開の中江祐司史の監督作品、沖縄の粟国島が舞台となっている。『ちゅらさん』は 2001 年に放映されていた八重山諸島の小浜島を舞台とする NHK の連続ドラマ。平均視聴率 26% を超える人気作品で本編放送終了後もパート 2、3、4 と続編が放送された。

表1 日経テレコン 21 記事検索結果 キーワード：「離島観光」

日付	見出し	媒体
1981/04/10	南西諸島自立への胎動（7）離島観光の小浜島―農漁業と共存共益	日本経済新聞
1982/05/17	東亜国内航空福岡、離島観光キャンペーン「沖永良部島」のスタート好調	日経産業新聞
1982/05/21	交通公社、熟年向け「沖縄」を開拓―まず滞在型、オフにも的	日経産業新聞
1982/07/19	南下する“離島観光前線”―沖縄本島から八重山へ、レジャー施設が続々	日本経済新聞
1982/07/28	曇りがちのハワイ観光（下）転機に立つツアー、離島を日本旅行客にPR	日経産業新聞
1982/08/03	日航、ハワイ州政府と共同で観光キャンペーン―ハネムーンイメージを打破	日経産業新聞
1983/01/12	57年度上記中の道内観光客数、前年同期比5.1%増と過去最高―道まとめ	日本経済新聞
1983/03/04	内外航空、鹿児島島の離島路線準定期便の運行を今月限りで休止	日本経済新聞
1983/06/08	57年度の九州の主要離島航路、輸送実績は前年度比減少―海運局まとめ	日本経済新聞
1983/12/04	奄美戦争、有権者ゆるがず―田中派の壁にせまる（選択の風土 83 総選挙）	日本経済新聞
1984/07/29	曲がり角の観光九州最前線（7）離島の小さな実験―宝探して名所売る	日本経済新聞
1986/05/20	ながもり観光、離島ブームの利尻に国際観光ホテル	日経産業新聞
1987/04/04	石垣島のホテル・ゴルフ場、全日空が買収へ―離島観光の拠点作り狙う	日本経済新聞
1987/04/08	石垣島のホテル買収、全日空、離島観光の拠点に	日経産業新聞
1987/08/02	観光客呼ぶ島おこし―海外の振興策に学ぶ、英国・イタリア・ギリシャ（断面 87）	日本経済新聞
1987/08/18	夏の観光ヒット商品診断（10）天売・焼尻―知名度向上に全力、国定公園めざす	日本経済新聞
1987/08/22	沖縄県（2）青い海に生きる観光・沖縄（産業人国記）	日経産業新聞
1988/03/09	本四連絡橋検証（10）観光や物流の整備進む広島（せとうち経済圏新時代）	日本経済新聞
1988/10/05	鹿児島商船、来夏から―種子島・屋久島へ、超高速艇が就航	日本経済新聞
1989/02/16	4月から、西南航空、団体包括割引を導入	日本経済新聞
1989/04/15	奥尻町―海の幸に付加価値を、離島観光はアクセス課題（都市を支える人と産業）	日本経済新聞
1991/09/17	特集―整備新幹線、課題も乗せ見切り発車、観光客の増加、企業誘致促進	日本経済新聞
1993/02/26	平盛リゾートエンタープライズ、5ホテルを個性化―競合避け相乗効果	日本経済新聞
1993/07/26	南西沖地震、道内離島観光に打撃―利尻・焼尻、団体キャンセル続出	日本経済新聞
1995/10/07	四国運輸局、離島振興へ調査委―観光開発、旅客を誘致	日本経済新聞
1996/07/02	運輸局と香川県、香川の離島ガイド発行―観光スポットや宿など紹介	日本経済新聞
1998/03/03	道、道北振興へ、広域観光ルート検討	日本経済新聞
1998/07/17	平盛リゾートエンタープライズ社長平良朝敬氏（ベンチャー企業九州を動かす）	日本経済新聞
2001/01/11	佐渡の観光客、9年連続前年割れ、2000年、団体客の減少続く	日本経済新聞
2004/01/26	沖縄県、昨年の観光客数500万人突破―官民一体で誘致策、テロなどに不安も	日本経済新聞
2004/05/22	離島ツアー、態勢整備が必要（ひとりごと）	日本経済新聞
2005/02/21	沖縄経済特集―沖縄「懸け橋」へ飛躍、観光客、年間500万人、離島好調	日本経済新聞
2005/06/28	離島の観光振興へ割安なクルーズ、都など開始	日本経済新聞
2006/02/11	第6部離島ルネサンス（4）鹿児島・奄美―クルーズ船、島唄で呼ぶ（海のちから）	日本経済新聞

『ちゅらさん』以前にも沖縄を舞台としたテレビドラマがなかったわけではなかったが、加藤等（2004）は『ちゅらさん』がそれまでの沖縄を舞台とした作品と異なった点はドラマの中で沖縄の日常生活を描いたという点であると指摘している。生産者である製作者スタッフに沖縄出身者がいないことから、「日常の沖縄」は生産者が持っていた沖縄に対するステレオタイプから作り出された（加藤等 2004:30）ものであり、これを野村（2005:167）は「文化的搾取」と称して問題視しているが、八重山諸島の小浜島を舞台としてオープニングから海や山などその自然の美しさがふんだんに映し出されていることによって沖縄の離島イメージに視覚的具體性をもたらした。

また、『ちゅらさん』において日常生活の場としての沖縄が描かれていることによって、沖縄に対して向けられるまなざしにも変化があったと考えられる。観光地として発展してきた沖縄に「日常生活の場」としての側面があることを印象づけたのである。つまり、『ちゅらさん』のテレビ放映は離島イメージに視覚的具體性をもたせたということだけではなく、視聴者に沖縄での日常生活を意識させる効果を持っている点において、近年の沖縄への移住、特に離島への移住ブームにも大きく影響をあたえたと考えられる。

「大宅壮一文庫雑誌記事検索Web版」<sup>4)</sup> および、「聞蔵Ⅱ」<sup>5)</sup> で「沖縄移住」をキーワードに雑誌や新聞記事の検索を行った（表 2-1, 2）。「大宅壮一文庫雑誌記事検索」で雑誌記事を検索したところ 37 件の記事があった。「沖縄移住」に関連する記事として最も古いものは 2000 年 1 月の記事で、以降、2004 年をピークとして「沖縄移住」の関連記事が掲載され続けている。同じく、「聞蔵Ⅱ」で検索したところ、朝日新聞に掲載された沖縄移住関連記事数は 21 件であった。もっとも古い記事は 1996 年のもので、そこから数年間は移住関連の記事は掲載されていないものの、2001 年に「沖縄移住」の記事が継続的に掲載されている。雑誌検索・新聞記事検索の結果において「沖縄移住」に関する記事が 2004 年をピークとして、『ちゅらさん』放映の前後から登場したことからも、『ちゅらさん』が沖縄に対して「移住」ということを多くの人に意識させるのに影響したといえるのではないだろうか。

4) 大衆娯楽誌、風俗誌の雑誌専門図書館である大宅壮一文庫が所蔵する雑誌のうち、1988 年以降、約 370 タイトルの雑誌記事の検索がウェブ上で行える。

5) 1945 年以降の朝日新聞記事及び、84 年以降の朝日新聞地方紙の記事、88 年以降の『AERA』、2000 年以降の『週刊朝日』の記事が検索できる。

表2-1 大宅壮一文庫文庫雑誌記事検索結果 (2007/11/29 日時点)

キーワード:「沖縄移住」

日付	見出し	媒体
2000/01	人生をリセットする なぜ、彼らは「沖縄移住」を選択したのか しがらみのない場所へ 沖縄に「自由」はあるか ※どんとと小嶋さちほ夫妻	プレジデント
2000/01	人生をリセットする なぜ、彼らは「沖縄移住」を選択したのか 隠居のはずの土地で見つけた新しい生き甲斐 ※刺青彫師の梵天太郎	プレジデント
2000/01	人生をリセットする なぜ、彼らは「沖縄移住」を選択したのか 故郷を離れ、新天地で新たな人生を歩き出した人々 ※梵天太郎、どんとと小嶋さちほ夫妻	プレジデント
2000/07	沖縄ちず見聞録 ※沖縄地理学の父・仲松弥秀が語る沖縄、沖縄移住者たちが語る沖縄の 魅力、沖縄の空路・海路、沖縄の菓子、祭りガイド	ラバン
2000/11	どんとは死なない! どんとの芸はブーテンさんに近い ※沖縄移住 どんとを取り巻く人々	ミュージック・マガジン
2000/12	【インタビュー】池澤夏樹 NEW TRAVEL WRITING 1994-2000 周縁からの視点を風の島で ※沖縄体験、沖縄移住	Switch
2002/08	ミドルとシニアの自分流 115回 幼き日の夢「蝶」を追って沖縄移住 3年間でビデオ コンテンツに9回入賞	週刊読売
2002/11	【インタビュー】GET HAPPY? OKINAWA! 白紙になれる幸せ。内田勘太郎 沖縄 移住歴:8年 「沖縄にいる時はギターは全然弾かない。」	広告
2002/11	【インタビュー】GET HAPPY? OKINAWA! いちばん近い聖地。宮元亜門 (演出家) 沖縄移住歴:3年 「目に見えないもの大切さを沖縄が教えてくれた」	広告
2002/11	【インタビュー】GET HAPPY? OKINAWA! 沖縄移住者14人に聞くテゲーのスス メ。※作家、キャバクラ嬢、店オーナー、学者、学生、音楽家、イラストレーター、他	広告
2003/11	平成のサラリーマン・ドリーマー50人 自由ライフ型 組織の価値観にとらわれず自分流 を貫く5人 ※アクターズスクール開業の早川寿弥、沖縄移住の平井弘大氏、他	THE21
2004/02	借りる? 買う? 建てる? 南の島の物件ガイド。オキナワ住宅情報。 ※実際に沖縄移住した人に聞く、物件ガイド22、建築事務所、ショップガイド、移住成功 の秘訣他	GQ Japan
2004/08	沖縄ダークサイド 逆説の沖縄 沖縄移住ブームにモノ申す! はっきり言おう、「迷惑 だから、勝手な幻想持って来るな!」※現地人とのトラブル、軋轢など	別冊宝島 Real
2004/08	沖縄ダークサイド 逆説の沖縄 ※逆説の在沖米軍基地論、辺野古沖ヘリポート建設反対 運動、沖縄移住ブームへの警鐘、自殺の急増、他	別冊宝島 Real
2004/08	男のセカンドライフ研究 第2弾 宮古島楽園生活 大ブーム! 沖縄移住者が注目	週刊ポスト
2004/09	憧れのストレスフリー生活 働き盛り世代の沖縄移住ガイド ※沖縄にハマった移住者 たち、那覇近郊スポット、本場で習う沖縄文化	アサヒ芸能エンタメ
2004/09	沖縄ブームの現実 なぜ沖縄か その包容力に甘えるヤマトンチュ	週刊エコノミスト
2004/09	沖縄ブームの現実 大陸と沖縄 できるか新「華南経済圏」	週刊エコノミスト
2004/09	沖縄移住ブームの現実 基地と沖縄 脱「基地依存」を左右する普天間問題	週刊エコノミスト
2004/09	沖縄移住ブームの現実 公共投資、基地収入の縮小 本格的観光立県として歩み始める沖 縄	週刊エコノミスト
2004/09	沖縄移住ブームの現実 体験者が語る 非日常空間としての魅力	週刊エコノミスト
2004/09	沖縄移住ブームの現実 体験者が語る 移住のノウハウ	週刊エコノミスト
2004/09	沖縄移住ブームの現実 移住の現実 厳しい経済下の生活が待っている	週刊エコノミスト
2004/10	【憧れのストレスフリー生活】 夢の楽園生活を実現する! 誰にも聞けなかった沖縄移住 のホント!?	アサヒ芸能エンタメ
2005/07	OKINAWA 沖縄移住を実現した3人のスローライフを公開!	an・an
2005/08	オキナワ・ライフ入門	オール読物
2005/09	【インタビュー】いい大人が沖縄移住「アテ外れ」顛末記 岡留安則氏が考える沖縄移住 とは	SPA!
2005/09	いい大人が沖縄移住「アテ外れ」顛末記 近年、大ブーム。サラリーマンを辞めてまで決 行する人が続出する今、元会社員が楽園で遭遇した落とし穴とは	SPA!
2005/10	女の決断 ガレッジセール・ゴリ 「沖縄移住」に水中出産妻猛反発	女性セブン
2006/03	リセット願望 リセットアイランド沖縄 沖縄で新しい人生を踏み出そうと、移住する 人々が増えている。そんな沖縄移住リセットに挑み、納得の人生を送る3人の女性...	プシコ
2006/03	特集 リセット願望	プシコ

2006/05	東京→那覇 4人家族のお引っ越し拝見 ぼくたち家族の沖縄移住	田舎暮らしの本
2006/08	団塊世代の“沖縄移住”で「第2の人生」支援ビジネスが活況	フォーブス
2006/09	カエルのいともカエル 田崎真也さんのいとも・田崎聡さんが語る「泡盛の世界、最高さあー」	週刊朝日
2006/12	この人たちの一分 山口もえ・IT社長夫妻に危機? 「子づくりと沖縄移住」でケンカ	週刊朝日
2007/01	2007年はこの人に訊け! 新春提言 沖縄「楽園」を求めて移住する本土の若者・リタイア組にうんざり	週刊ポスト

表2-2 聞蔵Ⅱ朝日新聞記事検索結果(2007/11/29時点)

キーワード：沖縄移住

日付	見出し
1996/06/24	「沖縄の心」北九州で共鳴 初心者も参加し三線クラブ結成
2001/03/09	飯塚未登利さん 目指すは「沖縄のオバァ」
2001/07/08	沖縄大衆食堂 仲村清司+腹ペコチャンプラーズ著
2001/08/04	総合季刊誌「けーし風」が編集陣を一新
2001/12/23	長寿の秘訣学ぶ、お年寄り沖縄移住計画 山岡町、来月視察
2002/01/17	冬だけ沖縄移住案、現地に視察団派遣 山岡町、計13人
2002/08/14	泡盛に酔い、魅力を本に 沖縄移住の田崎聡さん
2002/08/15	ガイドひょうご 展覧会
2004/08/17	50代の転身 蝶を追い(スローな島へ 沖縄移住者たち：1)
2004/08/18	情報発信 悩み溶けた(スローな島へ 沖縄移住者たち：2)
2004/08/19	小さな学校(スローな島へ 沖縄移住者たち：3)
2004/08/20	本当の海(スローな島へ 沖縄移住者たち：4)
2004/08/21	伝統の世界 濃く鮮やかな色(スローな島へ 沖縄移住者たち：5)
2004/08/22	大地の恵み 育てる喜び(スローな島へ 沖縄移住者たち：6)
2005/04/24	(亀和田武さんのマガジンウォッチ) 南の楽園の現実が気になって
2006/03/10	沖縄の変質、見つめながら 雑誌「Wander」を終刊
2006/05/28	(ぶらりネット) オフィスからも楽しめる沖縄
2006/12/28	沖縄、移住ツアー人気 地元側「現実も知って」 希望者「家賃安い」誤解
2007/01/15	(WEST) 台湾華僑、息づく沖縄
2007/04/08	(参院補選沖縄)「沖縄」意識、影響は? 「ナイチャー嫁」対「ウチナー代表」

### Ⅲ 沖縄の観光発展と移住

海洋博の開催を通して、沖縄の自然や文化に対するイメージが形成されたが、一方では沖縄の観光リゾート化が急速的に進行していった。海洋博後、一時的に入域観光客数は減少したもののその後は持ちなおし、沖縄を訪れる観光客数は増加の一途をたどり、2005年には550万人にもなった。(図3) 沖縄海洋博以降このように沖縄が観光の分野において発展していった経緯について確認し、沖縄の観光発展と昨今の移住ブームとの関連性について検討したい。

#### 1) 沖縄観光の歴史

沖縄復帰以前の沖縄観光といえば、南部の戦跡めぐりが中心であった(沖縄タイムス社

198:353)。その後、72年に沖縄が本土復帰を果たすと、44万人もの人が沖縄を訪れている。それまではパスポートなしには渡航できなかったのが復帰を果たしたことでそれまでよりも気軽に沖縄を訪れることが可能になったことや本土復帰を果たした沖縄に対する関心が影響しているのではないだろうか。さらに、沖縄の観光発展を後押ししたのが海洋博であった。本土復帰で倍増した観光客数はさらに、沖縄海洋博が開催された75年には前年の約2倍の156万人にまで達した(図3)。

海洋博でいっきに150万人以上の入域観光客数を呼び込んだ沖縄であるが、海洋博の翌年の76年には反動が訪れ、観光客数は半減し、同じく観光収入も半減している。また、宿泊施設の稼働率も落ち込み、企業の倒産や失業が増加した。しかし、76年の観光客数の激減以降はまた急激に観光客数を伸ばしていく。77年は前年に比べると1.5倍に増えており、79年にかけて順調に入域観光客数を増やしていく(図3)。

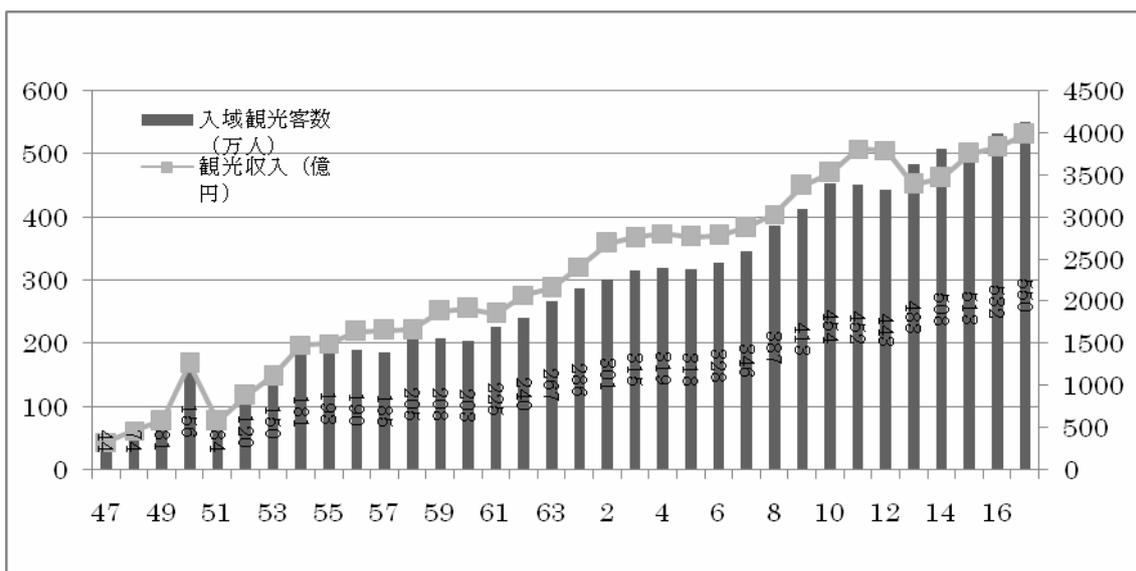


図3 沖縄観光の歴史 観光要覧をもとに作成

こうした海洋博後の急激な観光客数の増加に大きく影響を与えているのが航空会社と旅行代理店を中心に行われ始めた大規模な沖縄キャンペーンである。全日空沖縄キャンペーンはポスターなどを用いて大々的に宣伝された。宣伝ポスターなど視覚的効果が強い媒体を通して人々の意識の中に沖縄に対するイメージが入り込んできているために、人々の意識の中に沖縄イメージが浸透していく過程で強い影響をもったと考えられる。

沖縄キャンペーンの開始以降、沖縄を訪れる観光客の数は200万人に迫るところまで増加をしたが、その後1986年ぐらいまでは軒並み200万人前後の横ばいの時代が続いた。

またこの時期、第Ⅱ章でもとりあげたように、離島観光がブームを迎えていた。離島観光の主な客層は、大学生や新婚カップルといった比較的若い世代であった。日本経済新聞（1982年3月15日付）には新婚旅行先として国内では沖縄が人気であるという記事が掲載されている（資料1）。この記事からも、当時、本島だけではなく離島にも観光のまなざしが向けられていたということがわかる。

資料1 「春の新婚旅行人気コース、海外はハワイ、国内なら沖縄—交通公社まとめ」  
（日本経済新聞 1982/03/15 付記事）

春の結婚シーズンを前に、日本交通公社がこのほど今春（三一五月）の新婚旅行の傾向をまとめた。それによると、海外旅行組が五七・三％、国内旅行組が四二・七％と相変わらず海外組が上回っている。海外、国内とも「離島ブーム」が続いている。カップルの平均費用は海外組約七十一万円、国内組は約二十九万円だった。

この調査は交通公社が東京、大阪、名古屋にある同社九支店に申し込んだ約三千組を対象に行った。

海外の行き先ではハワイが四十九年以来九年連続でトップ。しかし、ひところのように過半数を占めるには至らず、三九・八％と四割を割り込んでいる。本当から周辺のカウアイ島、マウイ島などを訪れる組が増えているのが特徴という。

二位は一五・七％のグアム・サイパン。次いで欧州（一四・五％）、北米（一三・七％）などの順。

一方、中国も伸びている。昨年までは一週間以上のツアーしかなかったのが、今年から五日間コースもでき、行きやすくなったためとみられ、中でも桂林へ行くカップルが多い。国内の行き先トップは沖縄・与論島で、五年連続。全体の四〇・八％を占め、二位の北海道（二二・〇％）、三位の南九州・奄美大島（一五・九％）を大きく引き離している。約三分の二のカップルは沖縄本島から石垣島、竹富島など小島を訪れる。特に今年は小浜島の人気急上昇しているという。

その後、本格的なリゾートホテルタイプの宿泊施設および沖縄への航空座席の増大に伴って再び順調に観光客数を伸ばしていったが、観光客数は1990年から再び増加率が落ち込み、再び停滞期を迎えた。この停滞には沖縄観光にとってはライバルとなる海外旅行の旅行料金の低廉化が大きく関わっているものと考えられ、1995年、96年あたりから沖縄路線の航空運賃の低廉化が図られた。また同じ時期にはパックツアーの低価格化が進んだ

こともあいまって、海外旅行との価格競争力もついて、再び沖縄への観光客数も増加に転じていった（岩佐 2007:101-102）。2001年の9・11同時多発テロの影響により、沖縄の観光産業は大打撃を受けたものの、同年放送された『ちゅらさん』によって、沖縄人気が一気に過熱し、それ以降、観光客数は順調に増加の一途をたどっている。さらに、観光の発展のもとで、第Ⅱ章でも述べたように、移住に対しても人々の興味や関心が向けられるようになっていった。

## 2) 沖縄観光の変容

### (a) 本島から離島へ

沖縄を訪れる観光客の観光行動を歴史的にみると、沖縄本島での行動が中心であったことがわかる。宿泊施設の動向（図4）についてみてみると、昭和50年代は那覇を中心とした本島南部が県全体の56%と過半数以上を占めていた。しかし、昭和60年代に入ってリゾート法が成立してからは、本島北部の恩納海岸や離島地域で本格的なリゾートホテルの形態をとった施設が数多くオープンしてきたため、離島圏へ宿泊施設の整備が拡大し、平成8(1996)年以降は県全体の約3割を離島圏が占めるようになった（岩佐 2007:99-100）。このことから、もともとは沖縄本島をメインとして沖縄観光が発達してきたが、観光客や観光産業関係者の視線が少しずつ本島だけではなく、離島にも向けられていったことがうかがえる。そこにはどのようなことが影響しているのだろうか。もちろん、テレビや雑誌などのメディアによって離島が取り上げられることが増えたことも一つの要因になるのかもしれない。さらにもう一つの要因としてここで取り上げるのは「リピーター」の増加である。

図5は沖縄観光のビギナー・リピーター比率の推移を表している。それによると、昭和58(1983)年には全沖縄観光客のうち約80%はビギナーであったが、その後は年を経るにつれて徐々に減少に転じ、平成17(2005)年にはついにリピーターの比率が逆転している。

このようにリピーターが著しく増加してきたことは旅行形態の変化にも影響しているものと考えられる。かつては団体旅行が主流であったが、近年では個人旅行が主流になっている（岩佐 2007:103）。個人旅行では、自分で行きたいところを選択しできるため、リピーターは訪れたことのあるところだけでなく、それ以外の地域にも興味を持ち、実際に訪れる。第Ⅳ章で扱う聞き取り調査の対象者にも、最初は本島を訪れていたが、後に離島観光するようになったということを話した人がいた。このことから沖縄本島を中心として発展してきた沖縄観光から離島観光への分化にはリピーターの増加が重要な役割を果たして

いるといえるであろう。さらに、リピーターの中には長期滞在を志向する者も多く(図6)、リピーターから発展して長期滞在、ひいては移住へと発展していくケースも少なくないものと考えられる。それまではあくまでも「観光地」であった沖縄が「移住対象地」としての側面も持つようになるのではないだろうか。

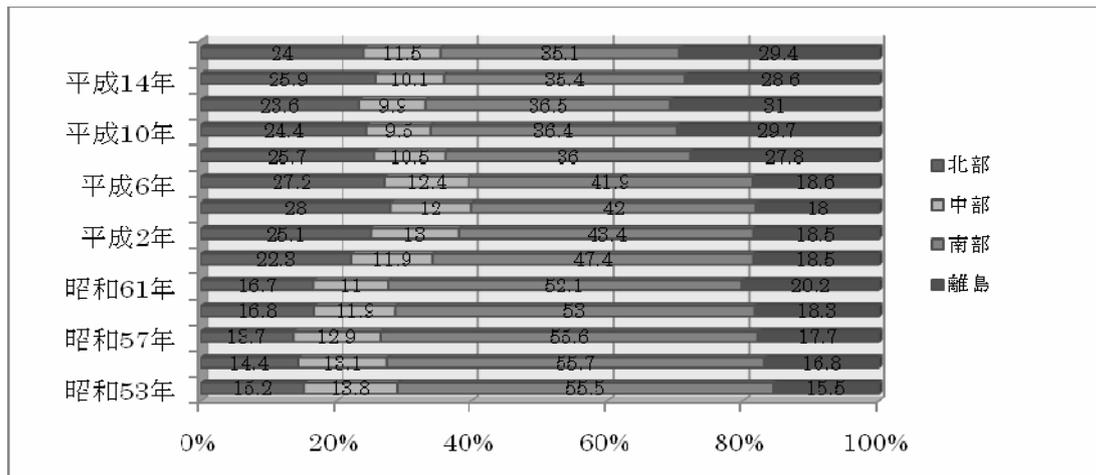


図4 宿泊収容力の地域別構成の変化

「沖縄にける観光業地域の発展」岩佐吉郎 地理(52-11) p100をもとに作成

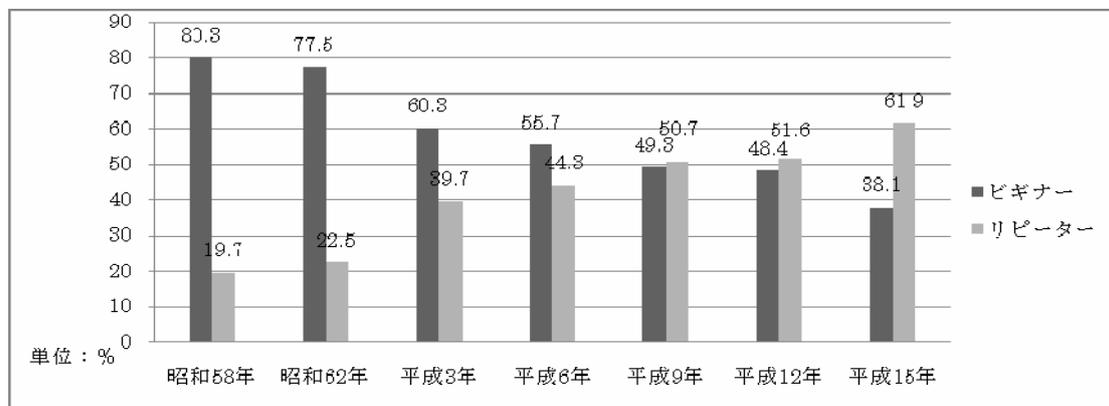


図5 沖縄観光のビギナー・リピーター率の推移

観光要覧(2005)をもとに作成

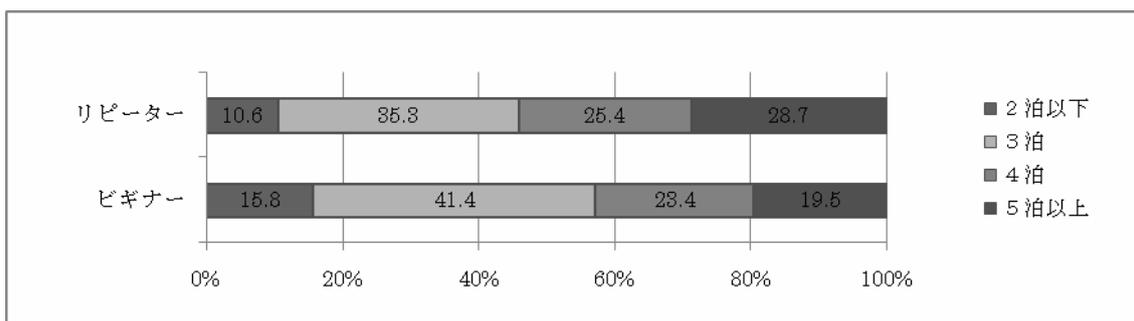


図6 沖縄希望滞在泊数

(財) 沖縄コンベンションビューロー「沖縄観光マーケティング調査」(2000)をもとに作成

#### IV 石垣島における移住の現状と聞き取り調査

第III章で述べたように、沖縄は本土復帰以降、観光立県として発展し、今日に至るまで年々多くの観光客を沖縄に呼び寄せしてきた。近年では沖縄を訪れる人の内訳をみると、ビギナーよりリピーターの割合の方が高くなるほど、沖縄は国内観光の定番になったのである。そして、リピーター比率の増加は沖縄への移住・定住志向を生み出し、近年の沖縄移住ブームにも影響を与えている。

続いて本章では具体的に沖縄県石垣島について取り上げる。近年の沖縄ブームにおいて、石垣島は移住先として大きな人気を誇っている。聞き取り調査の結果等をもとにして人々が移住先として離島を選択していくことにはどのような要因があるのかということについて検討していきたいと思う。

##### 1) 石垣島の移住の歴史

石垣島は八重山諸島に属する島の1つであり、八重山諸島の政治・経済・交通・教育などの中心地となっている。石垣島は沖縄本島、西表島に次いで3番目に大きな島で、島の中央には沖縄最高峰の於茂登岳(526m)がそびえ、山岳部には亜熱帯の樹木が、平野部にはさとうきび畑や牧草地が広がっている。その一方、川平湾などの海の美しさも多くの観光客を魅了する。

石垣島の歴史についてみると、石垣島が移民・移住を何度も受け入れてきた島であるということがわかる。以下、朝田(2002)の論文に基づいて石垣島の移住の歴史についてみていくこととする。

琉球王府の頃から石垣島への移住は行われていたが、この頃の移住は食糧増産や人口調整を目的として、既存集落から当時は未開拓である土地が多かった西表島や石垣島の原野

への強制移住であった。明治期以降は本土の人々による開拓が行われはじめ、昭和初期には台湾人の入植が始まり、水牛やパイン栽培を導入させた。現在も台湾系の人々は帰化した人も含めて石垣島に 600 人ほど居住している。さらに、戦後の開拓は、原則的に行政の援助を受けず、主として宮古諸島から個人的なネットワークを通じて自力で移住してきた自由移民と琉球政府が募集を行い、政府の計画に基づいて入植した政府計画移民にわたることができる。政府計画移民の出身地域としては、宮古諸島が全体の約 3 割と最も多く、本島の北部・中部がそれぞれ全体の 4 分の 1 ずつを占めている（朝田 2002:16）。このことからわかるように、当時の石垣島への移住は本土からの移住はほとんどなく、沖縄内部で起こった人口移動という見方もできるだろう。しかも、本島や宮古諸島から石垣島への移住には自由移民も含まれているが、人口増加対策や食糧増産対策といった政治的側面が強い。もちろん、移住当事者にとっては生活のための移住である。

本島や宮古諸島からの人口流入によって石垣島の人口は急増し、1965 年には約 4 万 1 千人まで増加した。その後一度は人口が減少したが、1980 年代には回復し、その後はしばらく横ばいの状態が続いた。そして 2000 年以降、再び人口が増加し始めているのがわかる。（図 7）。

## 2) 石垣島の移住の現状

近年の石垣島への移住について沖縄総合事務局総務部調査企画課の「県内移住者に関する基礎調査」をもとにしてもう少し詳しくみていく。ただし、石垣島としての統計データはないため、以降は石垣市の統計データを使用する。石垣市には尖閣諸島も含まれているが、それらの島々はすべて無人島であるため、石垣市の人口データは石垣島の人口データとしてみなしてもほとんど問題はないものと考ええる。

石垣市における 5 年間の転入者と転出者の動向（図 8）をみると、転入者は増加傾向、転出者は減少傾向にあり、石垣市への転入者は 2001 年から 2005 年までの 5 年間で総数 7424 人にのぼる。ただし、先にも述べたように住民票を移さずに移住している人も多いと推測されるので、転入者数の合計はさらに増えるものと考えることができる。

沖縄総合事務局総務部調査企画課の石垣市転入者の移住前住所（図 9）によると、東京都、神奈川県、大阪府、埼玉県、福岡県の順で多く、石垣島への移住者には都市出身者、あるいは都市生活経験者が多いことがうかがえる。都市での多忙な会社勤務や都会暮らしから解放され、癒しを求めて沖縄・石垣へ移住しようとする人が多いということを指し示しているといえるだろう。

転入者が最も多い月は男女ともに 4 月、3 月であるが、企業や官庁等の人事異動に伴う

転勤者やその家族が増えることが影響しているものと考えられる。男女別では女性の増加率のほうが高いことから、これまでは男性の単身赴任や移住が多かったのが最近では家族、夫婦同伴、女性単身で転入者が増えてきているということがうかがえる。(表3)

また、おきぎん経済研究所の『賃料動向ネットワーク調査』(2007年)によると、貸家新設住宅着工件数(図10)では石垣市が1164件で前年度に比べて192件増加している。2003年から右肩上がりに急増し、県内でも那覇市に次ぐ新設住宅着工件数となっている。アパートの稼働率(図11)は石垣市と宮古島市がともに98.6%と県内でも最も高く、那覇新都心の稼働率が低下する中で離島における稼働率が上昇傾向にある。しかし、こうした石垣島における貸家新設住宅着工件数の増加は一方では問題も引き起こしている。移住者増加に伴う土地売買や住宅建築の活発化により、急激な乱開発による自然景観の破壊や、インフラ整備が追いついていないという現状がある。そういった現状を踏まえて石垣市のHPでは移住ブームに伴う乱開発に対してクギをさすメッセージを掲載するようになった。また、自然景観に関する問題については移住者間でも関心が高く、景観保全に向けた条例の制定もすすめられている。

### 3) 石垣島移住者に対する聞き取り調査

#### (a) 調査方法

先行研究や観光・移住に関する調査結果をもとに近年の「移住ブーム」という現象について検証してきたが、実際本土から石垣島に移住してきた人たち12人に対して聞き取り調査を行った。聞き取り結果についてはまとめたものを本論最後に添付する(資料3)。聞き取り対象者については年齢や出身地はさまざま、居住地も大きく分けると2地域に分かれる。石垣島南部の市街地付近と石垣島北部海岸沿いの川平・吉原地区である。特に吉原地区に関してはもともと農業振興地域であったが、農業振興地指定から外れた土地が宅地分譲されるようになり、近年移住者が多く移り住んだ地域である吉原地区の山原(ヤマバレー)は、そこに在住する30世帯すべてが本土からの移住者で構成されている。なお、聞き取り調査を実施した聞き取り対象者のおおまかな居住地は図12の地図中に記している。

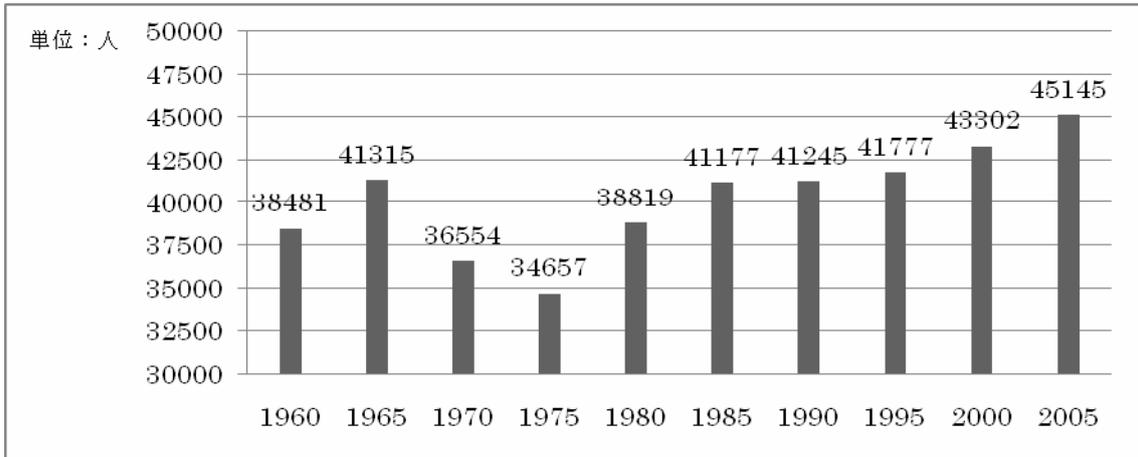


図7 石垣市人口推移

国勢調査（平成17年度）をもとに作成

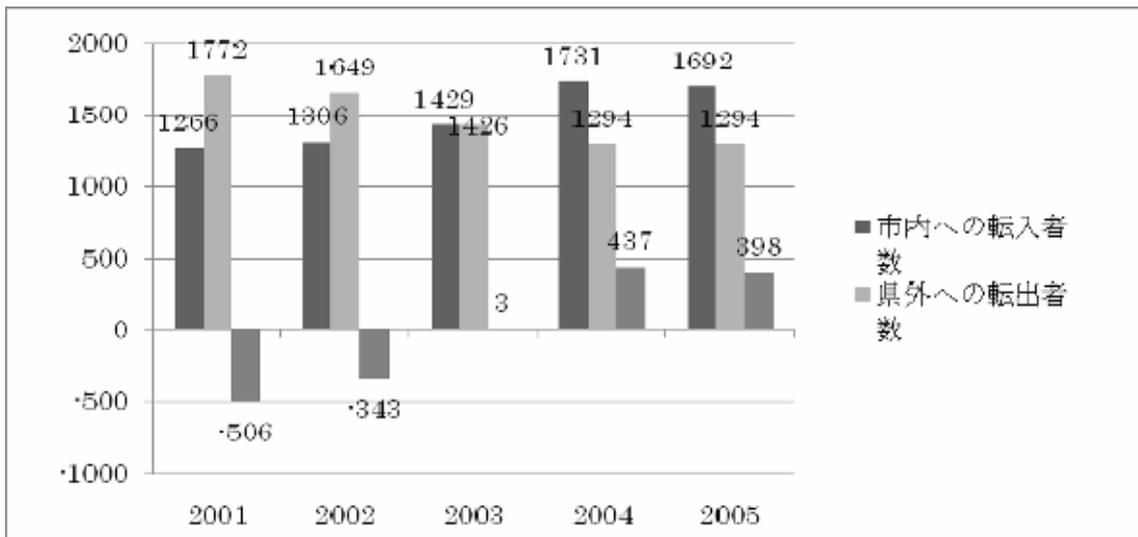


図8 石垣市転出入者の推移

沖縄総合事務局総務部調査企画課「県内移住者に関する基礎調査」（2006）をもとに作成

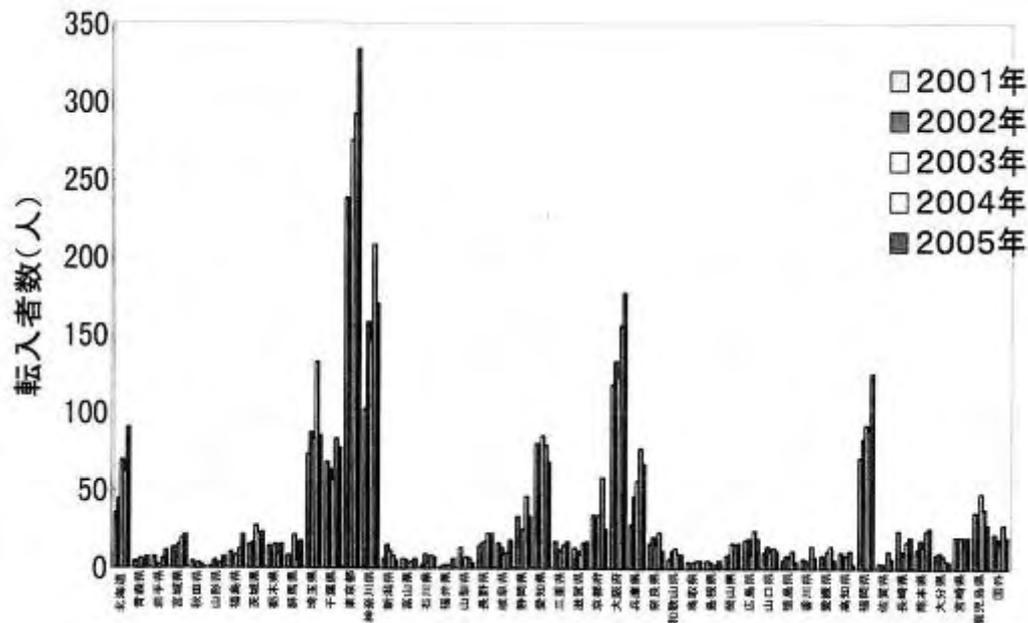


図9 石垣市転入者の移住前住所

沖縄総合事務局総務部調査企画課「県内移住者に関する基礎調査」(2006)より引用

表3 石垣市における月別男女別転入者数の推移

	2001年		2002年		2003年		2004年		2005年		5年間の伸び率	
	男子	女子	男子	女子								
1月	49	45	46	48	31	51	58	69	65	60	133	133
2月	46	25	40	33	46	38	49	60	61	43	133	172
3月	94	87	73	60	77	73	103	118	87	8	93	100
4月	109	94	149	132	144	137	158	132	139	147	128	156
5月	42	59	54	60	52	67	62	74	58	71	138	120
6月	52	50	43	65	54	57	53	80	55	69	106	138
7月	46	56	51	40	53	63	67	87	64	75	139	134
8月	43	45	48	46	46	50	53	52	43	59	100	131
9月	46	37	41	37	41	46	55	65	58	73	126	197
10月	50	51	46	41	63	61	59	56	63	71	126	139
11月	39	34	44	44	42	48	51	54	64	72	164	212
12月	34	33	27	38	45	44	49	67	53	55	156	167
合計	650	616	662	644	694	735	817	914	810	882	125	143

沖縄総合事務局総務部調査企画課「県内移住者に関する基礎調査」(2006)をもとに作成

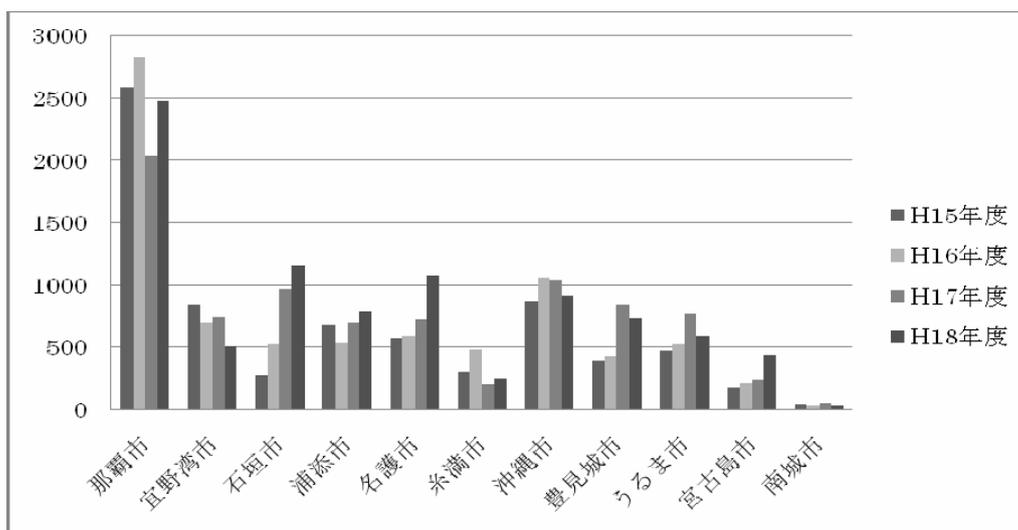


図 10 貸家新設住宅着工数

(株)おきぎん経済研究所「賃料動向ネットワーク調査概要」(2007)をもとに作成

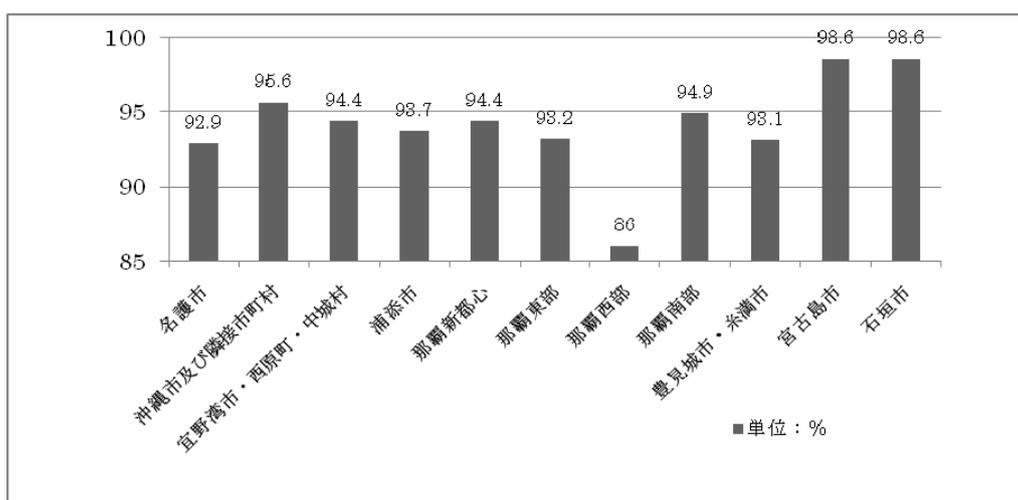


図 11 各地域における稼働率

(株)おきぎん経済研究所「賃料動向ネットワーク調査概要」(2007)をもとに作成

移住に至った経緯，移住する前の沖縄経験や沖縄に対する興味・関心などについて吉原地区や市街地に居住する移住者にそれぞれ質問を行った。聞き取り調査を行った 12 人のうち，6 人（うち 1 組は夫婦）に対しては電話を通じて再調査を行っている。そのため，本章では電話での調査を行った人と現地での聞き取り調査のみの人とを分けて論じる。1 度目の調査では，沖縄に移住するに至った経緯や理由について，具体的で合理的なことについては聞き出すことができたものの，内面的で衝動的な動機についてうまく聞き出すこ

とができなかった。そこで、2度目の調査では相手の話をしている内容だけではなく、話し方や答え方などを通じて移住者の内面的な移住の動機や沖縄（本島・離島）に対する意識についても確認をしている。なお、電話での聞き取り調査に関しては、こちらの質問に対してどのような答えを言ったかということだけではなく、話し方などを含めて、どのような答え方をしたのかを把握するために、聞き取り内容はすべて先方に了承を得た上で音声録音させてもらっている。ちなみに聞き取り内容は資料として本論の最後に添付することとする（資料4）。

以下、現地での聞き取り調査、および電話での聞き取り調査を行った5件を中心に取り上げ、石垣島へ移住しようとする人々が考える動機や経緯について探り、移住先を石垣島へ選択していく過程についてどのような構造が存在するのかということ明らかにしていく。



図 12 石垣島地図および聞き取り調査対象者の居住地  
「沖縄県広域詳細道路地図」をもとに作成

(b) 事例①

A夫婦<sup>6)</sup>は、夫は40歳代後半、妻は40歳代前半で移住前は横浜で共に広告代理企業に勤務していた。2006年9月に石垣島へ移住してきて、2007年1月から吉原の山原地区で趣味の焼き物をしながら生活している。

夫は仕事の関係で10年以上前から数十回にわたって沖縄本島へ行っている<sup>7)</sup>。一方、妻は夫婦で8年前に石垣島へ旅行するまでは沖縄へ行った経験はなく、夫婦間で沖縄経験に大きな差があることがわかる。

以前から夫婦でいつかは海や山などの自然があり、あたたかいところで田舎暮らしがしたいと考えており、漠然と沖縄ということは考えていたようであるが、具体的に石垣島というところまでは絞り込んでいなかったようである。妻もハワイへは過去何度も行った経験があるということだったので、ハワイへの移住は考えなかったのか質問をしてみたところ、地理的距離が遠すぎることに、日本語での生活が難しくなってしまうこと、文化的な相違が大きいことがあるため、移住は考えなかったということだった。具体的に候補地を絞り込んでいく際には、まず生活の利便性を考慮し、本島および、離島の中でも比較的インフラ整備が進んでいる宮古島と石垣島を候補地としていた。その中で最終的に石垣島への移住を決めた理由としてはまず、石垣島には基地がなく、また上陸戦がなかったことによって、沖縄の他地域に比べると精神的なハードルが少ないように思われたこと、実際に旅行で石垣島を訪れたときに雰囲気はハワイのマウイに似ているように感じられ、気に入ったことなどを挙げていた。

とはいえ、観光旅行で訪れていたところから実際に移住へ踏み切ったのには2人の移住前の生活が大きく影響していると発言内容からもうかがい知れる<sup>8)</sup>。都会での仕事に追われる生活をリセットするために沖縄へ移住し、「ゆるやかな、スピードのそれほど速くない生活」を期待していたのである。ここで留意しておきたいのは、沖縄の生活＝「ゆるやかな、スピードのそれほど速くない生活」という観念を自明のこととして無意識のうちに表していることである。そうした沖縄における時間感覚というもの、沖縄イメージ形成の過程で生じた産物なのかもしれない。

<sup>6)</sup> 1回目の聞き取り調査では夫婦2人から話をうかがい、電話インタビューには妻が答えている。

<sup>7)</sup> 夫の方は仕事で本島へ行って、仕事仲間とともに「沖縄文化研究会」というのをつくり、沖縄の歴史や文化について調べ、議論をしていたこともあって、沖縄に関する知識はかなりあるようである。

<sup>8)</sup> 「2人とも忙しく、頑張って働いていたので、はやく違う生活をリセットできるチャンスはそれぞれ二人とも持っていたとは思うんですね。わたしも40になったら、その、違う生活をしたいなっていうのを思っていて、40過ぎて、しばらく、45までには何とかしたいなと思ってたら、42ぐらいだったんですけど、都会、都会っていうか、東京の仕事でぎゅうぎゅうしている生活だけじゃない、違う人生をもう一回やりたい。」とか「もうちょっとゆるやかな、スピードのそれほど速くない生活で、豊かな生活っていうものはどんなものが知りたかった。」という発言に基づく。

さらに、移住に際してどのようなイメージを持って移住してきたのかという質問に対しては、家計など経済的なことや趣味で陶芸をしていくことなど、具体的な生活に対するイメージについての返答が返ってきた。自然や文化などの「沖縄イメージ」について触れてみると、言葉ではうまく説明できていないが、移住に際してそういった「沖縄イメージ」が前提にあるということを答えている<sup>9)</sup>。そうしたところからも、あえて語られることがないぐらいに「沖縄イメージ」というのは浸透し、無意識のうちにそれをイメージとして持っているということがわかる。

また、石垣島において具体的に居住地を決めるにあたっては、4年前に観光で石垣島を訪れた際にたまたまみつけた山も海も近い現在家が建てられているところの土地が気に入り、土地のみをすでに購入していた。購入してすぐには移住することは考えていなかったようだが、夫が体調を崩して仕事を休んだことをきっかけに移住を決断したということである。観光で訪れた際にたまたまよい土地をみつけたので購入したということであるが、もうこの時点ですでに純粋に観光だけを目的とした旅行ではなく、移住を視野に入れつつ旅行していることがわかる。8年前に初めて石垣へ旅行して、その後数回にわたって石垣を訪れたということであるが、繰り返し石垣島へ訪れ、現地のことについてより詳しく知るうちに観光対象ではなく移住対象へと変換していったのである。

### (c) 事例②

Bさんは埼玉県出身の50代後半の男性で、会社員をしていたが、早期退職をし、居酒屋を経営していたが、3年前に夫婦で石垣島へ移住し、現在は石垣市役所近くの市街地でラーメン店を経営している<sup>10)</sup>。8年くらい前から沖縄へ毎年旅行するようになり、本島や石垣島をはじめとするさまざまな離島も訪れた。石垣島は特に気に入り、3、4年間連続で毎年毎年訪れていたということである。沖縄へ旅行する前は海外旅行が中心であった<sup>11)</sup>。他の国内地域へ旅行しなかった理由としては、「後半になってくると、一応住む前提みたいなことを考えながら旅行していたので。」ということであった。

移住するにあたってどのようなことを移住の条件にしていたのかというと、移住後、商売をしたいと考えていたため、なるべく競争が激しくないところであることと、あたたかいところで住みたいということが前提にあった。「あたたかいところ」という条件に関して

<sup>9)</sup> 「ちゃんと説明できてないっていう、当然それがあるから来てるっていうのはあるよね。」という発言に基づく。

<sup>10)</sup> 石垣島へ移住してきた頃は川平に1ヶ月賃貸を借りて生活していたものの、生活の不便さや商売をすることを考えても市街地の方が都合がよいと考えて、市街地の方へ引越しをしてきたということである。

<sup>11)</sup> 主な旅行先としてはタイやベトナム、グアム、サイパン

言えば、旅行に際して移住を意識していたうえで、沖縄以外の地域には行っていないことから考えて、「あたたかいところ＝沖縄」というイメージが無意識に作用しているということがわかる。

さらに具体的に石垣島へと居住地が絞り込まれていったのには、先に述べたように、商売をしていく上で競争があまり激しくないことというのももちろん大きく影響していると考えられるが、単にあたたかい気候だけを求めて移住するのではなく、都会とは違った環境を移住後の生活に期待していた<sup>12)</sup>。そのため、都市化している本島ではなく、移住先を離島に求めるのである。しかし、離島であっても、ある程度の生活を保証されていなければならない。都会過ぎず、しかし、ある程度インフラが整っていて生活の利便性もあるという条件を満たす場所として石垣島が選択されたのだ<sup>13)</sup>。

#### (d) 事例③

Cさんは千葉県出身の50代の男性で、会社を早期退職し、約5年前に妻と2人で移住してきた。昔から趣味であった昆虫の研究をしながら、現在は石垣島の吉原地区で主に観光客向けに昆虫の博物館を経営している。沖縄本島へは15年ほど前から何度も訪れていたそうである。沖縄本島へ来ていた理由は本土にはいない種類の昆虫がいるためで、観光目的はほとんどなく、旅費の関係もあって、移住直前に石垣島を初めて訪れるまでは本島以外の地域には行ったことがなかった。

移住を考えたきっかけは、昔から趣味として行っていた昆虫の研究をするためであり、もともとはインドネシアやマレーシアといった1年中昆虫の研究をすることができる南方の国への海外移住を考えていた。しかし、近年テロなどが多発し、治安が悪化したことなどを理由に海外への移住を断念し、日本国内で1年中昆虫の研究ができる場所(＝沖縄)へ移住することにした。移住先を国内へと変更したときに、最も海外と近い自然環境や気候条件を満たし得るのが沖縄であり、「海外の代替」としての沖縄の側面を見出すことができるのではないだろうか。そうした側面は前に紹介したA夫婦のインタビュー内容からもみてとれる。インタビューにおいて、ハワイと沖縄の類似性を指摘したうえで、それが移住先を石垣島に決めた1つのきっかけになっていた。沖縄の持っている地理的条件や自然環境は日本というよりはむしろ海外、特に南方の国々と類似する点が多いため、言語の壁

<sup>12)</sup> 「それも沖縄でも、あんまり都会は嫌いなんです、わたしは。だから那覇は嫌いだから、東京とあんまりかわらない、人も多い、車も多い。」という発言にもとづく。

<sup>13)</sup> 「その中で、離島の方でライフラインがしっかりしているところが最終的に石垣島なんです。あとはもう病院もないし、もちろんスーパーもコンビニもないし、そういう離島がぼこぼこありますけど、そこまで行く元気はないんです。」という発言にもとづく。

など国境を超えることなく、「手軽に味わえる海外」としての役割も割り当てられているのである。

昆虫の研究というのが移住先決定の軸にあるため、昆虫の研究に関すること以外で移住後の生活に対する期待やイメージを意識したというのはほとんどないと答えていた。石垣島を移住地として選択したのも、年中昆虫の研究に取り組めるからであるという<sup>14)</sup>。しかし、突き詰めて聞いて見ると、写真などを媒体として、間接的に沖縄の自然などのイメージを享受していた可能性があると言った<sup>15)</sup>。さらに実際に移住してみて「時間がとまったような感覚」を感じるようになったということであった。このように移住前のイメージだけではなく、訪れてみて新たに追加されるイメージというのものもある。

さらに、生活の利便性も重視したうえで石垣島、さらに石垣島内での居住地を絞り込んでいった。石垣島で具体的に居住地を絞り込んでいく際には、インターネットを主に利用したということである<sup>16)</sup>。インターネットで物件の検索をしている際、それぞれの不動産会社などがどのような物件をどのように紹介していたのか当時のことを思い出し、記憶をもとに話してもらったところ、紹介されている物件そのものの数などには偏りは見られないようだが、紹介されている場所によっては移住者を意識したようなPRもとられていたようである<sup>17)</sup>。つまり、少なくともCさんが移住しようと情報収集をしていた6年前の段階ではすでに移住者を意識した動きがあったということである。

#### (e) 事例④

横浜出身のDさんは現在、吉原地区に在住し、夫婦で焼物の工房をひらいている30代の男性である<sup>18)</sup>。

---

<sup>14)</sup> 沖縄本島以上に生息している昆虫の種類が多く、日本国内では最も多くの種類の昆虫が生息しているのが八重山諸島で、1年を通してずっと昆虫の研究に勤しめる。

<sup>15)</sup> 「小さい頃から、あの～、沖縄とかの写真、蝶の写真集なんか見るにつれて、蝶のすばらしさだけじゃなくて、風光明媚なところとか、そんな認識はもちろんありましたよね。だから、別に石垣島の、沖縄石垣の風光明媚を無視するんじゃないかって、それも舞台として、ステージ上にあるっていう前提ですけれどもね」という発言にもとづく。

<sup>16)</sup> 現地の土地・物件に関する情報についてインターネットで検索し、そこから50件の候補地を見つけ出して、3泊4日で物件確認のため現地に滞在した。50件の候補地は現在住んでいる吉原周辺だけではなく、白保、伊原間、野底、あと市街地周辺とさまざまな場所のさまざまな物件を候補にしていた。

<sup>17)</sup> 「街中の販売物件もあったし、ばらつきがありましたね。あの、地元の人が買うのは、もう、街中しか買わない。島ですけども、地方に行こうなんていうのは思ってませんから、街中以外、団体以外のところ、販売するってことはもう、本土向けの販売しかないんですね。住む人は本土の人しかいないから。だから、そういう動きをもう石垣の不動産も何かしら動き出していたので、まあ、移住のどうこうっていうのはあったんでしょうね。そういう街中以外のところの部分っていうのは、景色がいいとかね。そんなPRコピーでしたよ。」という発言にもとづく。

<sup>18)</sup> 移住前は飲食業を営んでいたが、自分で店を開くために石垣島へ移住し、2年間はアルバイトで生計を立てた後に2年間飲食店を経営、その頃から焼物に興味を持ち始め、経営していた店を手放して、焼物の勉強の為に2年半本島へ行った後、再度石垣島へ戻って、知り合いから譲り受けた工房で観光客向けに

移住前は、沖縄で教員をしていた友人の姉のところへたびたび遊びに行っていた。沖縄に実際行く前は沖縄に対してそれほど興味も関心も持っておらず、海がきれいなイメージぐらいしか持っていなかったということであるが、初めて沖縄の本島を訪れたときに一番興味を持ったのが米軍であった<sup>19)</sup>。「沖縄＝海がきれい」という表向きの沖縄イメージと実際に沖縄本島を訪れたときに目の当たりにした「米軍の基地」がある現実の沖縄の間には大きなギャップがあるが、そうしたイメージのギャップには実際行ってみてはじめて気がつく場合が多い。第Ⅱ章でも述べたように、多くの人々が抱く沖縄に対するイメージは、沖縄の観光開発の中で創り出されてきたイメージであり、排除された現実も存在している。その1つが沖縄の米軍に関することであり、都合の悪い現実には表には出てこないで、沖縄の自然・気候・文化の魅力だけが前面に押し出されるのである。しかし、それを受け取る側はそうした前面に押し出された沖縄イメージだけをもって沖縄というものをとらえがちになるのである。そのことがDさんの発言からも読み取ることができる<sup>20)</sup>。

Dさんは沖縄本島を訪れた後、離島にも興味を持ち始め、波照間島や石垣島などへ行った。本島に旅するうちに、本島だけではなく、他にも多くの島があることに徐々に目が向けられるようになっていく過程、すなわち「分化」が生じてきたのである。そして、数回訪れているうちに移住を意識し始めていたということである。移住をしようと思った理由について尋ねると、途中で数秒間だまってしまい、沖縄の自然の要素をいくつか並べて、「なんともいえない」と回答しているところ<sup>21)</sup>から、合理的な理屈があって移住をしようと思うのではなく、もっと感覚的なレベルで移住をしたいと思わせるものがあることが読み取れる。

具体的に移住先を石垣島にしたのには、一番ビジネスチャンスがあるとDさんが判断したのが石垣島だったからである。本島だと、都会過ぎて本土で店をだすのとそれほど変わりないと考える一方、石垣以外の規模が小さな離島では長期滞在は難しいと考えたということである。つまり、具体的に移住先を絞り込んでいく中で、本島のように都市化されているところではなく、かといって生活の利便性が整っていない離島でもなく、そのちょうどバランスの取れたところに石垣島が存在しているので、移住先として選択されやすいと

---

焼物教室をしながら生活している。

<sup>19)</sup> 当時大学生だったDさんは沖縄の米軍基地に関する卒業論文を執筆した。

<sup>20)</sup> 「あのときはね、今でも覚えているよ、JALのね、キャンペーンガールがね、森高千里だったのね、確か。あるでしょ、夏になったら、JALがキャンペーンをね。そのときに森高千里だったんだよ。あ、森高千里だ、青い海だみたいな。」という発言にもとづく。

<sup>21)</sup> 「特別な理由ね... (数秒間沈黙) ...そうだね～...たぶん、やっぱりね、... (数秒間沈黙) ...きっと気持ちよかったんだろうね～、なんともいえないな～、ほんと、海と山と、熱い太陽とね。まあ、本当、開放的だったというか、なんか、そうだね～、そんなところかな～」という発言内容にもとづく。

いう構図になっているのである。

(f) 事例⑤

Eさん夫婦は共に30代前半で移住前は横浜に暮らしていたが、2年前に石垣島へ移住し、現在は川平に住まいを構えながら吉原地区で手作り雑貨の店を経営している。夫はもともと横浜で会社員をしていたが、3年前妻の知り合いが暮らす西表島へ遊びに行ったのをきっかけとして、自分たちもその暮らしぶりにあこがれ、西表島へ移住して店を持つと夫婦で思うようになった。しかし、実際のところ西表島には店舗賃貸がなく、コスト的にも石垣島で店舗を借りて店をひらく方がよいと判断されたため、石垣島へ移住先を変更した。夫は移住前に西表島へ行ったのが最初であるのに対し、妻は10年ほど前にヘルパーの仕事をして数ヶ月間西表島で暮らしていた経験がある。このように、夫婦間に大きな差があったために、移住に対しての意識の差も大きかったため、聞き取り調査を別々にさせてもらった。

夫は、西表を訪れる以前は沖縄に対して特別興味を持つということにはなかったようである。興味がほとんどなかった状態から、移住というところまで意識を変化させたのには西表へ実際に行ったことが大きく影響しているようである。自然に囲まれたスローライフにあこがれるようになったと以前の現地調査のときに語っていたが、あこがれの段階から実際に移住しようと考えるところまで大きく気持ちを変化させた具体的な要因について尋ねると、その返答から本人も自覚できていないような印象を受けた<sup>22)</sup>。このことから移住しようという気持ちに駆り立てたものは本人でもはっきりとは自覚できない衝動的なものであったのではないだろうかと推測される。実際に西表島でのリアルな生活を見ることによって、西表島での生活イメージというのが具体的に形成される。そして、そのイメージに対するあこがれとか衝動的な感覚が移住をしようというところまで気持ちを高めたのではないだろうか。

妻は10年ほど前に西表島で数ヶ月間ヘルパーのアルバイトをしながら暮らした経験がある<sup>23)</sup>。沖縄に旅行しようと思ったのも、沖縄のあたたかさは気候的に旅行するにはよいと思ったからで、特別沖縄に対して興味があったというわけではない。旅の途中、西表に長期滞在した理由としては、西表の自然に魅力を感じたことをあげている。ただし、そうした自然のすばらしさを具体的にいく前からイメージし、それを期待して行ったわけでは

<sup>22)</sup> 「う～ん...どう... (数秒間沈黙) ...まあ、徐々にというか、時間がたつにつれて、思いが強くなっていったんですね。」という発言にもとづく。

<sup>23)</sup> 長期の旅で最初は沖縄の本島へ行くつもりであったが旅の途中で出会った人に石垣や西表へ行くことを勧められた。

ないようである。もちろん知人から西表がいいところであると紹介されたときにいくらか自然のすばらしさや魅力について語られていた可能性はあるので、あるいは、自分ではイメージや期待を持っているという自覚がないまま西表を訪れていたのかもしれない。西表島への移住については、いずれ何か専門的なスキルを習得してから移住したいとは漠然と考えていたようであるが、移住することを現実的には考えてなかったということである。現実的に移住について考え始めたのは夫と同じく、3年前に西表へ行ったときだったようだ。

#### (g) その他の聞き取り調査

ここで上記に記した5つのケース以外についてもみていくことで石垣島の移住の傾向について検討する。

聞き取り調査の対象者は多くの場合、自分で店を経営するなどして生計をたてているか仕事をしていない場合や店を経営していても生計を立てることを目的としていない場合は基本的に定年退職者や早期退職者で、退職金など十分な蓄えがあることが前提となっている。またこのような場合は、例えばIさんのように、移住を考えてから実際移住するまでにある程度時間をかけて計画的に移住を実行している場合が多い。それに比べて、若い年齢の移住者ほど、わりと身軽に移住している印象を受ける。

また、移住前の石垣経験や移住目的にいくつかの傾向を見出すことができる。例えば、H、I、Jさんの場合、移住前からマリンスポーツを趣味としていたこともあって、石垣島のみならず、沖縄のさまざまな離島を訪れた経験がある。そして、マリンスポーツの趣味があることが移住の動機に大きく影響している。AさんやBさんのような観光リピーターの移住とは違ったパターンの移住者といえるだろう。また、KさんやLさんのように実際に移住しようとするまで石垣島を訪れた経験がなく、「あたたかい」などのイメージに基づいて移住しようとするイメージ先行型の移住者もいる。

#### (h) 考察

以上に挙げたケースはそれぞれ、沖縄へ移住してきた経緯や目的も異なるが、共通して言えることの1つは調査対象者の多くが「リピーター」であるということである。訪れるまでは「沖縄」という大きな枠でしかとらえられていなかったものが実際訪れることにより、具体的な像を持ち始め、さらに、興味・関心がシフトしていくというひとつのパターンが見出せる。また、もとは沖縄へ観光や趣味が目的で訪れていたが、繰り返し沖縄を訪れるうちに沖縄への定住志向が生まれてくると第Ⅲ章で述べていたことともつながる。一

方でKさんやLさんのように沖縄経験がほとんどなく、Fさんのように本に紹介されていた沖縄移住に影響を受けるなど、イメージ先行で移住してくる人も若い人を中心に多くなってきているようだ。そのため、第V章でも記述するが、移住支援を行う移住仲介業者や不動産業者の中には沖縄移住や離島移住のいい面ばかりを植えつけるだけでなく、現実の移住生活についても認識させるような情報提示の仕方をしているものもある。

さらに、石垣島を移住先として選ぶ動機についても共通点を見出せる。移住者たちが移住先に求めるものはそれまでの都会暮らしとはむしろ逆の豊かな自然に囲まれたゆったりした生活であることが多いため、本島は移住者からあまり好まれていない。そうはいっても、生活していくのに不自由なほどライフラインが整っていないような離島も困るので、そのどちらもバランスよく兼ね備えた場所ということで石垣島が移住先として好まれるのである。

しかし、別の見方をすれば、完全に移住者の主観だけで選択されていくのではなく、実は生活の利便性という面から選択肢が限定されているとみることもできるのである。E夫婦の場合、西表島への移住を当初は希望していたが、西表島に賃貸の店舗がなく、店を開くことができなくなってしまうために、結局西表島は断念し、石垣島へ移住している。また、石垣島でもさらに具体的にどの地域で暮らすかということを選択する際にはさらに現実的な条件が関わってくることになる。Bさんの場合、最初は川平に暮らすつもりであったが、生活の不便さとラーメン屋を開業することを考えて、市街地に移り住んだ。Cさんの場合は石垣島の中から50件も候補地を挙げた上で、コストの面や道路に面しているかどうかといった条件と照らし合わせて住むところを決めている。人によって何を生活の中に求めるのかということにおいて多少の差はあるものの、最終的には実際に不自由なく生活していけるのかどうかということが意志決定に大きく影響しているのである。

そうした意志決定を助けるものとして、移住者サポートを行う移住仲介業者や移住者向けに物件紹介を行う不動産業者も増えてきている。また、移住体験などを紹介する書籍や雑誌なども含めて移住者を対象とした「移住ビジネス」<sup>24)</sup>が盛んになってきている。以下の章ではそうした「移住ビジネス」の現状をみていきながら、「移住ビジネス」が移住ブームに与えた影響をみていくこととする。

## V 移住ビジネス

---

<sup>24)</sup> 八重山毎日新聞 2006年11月4日付の「加速する『移住ビジネス』」という見出しの記事による。

## 1) 書籍による移住紹介

### (a) 移住関連図書

近年の沖縄移住ブームに前後して、沖縄での移住に関する雑誌や本、いわゆる「移住本」が数多く出版されている。移住本の内容としては沖縄への移住をすすめるものや、現地での生活（職や住むところなど）についてさまざまな情報を提供するものであったり、実際に沖縄へ移住した人によって書かれた移住体験記的なものも多くある。Fさんが沖縄への移住を考えるようになったきっかけは母親が沖縄移住に関する本を読んでいたことであると語っていたことをふまえると、こうした移住関連図書が出版されることによってより多くの人に沖縄移住を認識させると共に、興味・関心を引く役割を果たしていると考えられる。

WebcatPlus<sup>25)</sup>により、「沖縄移住」をキーワードにして連想検索で書籍の検索をしたところ、13609件もの関連書籍があることがわかった。ただし、この件数の中には沖縄からの海外移住に関連する図書も若干数含まれている可能性があるが、そうであったとしても、かなりの数の移住関連図書が存在していることがわかる。「沖縄移住」に関する書籍は1995年頃にははやくも出版されはじめており、その後徐々に発行数を増やしており、2000年以降は発行数の増加が特に顕著である。このことは沖縄移住に対する興味や関心が高まり始めた時期がちょうどこの時期であることを示しているといえるだろう。

### (b) 移住関連雑誌

沖縄観光関連雑誌だけではなく、沖縄移住関連雑誌も近年では発刊されるようになった。沖縄移住雑誌としては『沖縄スタイル』（樫出版）や『沖縄に住む』（食の王国社）が代表的なものである。雑誌の内容としては、定年退職後の移住をすすめるものや、不動産物件ツアーでの様子などその他移住に関連する情報を掲載している。また、沖縄の美しい自然や情緒ある沖縄の家屋の写真などが多く掲載されている。こうした写真を用いることによって読者にこうした風景の中での生活についてよりリアルにイメージさせ、視覚的にも沖縄移住の魅力を伝えることを狙いとしているように思われる。Lさんは雑誌で石垣島についての記事を見たことで石垣島に興味を持つようになったと聞き取り調査で語っている。留意すべきは、これらの沖縄移住関連雑誌の企画・編集に沖縄移住業者が携わっているケースが多いということである。つまり、沖縄移住関連雑誌の発刊は、昨今の沖縄移住ブー

---

<sup>25)</sup> 設定したテーマに関連する図書を検索できる。検索方法には検索キーワードからそれに関連する図書を検索する「連想検索」と書名や著者名を入力し、必要な図書をピンポイントで検索する「一致検索」の2種類がある。

ムに目をつけた出版社の単独行動ではなく、そこには同じくブームにおいて利益をあげようとする移住仲介業者が大きく関わっているのである。移住仲介業者が移住雑誌の制作に携わることでより多くの人に沖縄移住に関心を持たせ、さらには不動産ツアーなどの記事を掲載しているあたり仲介業者のビジネスアピールもかねているのである。

以上にも述べたように、移住関連図書・雑誌の出版が沖縄移住を一般に広め、興味・関心を高めると同時に、このような出版物に掲載されている沖縄の美しい自然や情緒ある沖縄の家屋とその風景の中で生活を営む人の写真によって、よりリアルな沖縄での生活像をイメージさせる役割を果たしているといえる。リアルな沖縄での生活に対するあこがれがさらに移住を助長させるのではないだろうか。

## 2) 移住仲介業者・不動産業者

沖縄移住を具体的に考え始めたときに、現地での住まいや仕事などについてサポートする事業を行うのが移住仲介業者や不動産業者である。多くの場合は移住仲介と不動産業が何らかのかたちでリンクしている場合が多く、HPなどを通して沖縄移住に関する多くの情報を提供している。そのため、沖縄への移住希望者にとっては大きな情報源になっているものと考えられる。聞き取り調査の対象者の中には移住仲介業者を利用した人はいなかったが、Eさん夫婦が居住地を決める際に現地の不動産業者をあたったことや、CさんやKさんはインターネットを利用して不動産の情報を不動産業者のHPなどから入手していたことからしても移住希望者にとって大きな役割を果たしていることがうかがえる。そこで、いくつかの移住仲介業者および、不動産業者をモデルケースとして取り上げ、その事業内容やHPの内容などから沖縄への移住希望者に対して具体的にどのような働きかけをしているのかということ明らかにした上で移住希望者と移住仲介業者・不動産業者との関わりをみていくことにする。また、モデルケースとして取り上げる業者のうち、R社の社員からは実際に話を聞くことができたので、そのインタビュー内容（資料5）からも業者の事業実態をみていく。

### (a) O社（那覇市）

O社は那覇市を拠点に活動をしており、テレビや雑誌などでもよく取り上げられている会社である。主な事業内容としては、沖縄への移住支援のほかにも海外移住支援や起業支援、コンサルタント業務、就職・転職相談、引越し荷物や車輸送の手配などがあり、多岐にわたっている。その中でも特に、沖縄移住支援の具体的な内容についてみていくことにする。沖縄移住支援の内容を大きく分けると、移住支援サポート、下見サポート、沖縄移

住に関する情報提供がある。

移住支援サポートとは、引越しや住民票手続き、就職・進学など移住希望者が移住して生活をはじめまでの過程をサポートするというものである。O社では不動産物件の紹介業も行っているため、移住先の条件など移住希望者の要望に合わせてそれに見合う物件を紹介しているものと考えられる。また、引越しや就職・進学に関しても自社でサポートすることが可能であるようだ。この移住支援サポートに関しては、複数のプランが用意されており、支払う料金によってサポートの内容が変わってくるという仕組みになっているようである。

下見サポートは、移住希望者を実際に移住予定地や不動産物件の下見へとつれていくサービスである。料金は下見に要する時間によって異なるようであるが、単に下見につれていくだけではなく、本土から沖縄への格安航空券や格安宿泊施設の紹介、レンタカーの手配なども特典としてついてくるようである。この下見サポートについてはかなり人気があるらしく、HPには現在のところ数ヶ月後までは満員でキャンセル待ち状態が続いているという旨のメッセージが掲載されている。沖縄移住の下見についてはO社のみならず、その他の業者・企業でも実施されているようである。

沖縄移住に関する情報提供もHPを中心に充実している。沖縄の気候や自然、文化や歴史に関するものから、沖縄のそれぞれの地域に関する情報、不動産・土地情報、ホテルやマンスリーマンションといった宿泊施設情報、職や教育など沖縄での生活に関わる情報、離島移住や定年退職者の移住についてのアドバイス、移住失敗例、O社を利用して移住した移住者による体験談などがHPには掲載されている。近年、沖縄へ移住する人の数も相当多いものの、一方で沖縄での移住に失敗し、本土へ帰っていく人も多いという現状がある中、沖縄移住の失敗例を掲載すると同時に、O社を利用して沖縄で楽しく移住生活を送っている人たちの声を載せることでO社のような移住をサポートしてくれる第三者の必要性をアピールする効果があるように思える。また、あえて定年退職者の移住について取り上げられていることからみても、団塊の世代を中心とする定年退職者たちが沖縄移住のターゲットとして期待されていることがうかがえる。

#### (b) R社（那覇市）

先述したように、R社については社員の方からR社の事業内容や沖縄移住に関してインタビューを行ったので、インタビュー結果（資料5）も参考にしながら、R社の事業内容についてみていくこととする。

R社は出版・編集企画制作、飲食店のプロデュース・コンサルティング、商品パッケージ

制作、広告代理店業務、イベント講演など沖縄移住支援以外にもさまざまな事業を展開している会社である。出版・編集業務については、音楽や飲食など沖縄に関する情報を発信する雑誌や沖縄の移住に関する雑誌の制作にも関わっている。

沖縄移住支援事業については、沖縄移住希望者向けのサイトを運営しており、サイトでは沖縄での生活や就職、不動産などの情報提供を主に行っている。沖縄移住支援に関してO社と異なる点は、まずO社のように移住者希望者に対して行われるサービスについて内容や料金システムなど具体的なことが掲載されておらず、沖縄移住についての情報発信やアドバイスがメインであるという点である。不動産物件情報に関しても、最新のおすすめ物件としていくつかの物件が紹介されているが、R社において下見につれていくサービスは行っていないようである。また、社員の方の話によると、こうした物件の紹介において特定の不動産会社と特別に提携を結んでいるということはなく、沖縄のさまざまな不動産業者が提供している物件情報から好条件であるものを選んで情報提供をしているということであった。

また、R社では主に本島の諸地域への移住を奨励している。R社では石垣島などの離島への移住について問い合わせが近年多いようであるが、R社としては離島移住のリスクについて相談者に対して喚起を施すようにしているということである。離島への移住を奨励できない理由としてはまず、本島に比べると離島の方は生活の利便性が低いことが挙げられる。特に、移住者が高齢の場合には病院などの施設数が離島の場合は少なく、居住地からは遠い場合が多いのでなかなかすすめることができないということであった。また、もう一つの理由としては、これは特に石垣島に当てはまることであるが、急激に移住者が増加することによってさまざまな問題が発生しているということがあるようだ。

### (c) H社（石垣市）

H社は石垣島を拠点に、石垣島の物件の紹介を行う不動産会社である。紹介している物件の傾向をみると、アパート・マンションは南部市街地周辺に比較的集中しているものの、土地については南部の市街地周辺だけでなく、北部の海沿い地域にも分布している。特に北部の海沿い地域では写真やコメントを通じて美しい海を見渡せる眺めのよさをアピールしていることが多い。一方、それに対して南部市街地周辺地域の物件紹介では、生活の利便性のよさをアピールしているものが多く、同じ石垣島であってもそれぞれの地域によって趣が大きく異なっていることがわかる。また、レンタルルームといういわゆるウィークリー・マンスリーマンション的な貸家も存在し、数日単位で暮らせる施設も紹介されている。こうしたウィークリー・マンスリーマンションが増えてきた背景には第Ⅲ章で述

べたリピーターの長期滞在志向や近年の移住ブームが関係しているものと考えられる。一時的にこうした施設を利用して石垣島での暮らしを体験してみたうえで移住をするか否かを決める移住希望者が増えてきているのである。さらには、一時的に石垣島で生活するつもりでやってきてそのまま暮らしつづける人がいることで幽霊人口の増加にも関わっているものと考えることができるのではないだろうか。

また、H社のHPでは不動産情報だけでなく、石垣島への移住に関する情報やアドバイスを多数掲載しており、いかに移住者の利用を意識しているかが窺い知れる。掲載されている情報の具体的内容としては、求人や土地・物件に関することや、景観破壊など石垣島で起こっている移住にまつわる問題についても言及している。移住希望者からの質問や相談に対する返答なども行われている。H社のように不動産業に主眼を置きつつも、一方では増えつづける移住者に対応するべく、自社で独自に情報収集を行って移住希望者向けに情報提供を行う不動産業者も存在している。

## VI おわりに

海洋博の開催に伴い、沖縄特有の自然や気候を中心に「沖縄イメージ」が形成され、そして大規模な観光開発や航空会社の沖縄キャンペーンなどによって、沖縄が観光地として発展していく中で「沖縄イメージ」は人々の中に広がっていった。ただ漠然と「沖縄イメージ」として存在していたものが本島や離島というように切り離されてみられるようになり始めたのが離島の観光ブームであり、航空会社や旅行会社で企画されるツアーの宣伝などによって、「沖縄」という漠然とした認識から「沖縄の本島／離島」というイメージの分化がおこった。イメージはさらに「沖縄」へ観光客を呼び寄せ、観光発展を続けていく中で、観光客のリピーター率が高まってくる。こうしたリピーターの中から長期滞在者、あるいは移住者へとシフトしはじめる者が現れはじめ、そこにメディアや移住仲介業者・不動産業者のはたらきも加わって、移住者が増加し、「移住ブーム」へとつながっていったと考えられる。

また、聞き取り調査を通してわかったこととしては、最初に移住する際には漠然としたイメージを持ち、そのイメージに沿って移住者が移住先を具体的に絞り込んでいけばいくほど、実際の生活における利便性やインフラなどの問題が意志決定に大きく影響を与えていき、移住者の主観だけに頼った移住地選好が為されにくくなるということである。そこからは移住者側はあこがれやイメージを持って移住先を選択していくが、その過程の中で選択肢が必然的に限定されていくという構造が浮かび上がってくる。

近年の沖縄移住ブームについて、海洋博の開催に伴う沖縄イメージの形成・分化やそれ以降の沖縄の観光発展の流れを通してみてきたが、第V章でも述べたように沖縄への移住増加を受けて、「移住本」なるものが出版されたり、インターネットでも沖縄移住に関する情報は移住を支援する移住仲介業者や不動産業者のHPや移住者のブログなどを通して容易に得ることができる。移住仲介業者や旅行会社は移住下見ツアーを企画するなど、「移住ビジネス」がさかんになっている。石垣島で聞き取り調査に応じてくださった方の中には観光客向けに商売をされている方も数人いらっしゃったが、最近では客としてくる観光客に石垣島での生活のことや、近辺に売りだし中の物件はないかといったことを質問されることが増えてきているという。このことは移住を視野に入れて本土から訪れる人が増えていくことを表しているといえるだろう。

こうした移住ブームのもと、石垣島では観光客数は毎年増えつづけ、マンションやアパートなどの建設が盛んで、一部の経済関係者には「沖縄では八重山の1人勝ち」といわれるほど景気は活気付いている。しかし、そのようにささやかれる一方で、それが石垣島の人々には十分に配分されていない現状や、石垣市の財政も以前財政難の状況を脱していない現実がある<sup>26)</sup>。また、新たに生じている問題もいくつかある。石垣島における無秩序な建設ラッシュにより、海洋汚染や景観破壊が起こっていたり、移住者が居住している地区の道路や水道などのインフラが未整備な状態であっても、市は財政難のため早急に対処できない現状がある。しかし、市街地には移住者が経営する店なども多くあり、石垣島の経済の一端を担う存在として無視することはできないというのも事実である。現地住人は現地住人の、移住者は移住者のコミュニティが別に形成される場合が多く、地域との関わりに消極的な人も少なくはなく、住人同士の結びつきそのものが弱いところもあると言われている中で、互いが地域問題解決に向けてどのように連帯していけるかが課題であると思う。

(24546字)

---

<sup>26)</sup> 八重山オンラインの2008年1月9日付の「八重山は本当に元気ですか」という見出しの記事による。

## 資料2 聞き取り結果概要

Aさん夫妻（夫40代後半、妻40代前半・山原地区在住）

- ・ 横浜出身
- ・ 無職（趣味で焼き物）
- ・ 移住歴1年；市街地→今年1月に山原地区へ
- ・ 移住前は夫婦ともに広告代理店勤務
- ・ 移住前沖縄へ行った経験

夫の方は仕事で何度も訪れている。石垣へは7、8年前から数回夫婦で旅行

- ・ 移住の経緯

夫婦でいつかは田舎暮らしがしたいと考えていた。海や山などの自然があるところということで沖縄を移住先の候補地に。具体的には生活の利便性も考えて本島・宮古島・石垣島に絞っていた。

- ・ 石垣島へ移住を決めた理由

① 石垣島には基地がないことや、上陸戦がなかったことで他に比べて精神的ハードルが少ないように思えた

② ハワイのマウイに雰囲気似ているように感じた（妻はハワイが好きで何度も行っていた）

- ・ 石垣島での居住地選択

4年前に観光で石垣島を訪れたときに今暮らしているところの土地が気に入り購入していた（そのときはすぐに移住するつもりはなかったが、夫が体調を崩して仕事を休んだのをきっかけに移住）

Bさん（50代後半男性、新栄町在住）

- ・ 埼玉出身
- ・ 夫婦でラーメン店経営
- ・ 移住歴3年
- ・ 移住前は会社員
- ・ 移住前沖縄へ行った経験

観光で石垣島や本島に行った

- ・ 移住の経緯

会社を早期退職して何か商売をしようと思った。店を出すなら競争が激しすぎず、暖かいところでやりたいと思った。

- ・ 石垣島へ移住を決めた理由

観光で石垣島を訪れたときに、田舎だが利便性の高いところに魅力を感じた。

本島は都会過ぎて、東京や大阪と変わらない。

- ・ 石垣島での居住地選択

最初は川平に1ヶ月賃貸を借りて暮らしていた。（ラーメン屋をする前に1年ぐらいいは何もせずのんびり暮らすつもりだった）遊びには気軽

だが、生活には不便だった。ラーメン屋をすることを考えても、市街地の方が客がある。

Cさん（50代後半男性・山原地区在住）

- ・ 千葉出身
- ・ 蝶の標本などを展示した博物館経営
- ・ 移住歴5年
- ・ 移住前沖縄へ行った経験

本島へは昔からよく行っていた。石垣へは6年前はじめて行った

- ・ 移住の経緯

息子の結婚を機に会社を早期退職。

昔から趣味であった昆虫の研究をするためにインドネシアやマレーシアなど南方の国へ行くことを考えたが、治安悪化などを理由に国内で1年中研究ができるところ（＝八重山諸島）へ移住先を変更した

- ・ 石垣島へ移住を決めた理由

① 八重山諸島の中で生活の利便性を考えると石垣島しか残らなかった

② 6年前に石垣島を訪れたときに好印象を持った

- ・ 石垣島での居住地選択

インターネットで土地を検索←コスト・立地条件

当時はそこまで地価は高くなく、むしろ建物にかかる費用のほうが多かった。

- ・ その他

農振からはずれた山原地区の土地は5、6年前には1度は完売したが、その後移住をやめて転売されるところが出始めた。

土地の値段の高騰の原因は転売にもあるといえる。

Dさん（30代男性・吉原地区在住）

- ・ 横浜出身
- ・ 焼き物工房（観光者向け）経営
- ・ 移住歴10年；石垣4年（飲食店アルバイト2年・飲食店経営2年）→本島2年半（焼き物の勉強）→石垣3年半（焼き物工房経営）
- ・ 移住前は飲食業
- ・ 移住前沖縄へ行った経験

友人の姉が沖縄で教員をしていて、たびたび沖縄へ旅行（本島、波照間島・石垣島）

- ・ 石垣へ移住を決めた理由

① 飲食業をやっている自分の店を持ちたいと考えたときに、横浜で店を出すよりもビジネス

チャンスがあると考えた

② 南の島へのあこがれ←実際に石垣島を訪れてみて感じた雰囲気が南の島のイメージに合った

・ 石垣島での居住地選択

アルバイト・店経営時は市街地、島の人から工房を譲り受けたのを機に吉原地区へ

・ その他

移住に興味を持って観光にくる人が増えている。(観光客に暮らしについて質問されることが増えた)

→年配の人や、技術職を持った人(美容師など)が多い

Eさん夫妻(30代前半、川平在住(店は山原地区))

・ 横浜出身

・ 手作り雑貨店経営

・ 移住歴2年

・ 移住前は会社員

・ 移住前沖縄へ行った経験

妻は10年前ヘルパーとして西表で暮らしていたことがあった

夫婦では3年前西表島の知り合いのところへ遊びに行った

・ 移住の経緯

3年前西表の知り合いのところへ行って、知り合いの暮らしぶりにあこがれるようになった→移住してデザイン関係の仕事がしたい

最初は西表へ移住して雑貨店をひらくつもりだった

・ 石垣島へ移住を決めた理由

生活する分には西表でも問題なかったが、西表島には店舗賃貸がなかった

店を出すことを考えると石垣の方がよかった

・ 居住地

予算などをふまえたうえで地元の不動産会社をあたった

・ その他

年配の観光客から、石垣での生活のことや山原地区でまだ残っている土地はないかなどよく質問される。

Fさん(30代女性・吉原地区在住)

・ 大阪出身

・ 焼き物工房(観光者向け)経営

・ 移住歴5年

・ 移住前は保育士

・ 移住前沖縄へ行った経験

観光で訪れた経験あり(そのときは移住など

考えていなかった)

・ 移住のきっかけ

1人暮らしをはじめたいと考えていたときに、母親から沖縄(本島)への移住をすすめられた(母親は沖縄への移住に関することが書かれた本を読んでいた)

・ 石垣へ移住を決めた理由

はじめは本島で暮らすことを考えたが、以下の理由で焼き物・藍染めが盛んな石垣島に移住を決める。

① 本島は都会過ぎて大阪に暮らしていたとき

とそれほど環境が変わらないこと

② 焼き物や藍染めに興味を持ったこと

・ 石垣島での居住地選択

求人や生活の利便性を考えて市街地→結婚後、吉原地区へ

・ その他

石垣へ移住後子供が生まれた場合、子供の教育のことを考えて小・中に子供があがる頃に内地へ戻りたいと考える人が多いようである。(学校が遠い。島には高校が3つしかない。)

※Dさんとは夫婦であるが、移住後結婚しているのでインタビューは個別に行った。

Gさん(60代男性・山原地区在住)

・ 東京出身

・ 無職

・ 移住歴3年

・ 移住前沖縄へ行った経験

10年ほど前からダイビングで石垣島や座間味島へ行っていた

・ 移住の経緯

定年後、夫婦で沖縄への移住を考える

・ 石垣島へ移住を決めた理由

① ダイビングができるところ

② 他の離島に比べると利便性が高い

③ 石垣島に暮らす人の人柄に惹かれた

・ 石垣島での居住地選択

知り合いからの紹介で土地を購入

Hさん(50代後半男性・山原地区在住)

・ 神戸出身

・ 無職

・ 移住歴2年

・ 移住前は会社経営者

・ 移住前沖縄へ行った経験

22年前から海が好きで沖縄のいろいろなどころへ行っていた。

・ 石垣島へ移住を決めた理由

① ダイビングやシュノーケリングをするため

に何度か川平を訪れているうちに漠然と移住したいと考えるようになっていた。

② 島の人々が魅力的だった

- ・ 石垣島での居住地選択

10年前に旅行で訪れたときに、たまたま売却されていた土地を購入した。

Iさん(30代女性、登野城在住)

- ・ 東京出身
- ・ ダイビングショップ経営
- ・ 移住歴5年
- ・ 移住前はOL
- ・ 移住前沖縄へ行った経験

趣味がダイビングなので、観光で石垣島を訪れたことがあった

- ・ 石垣島への移住の経緯

ダイビングのときに使っていたショップが気に入りそこで働きたいと思い、会社を辞め、ダイブマスターの資格を取った。

その後、1度は東京に戻ったが、石垣島の方が時間的余裕もあり、生活しやすく感じたため、再度石垣島へ

- ・ 石垣島での居住地選択

ダイビングショップをするには川平など海沿いもいいが、生活が不便

生活の利便性がある程度あって、その上足を伸ばせば自然→市街地

- ・ その他

石垣島には内地出身者が多く、島人が内地人を受け入れる風土がそなわっている。

Jさん(40代男性、美崎町在住)

- ・ 大阪出身
- ・ 飲食店経営
- ・ 移住歴5年
- ・ 移住前は会社員
- ・ 移住前沖縄へ行った経験

沖縄各地を3か月間かけてまわった

- ・ 移住の経緯

南の島で暮らしたいと考えた(外国は言葉や治安などが問題)

- ・ 石垣島へ移住を決めた理由

自然が豊富だったこと

知り合いから店をやらないかと誘われた

- ・ 石垣島での居住地選択

最初は川平に住みたいと思っていたが、(当時は)あまり賃貸住宅がなかったこと、仕事がないこと、田舎すぎて生活に不便であることなどを理由に市街地に住むことにした。

Kさん(20代後半男性、美崎町在住)

- ・ 仙台出身
- ・ 宿泊施設従業員
- ・ 移住歴6年
- ・ 移住前はフリーター
- ・ 移住の経緯

仙台の寒い気候に嫌気がさし、1年中暖かいところで生活したいと考えた。

1年中暖かいところというのでイメージしたのが沖縄だったので、インターネットなどで沖縄について調べ、候補地を本島、宮古、石垣に絞る。(インターネットで調べた内容…気候、不動産、観光に関するサイトなど)

- ・ 石垣島へ移住を決めた理由

候補地を絞った上で何度か観光で訪れてみて、石垣島に暮らす人の人柄や住みやすさが気に入り、石垣で暮らすことにした。

- ・ 石垣島での居住地選択

求職や利便性を考えると、必然的に街中で住むところや仕事をさがすことになった

Lさん(30代前半男性、美崎町)

- ・ 宮崎出身
- ・ 手作りのアクセサリー・小物を販売する店を経営
- ・ 移住歴5年

- ・ 移住前はバックハッカーを2、3年していた
- ・ 石垣島へは移住前に行ったことがなかった
- ・ 石垣島へ移住した経緯

田舎のほうで暮らしてみたいと考えたときに雑誌でたまたま石垣島の記事を見た。

石垣島へは行ったことはなかったが興味を持ち、情報誌などを見て情報を集めた。

- ・ 石垣島での居住地選択

最初からアクセサリーや小物を作って店を出す気があったわけではないが、ものづくりをしながら生活したいと考えたので、人が集まってくるところを中心に探した。最初は露店販売をしていたが、その後知り合いの紹介で出店。

### 資料3 電話聞き取り内容

資料3-1 Aさん夫婦（吉原地区在住）  
※電話インタビューを行ったのは奥さんの方

問：石垣島へ移住する前段階として沖縄へ移住をしようと決めた経緯は？

答：そもそも、いつか田舎に暮らしてみたいなっていうのがあって、で、その中で、あの～、いろんなとこいったことあるけど、どこがいいかなって思ったときに、あったかいとこがいいよねっていうようなところがあって、で、沖縄の文化とか生活っていうのをうちの主人の方からものすごく、仕事柄きいたことがあったので、沖縄が漠然とイメージにあった。

問：例えば、田舎ぐらしをしたいというのがあって、日本各地にいろいろ田舎がある中で暖かいところやあとは文化に惹かれたという点で沖縄ということなんですけど、具体的に沖縄に移住して生活をするということに対して、どのようなイメージを持っていらっしゃったんでしょうか？

答：…（数秒間沈黙）…今の生活はそれほどイメージからは離れてないですよ。あの、もう、何ていうのかな～、無鉄砲に来てるわけではないので、計画的に来てるので、だいたい土地を購入して、その～、住むにあたってはこういうベース、何ていうかな、借家で、街中で住んでいて、けっこう街から遠くても、海が見えるところで、私の場合は陶芸やりながら生活していくベースがほしいなっていうので考え始めたんですけど、それで、いつかっていうのは、あの、最初に想像していたときよりは早かったぐらいですけど。

問：以前インタビューさせてもらったときにも、旦那さんの方は仕事の関係で何度も沖縄に行かれていたということなんですけれども、奥さんの方は沖縄の経験は？

答：沖縄はね～、ないです。あの～主人と一緒に旅行で石垣島に。あの、彼も離島はなかったの。

問：（旦那さんは）本島ばかりということですか？

答：本島ばかりだったの、このあいだも話したかもしれないけど、ひとつは沖縄の戦争とか、米軍の影響も少なく、あの、本島と違って、気軽な、ちょっと楽な島であるということもあるのと、あと1つは、まあ、病院であるとかそういうのがある程度あるっていうのはでっかいとおもいますが、え～っと、あと私自身はウィンドサーフィンやってたので、ハワイに何度も行って、ハワイもオアフ島と他の離島があって、マウイ島と石垣島、沖縄本島とハワイのオアフ対マウイみたいな、ちょっと似てる場所があるんですよ。山の感じも似てたりするんで、そういうのも、ハワイまで行かなくてもいい

んじゃないって軽いところがあります。

問：逆に、ハワイに移住しようっていう案はでなかったんですか？

答：ちょっと遠いっていうのと、そこはアメリカ圏なんで、日本語の方が楽だし、沖縄は日本の中ではちょっと違う文化だけど、アメリカほどは違わないから。向こうは全然違う。

問：先ほどご主人が何度も仕事で沖縄へ行かれてたということを知ったんですが、それより以前から、ご夫婦で沖縄に対して何か興味などはあったんですか？

答：それは特にないんだけど。

問：そうなんですか。それじゃあ、仕事で行くようになってからっていう部分が（大きいんですか？）

答：それは、ほんとは彼が答えるべきなんですけど、社会的な意味で、返還されてきた沖縄について一般的な知識はあったらと思うけど、彼が行くようになったのは、10年以上前のことだから、そのとき彼は行き始めたときに、沖縄のその～テレビ局や新聞社あたりの人たちと沖縄文化研究会みたいなことをちょっとプライベートでみんなできりながら、なんかそういう古いお話だとか、戦争の話しただけじゃなくて、なんかそういうのを昔調べたり、喋ったり、話し合ったりしてたんですけど。言っていなかったっけ？

問：はい、仕事を通じて何度も沖縄に行かれたっていうのは聞いてたんですけど。

答：なんか、そういう仕事を通じた同年代の若い人たちで沖縄の勉強会をちょっとしてみたりだとか、でもまあ、一番はやっぱり仕事で沖縄の人たちと、沖縄の人たちに向かって、仕事をしていくことによって、得たものが大きいんだと思うんですけど、なんか、何十回か、三十回か四十回とか行ってるんですけど。

問：そんなに何回も行ってるんですね。

答：ただ旅行に行くのとは全然違うから、あの、深く入りますよね。いい意味でも、悪い意味でも、そうすると理解が深いんだと思います。

問：以前にも田舎ぐらしがしたいっていうことから本島は候補から外れたとうかがってたんですが、そこは最初から本島に住むつもりはなかったんですか？

答：あんまりなかったですね。本島だとどうしても米軍が、感じずに生きてはいけなくなってしまうので。住んでれば、まだ、もともとそんなの関係なく住んでおけばなんてことはないでしょうけど、それを選ぶときにやっぱりちょっとしんどくなりますよね。触れずにいけないかと。わざわざ選ぶにはちょっとしんどいかと。

問：あと、実際わたしもこの前石垣に行ってみて、たしかに自然もたくさんあって、いいところだな〜って感じたんですけど、じゃあ、移住してみたいかといわれれば、たまに観光で行くので十分やなと思ったんですけど、ご夫婦で何年前かに石垣に観光でいらっしやってたということですけど、それが移住っていうふうに変換していったのっていうのは、どういう（きっかけだったんでしょうか）。

答：えっと、これは旦那はちょっとわかんないですけど、その、正確な状況はわかんないですけど、2人とも忙しく、頑張ってたので、はやく違う生活をリセットできるチャンスはそれぞれ二人とも持っていたとは思ってますね。わたしも40になったら、その、違う生活をしたくなっているのを思っていて、40過ぎて、しばらく、45までには何とかしたいなって思ってた、42ぐらいだったんですけど、都会、都会っていうか、東京の仕事でぎゅうぎゅうしている生活だけじゃない、違う人生をもう一回やりたい。だから田舎ぐらしって言っても、特別農業やるわけでもないし、自営業やるわけでもない、あの〜本当の意味での、よくある田舎の自給自足みたいな生活はしてませんが、もうちょっとゆるやかな、スピードのそれほど速くない生活で、豊かな生活っていうものはどんなものか知りたかった。

問：実際に移住する前とあとではそんなにイメージに変化はないということだったんですけど、具体的にはどういうイメージをもってらっしゃったんでしょうか。

答：う〜んと、例えば何も知らずに来たら、想像を絶することってあるのかもしれないけど、あの〜ここになって決めてから住むまでがわりと短かったので、2年半ぐらいかな？ものすごくリアルに想像していたんですね。

問：例えばどういうところをリアルに？

答：っていうか、その、経済的な面で、いくら貯金があったからはじめて、毎日どれくらい使うかっていう、その経済的なものが生活の想像の1つと、あとは家と土地はもう決まっているから、あとは家を建てるんだけれども、建てるために土地を何度も見て、こういうものを建てたらこういう風に生活していこうっていう想像があるのと、あと、陶芸をやるだろうっていう、陶芸をやるためにどういうふうなことをやっていけないといけないかっていうようなこと。

問：今お話頂いたのは、自分たちの生活に関するイメージをはなしていただいたんだと思うんですけど、沖縄に対してのイメージ、というか、その土地に対するイメージっていうんですかね、生活の環境に対するイメージっていうのはありますか？

答：…（数秒間沈黙）…沖縄に対するイメージっていう

のは、さっき沖縄文化に興味深いつて、おもしろいつて思っているんだけど、それにどっぷりつかりたいと思っているわけでもなんでもなかったの、あの、そこはわたしたちが今住んでるとはほどよい距離感でいろんなものがみれるので、それもそれほど、なんていうの、住んでみてびっくりしたっていうのはないのね。あの、ここの地域は特に特殊なところで、その、昔からの人がすぐそばには住んでいないので、以外と今までと変わらない生活を送れなくはないの。ただ、沖縄、東京ではないので、他の地方の都市がわからないんだけど、東京ではないので、あの〜なんていうの、役所のスピード感が遅いか何か言ってもすぐできないとかね、そういうのはびっくりすることはいっぱいあるんだけど、家建てるにしても、何か注文するにしても、すごく対応が遅かったり、急に来たりするのはびっくりするんだけど、それもまあ人から話をきいていた通りだったので、ああ、これが石垣ねってある程度笑えるっていうのはいくらでもあるんだけど、環境っていう意味では、いまだにうちカーテンを、カーテン代の請求が来てないんですけど、カーテン付けに来るのに3ヶ月ぐらいかかって、かとおもったら急にやってきて、急に工事したと思ったら、だあ〜とつけていって、請求が来てないけど大丈夫かしら〜って思うようなことは確かにあるんだけど、そういうのはびっくりします。

問：おかげさまで、Bさん以外にも石垣に移住した方からいろいろとお話を聞かせていただくことができたんですけど、沖縄のイメージ、例えば海がきれいだったり、自然が豊かだっていうような沖縄に対するイメージに対してのあこがれとかってうのを持って来られた方が多かったんですが、そういった面というのはどうでしょうか？

答：ちゃんと言えてないかもしれないけど、それはベアシックにありますね。

問：もともと、無意識というか、意識はしてないけれども…

答：ほんとに言っていないかもしれないけれども、やっぱり海が見えるところに住みたいと思ったりとか、沖縄県が一番高い山がすぐそばにあるので、あの、内地的には低い山ですけど、自然が豊かだとか、あの、そこで遊んだりはあるんじゃないんですけど、ダイビングもちょっとしかないんですけど、ちょっと船出すと、ものすごい日本では考えられないくらい海がいっぱいありますから、やっぱり、自然環境ありき。

問：自分が意識してないところでそういったイメージが組み込まれている…

答：っていうか、ちゃんと説明できてないっていう、当然それがあるから来てるっていうのはあるよね。

問：そういったイメージはもう沖縄に来る前から持っているものなんですか？

答：そうですね。だって、漠としてはもちろん南の島っていうのは、漠としてはありますけど、あの具体的にどんだけ、どういうものがあるかっていうのは旅行できて、見てみたりとか、実際にいろんなツアーに行ってみたりとか、行って見て初めて具体的に知るわけですけどね。

### 資料3-2 Bさん（新栄町在住）

問：会社を退職されて、あまり競争が激しくなく、あつたかいところで商売をしようと思ったという風に以前うかがったと思うんですけども、もうその時点からいきなり沖縄っていう選択肢しか挙がらなかったんですか？

答：え〜とね、いずれにしてもあつたかいところには住みたいなっていうふうには以前から思ってたんで、それで、こっちに来る以前にわたし東京で居酒屋をやってたんですね。埼玉で、で、要は商売しかわたしは能力がないと自分では思ってるんで、え〜その中でも生活の足しになれぬいってということで、ラーメン屋か焼き鳥屋の両方の選択肢を持ってこっちに来たんですけども、来るにあたっては、え〜なんせ旅行、以前言ったと思うんですけども、旅行してて、いろいろ外国行っても、で、いろんな外国のことも考えたんですけども、あの、沖縄の石垣に毎年毎年、3年か4年ずつと来るようになって、まあ、ここだったら、日本で、日本なので、非常に生活もしやすく、老後、少しは仕事をしながら生活するにはいいなあって以前から思ってたんで、それで、そちらの方の飲食店の状況が非常に悪化したんですね。全体的に、交通の問題もあったり、飲酒運転の問題もあったり、いろいろなことで経済状況もあったり、非常に厳しい飲食店の状況に最初は東京あたりからなってきたわけですよ。え〜それにあたって、もうとにかく、住むところ移動することに、そうですね。住むところも変えようということで、まあ、あの〜、いざさかの蓄えもあったので、1年間遊びながら、いろんな様子を見て、ここで実際住めるか住めないか、仕事ができるかできないかということで1年間余裕を持ってこっちに来て、それでまあ、いけそうだということでラーメン屋をはじめたというわけです。

問：先ほど、商売をするしないに関わらずいずれはあつたかいところという風に考えていたとうかがったんですが、日本の国内であつたかいところっていうふうを探したときにもう沖縄しか思い浮かばなかったんですか？

答：そうですね、もう以前からこちらに旅行して、だいたいの様子がかかっていたので、はい。

だから旅行とかしなかったら、決まっていなかったでしょうね。

問：じゃあ、その旅行経験があったからこそ、あつたかいところ…

答：そうですね。だから、その基礎経験っていうのがあって、で、多少地理もわかっているし、まあそういうこと、そんなとき知り合いもできましたのでね。そういうようなことが大きいでしょうね。

その、沖縄に旅行するようになったのっていうのはどれくらい前からのことなんですか？

5年くらい前か、こっちへ来てもう5年だから、8年くらい前ですね。

問：何回くらい行ったんですか？

答：そうですね、毎年毎年来てましたね。

問：毎年毎年来てた理由っていうのは？

答：理由はうちの、あの〜、奥さんもスナックやりましたし、え〜わたしもサラリーマンやりましたけれども、年に1、2回旅行するというのがうちの、なんていうんですかね、年間スケジュールみたいのがありまして、それで旅行するということになって、それでずっと、一回来た時に気に入ってたんで、え〜、ここに来るようになりましてね。

問：一回来てみて気に入った後は他のところへは行って見ようとは思わなかったんですか？

答：ああ、それ以前までずっと外国に行っていましたんで、え〜、タイだとか、え〜、ベトナムだとかグアムとかサイパンだとか、いろいろ遊ぶだけだったらいろいろあったんですけども、後半になってくると、一応住む前提みたいなことを考えながら旅行していたので。

問：その住む前提っていうのがあったから、国内でもあつたかいところということで特に沖縄という感じですか？

答：はい。それも沖縄でも、あんまり都会は嫌いなんですよ、わたしは。だから那覇は嫌いだから、東京とあんまりかわらない、人も多い、車も多い。その中で、離島の方でライフラインがしっかりしているところが最終的に石垣島なんですよ。あとはもう病院もないし、もちろんスーパーもコンビニもないし、そういう離島がぼこぼこありますけど、そこまで行く元気はないんです。

問：そうですね、石垣は特に離島の中でも利便性が高い…

答：そうですね。病院だとか、え〜、交通の便だとか、物の便だとか、え〜、ライフラインはしっかりしてます

んでねここは、どこにも行くことなく。

問：もう離島っていうのを考えたときには他の離島のことは全く考えなかったんですか？

答：あとは遊びに行けばいいと思ってましたから、住む気はなかったですね。

問：離島の中では石垣島以外にも、宮古島とかが移住者の方には人気だと聞いたんですけども…

答：宮古島は観光で行かなかったから、あの～要は選択肢に入ってなかったですね。

問：じゃあ、もう旅行で行ったっていうところでもう、離島に住むなら石垣というようになったんですね。

答：あんまり、あの～僕、考えるときにいろんなところへいろんな検索をしないんですよ。

ほとんど自分がよければもう次ぎのものは消してしまうんですね。だから、そういう性格も手伝って、決めることがすごく早いんですよ。

問：じゃあ、物事を決めるときには他を検索するのではなく、そのときのめぐり合わせで決めてしまうんですね。

答：そうですね。だからそのときいいところを、よりよくすることを考える性格なので、他のところは探さないです。迷いますから。

### 資料3-3 Cさん(吉原地区在住)

問：以前、インタビューさせていただいたときに沖縄本島の方へはよく行ってたとおっしゃってたと思うんですけども、それはお仕事か何かで？

答：いや、プライベートです。

問：プライベート、旅行でということですね。それはだいたい何年くらい前からのことなんですか？

答：15年くらい前ですね。

問：15年くらい前から旅行で沖縄へ行くようになったきっかけはどういう？

答：それはもう、蝶々の関係です。

問：本島の方にも蝶々の研究で行ってらっしゃったんですか？

答：はい。

問：それはもう本島にしかいない蝶々とかっていろいろあるんですか？

答：本州にいない蝶が沖縄本島に

問：そのときはまだ石垣へはまだ行ってらっしゃらな

ったんですか？

答：そうですね。旅費の関係もありましたね。本島は安い。頻繁に行ける、行けますよね。旅費の関係だけです。

問：蝶の研究以外の、本当の観光目的でっていうのは？

答：それはしたことはないです。

問：沖縄に行く前と行った後とで沖縄に対するイメージに差はできましたか？

答：…(数秒間)…それはあの～、蝶々が多いっていうイメージ。

問：もう、蝶々に関する観点でのイメージということですか？

答：ええ。もう街は同じですもんね。都会とね。そこに魅力は全然感じてなかったですね。町並みの魅力はまったく感じてなかったですね。多少自然が残ってたので、そっちの面ではよかったですね。

問：わたしが他にインタビューさせてもらった方の中では、沖縄の自然に魅力を感じたとか独特の文化に興味を持ったというのをきっかけに沖縄へ来られた方が多かったんですが、そういう部分というのは意識はありましたか？

答：ないですね。

問：それは、無意識の中でそういった部分を前提にしていたということも？

答：…(数秒間沈黙)…ないですね。蝶がいるから来ただけです。ただあの～、小さい頃から、あの～、沖縄とかの写真、蝶の写真集なんか見るにつれて、蝶のすばらしさだけでなく、風光明媚なところとか、そんな認識はもちろんありましたよね。だから、別に石垣島の、沖縄石垣の風光明媚を無視するんじゃないで、それも舞台として、ステージ上にあるっていう前提ですけどもね。ただ、蝶が目的で来たわけであって、環境の中で蝶がいるなっていう。

問：あくまでも蝶がメインでっていうことですね。

答：だから、最近の沖縄ブームとかそれは一切関係ないです。

問：あと、本島の方へはずっと行かれてて、石垣の方へは6年前に初めて行かれたということだったと思うんですけども、6年前に石垣を訪れたときに好印象を持たれたということなんですか？

答：まあ、そうですね。あの、印象というか直感的な

のを感じたんですね。ちょっとうまく言い表せないけど。

問：その直感的なものってというのは？

答：1つは沖縄本島以上に蝶が多かったっていう。だからもう日本一蝶が多いのと、あと、時間が止まったような空間っていうのを感じましたね。

問：以前にお話をうかがったときにも時間がゆっくり感じることに對しての癒しとかっていうのも感じられたっていうふうにおっしゃってたんですけど、それはもう訪れたときに、訪れたからこそ感じれた感覚なんですか？

答：そうですね。

問：6年前に石垣に来られる前までは、そういったことに対する期待は、石垣に対してイメージとして持っていたらっしゃったんでしょうか？そういう石垣に癒しを求めるような期待というのは？

答：ないね、なかったですね。たぶん結構石垣は不勉強で来ましたから、自然のイメージとかほとんどなかったですね。

問：実際に石垣へ移住しようとなったときにインターネットで住むところとかをお探しになったというふうにうかがったんですけど、そのときインターネットで土地などを検索するのに具体的にはどういうところを中心に調べになったんでしょうか？

答：あの～、…（数秒間沈黙）…、土地のことですか？

問：はい、あの～、石垣で具体的に住まいというか住むところを探すのに、例えば地元の不動産会社に聞いてみたりとか…

答：そういう意味では複数社ですね。雑誌からインターネットでアクセスできるところを検索しましたから。

問：じゃあ、現地の土地とかに関する情報を流している媒体に関してはもう、いろいろ？

答：そうですね。

問：わりとその頃から現地の不動産の会社っていうのは移住者を前提にしたような土地の売り出し方をしていたんですか？

答：始まってたんじゃないですかね、徐々にね。

問：例えば、どういった地域の土地を売り出しているのが多かったか、とかそういう場所的な偏りというのはありましたか？

答：いや、偏りはないですね。完璧なところでしたよ。その街中の販売物件もあったし、ばらつきがありましたね。あの、地元の人を買うのは、もう、街中しか買わな

い。島ですけども、地方に行こうなんていうのは思いませんから、街中以外、団体以外のところ、販売するってことはもう、本土向けの販売しかないんですね。住む人は本土の人しかいないから。だから、そういう動きをもう石垣の不動産も何かしら動き出していたので、まあ、移住のどうこうっていうのはあったんでしょうね。そういう街中以外のところの部分っていうのは、景色がいいとかね。そんなPRコピーでしたよ。

問：そうするとそのころからわりと、街中以外の地域っていうのは本土からの移住者向けに…

答：開発が動き出していた。

問：そしてそれに対して不動産会社のほうも、そういうアピールの仕方を…

答：やりだしていた頃ですね。

問：では、そういうようなアピールを受けながら居住地を選んでいかれたってことで、まあ、当時はやっぱり、コストのこととか立地条件ということを中心に探されていたということだったと思うんですけども、その立地条件というのは具体的には？

答：あの、もともとこの博物館をつくるつもりでいましたから、ある程度観光客が訪れる、訪れやすい場所で道路のそばでせつかく移住するから多少は風光明媚なところ。

いくつかのパラメーターはありましたけどね。

問：その、例えば人が集まるっていう点だけをみてみたら、街中ってうのも結構人がきやすいように思うんですけども、候補としては挙がらなかったんですか？

答：候補もありましたよ、街中も。高いですね。

問：高いんですか？

答：価格、土地の価格が。もう今はこういうところもね、ぐ～っと土地あがってきてしまいましたけれども、街中は当時は土地の価格が全然違う。

問：街中も含めていろんなところを候補地に挙げていたということで、今お住まいの吉原というか山原の地区以外に、もし覚えてらっしゃったら具体的に教えていただきたいんですが。

答：もう、市内も見ましたしね。市内でも見たんですよ、一応物件的な本。そっから全部見てましたよ。白保もあるし、伊原間もあるし、野底もあるし、あと今住んでるところとか、あるいは川平集落の中とかね。

問：わりと北部の方とかまで一応候補として…

答：あの～インターネットで物件を50くらいピックアップしてたんですよ。で、リストがあがって、3泊4日

で来て、3泊4日みんなその物件の確認の為にレンタカー借りてぐるぐるぐるぐる回ってらしたから。だから、価格もそうだし、いろいろ考えたときにやっぱり●●にはなかなかならないけれど、50件の物件の中の一番落ち着くところがここだった。ですからどうしても、●●じゃないとだめだとか。価格もそうだし、いくつかあるなかで一番パフォーマンスにすぐれたのを選ぶ感じですね。

#### 資料3-4 Dさん(吉原地区在住)

問:以前、インタビューさせていただいたときに沖縄へ移住する前に沖縄を訪れたときのことをお話頂いたと思うんですけども、友達のお姉さんが沖縄で教員をしていたのがきっかけだったということで、それをきっかけにして実際に行く前って沖縄に対して興味などはあったんですか?

答:あ〜、あのね〜、1回目は本当に興味なかったの。ただほんとにいるってだけで、沖縄ってどんなところっていうと、まあ、海がきれいなイメージしかなくて、特に何も興味がなくて、2回目、3回目と行ってみて、まあ、沖縄本島初めて行ってみて、まあ、米軍基地、アメリカと、まあ、おもしろいところだなと。2回目、3回目は自分でも、何ていうのかな、興味を持って、もつとこの辺見てみたいとか。沖縄本島だったら、やっぱり米軍に圧倒されたね、一番。米軍について自分なりに、僕も卒論が米軍だったの。

問:そうだったんですか?

答:だから、沖縄にすごい興味を持って、米軍基地に関する卒論を書いたのね。だから1回目はね、米軍にすごく、なんか、え〜ってものを思っただけ。それからあと、小さい島々の文化だったり、町並みだったり、うん、そういうのに興味を持ちはじめたのはね。

問:じゃあ、実際に沖縄に行くまではそれほど沖縄を意識することはなかったんですね。

答:そうだね。そういうのはなかったね。

問:さきほど、海がきれいってイメージしかなかったとおっしゃってたんですけど、そういったイメージってのはどうやってついたイメージだと思いますか?まあ、たぶんそんなことは意識されたことはないと思うんですけど。

答:あ〜まあ〜そうだね〜、まあ、そんなこと意識したことはないよ。う〜ん。それとあのときはね、今でも覚えているよ、JALのね、キャンペーンガールがね、森高千里だったのね、確かもあるでしょ、夏になったら、JALがキャンペーンをね。そのときに森高千里だったんだよ。あ、森高千里だ、青い海だみたい。それぐら

いだね。

問:一回目以降、だんだん興味を持っていったということだったんですけども、具体的にどういったところに興味を持つようになっていったんでしょうか?

答:まあ、そうだね〜、一番最初ほんと、米軍が印象的で、それからまあ、小さい、まあ、沖縄本島からも、でっかい島々がいろいろあって、そういうところ遊びに行って、まあ、自然の豊かさが一番ではあったんだろうね。今考えると、そのときは無我夢中で、なんていうかなあ、豪遊とかしかしてなく、でね〜、もう15年前のことだから、僕も何とも言えないんだけど、まあ、そういうものにすごく影響は持ったかな。

問:実際に沖縄のいろんな場所へ行ってみて、その中で移住のことを考え始められたんですか?

答:え〜っとね〜、僕がじゅう…19のときでしょ、はじめて沖縄へ行ったのが、15年前か。そうだね、3回目に行ったときは、意識したね。

問:その三回目で意識するようになったのは、何か特別なことがあったんでしょうか?

答:特別な理由ね…(数秒間沈黙)…そうだね〜…たぶん、やっぱりね、…(数秒間沈黙)…きつと気持ちよかったんだろうね〜、なんともいえないな〜、ほんと、海と山と、熱い太陽とね。まあ、本当、開放的だったというか、なんか、そうだね〜、そんなところかな〜。

問:そうすると、もう言葉で表しきれないような、感覚的な動機なんですね。

答:そうだね。なんかパワーが湧いてくるというかな、うん。

問:その、移住を考え始めたときに、もういきなり石垣っていうのはあったんですか?

答:あの〜、僕の場合は、何ていうか、ただ住むじゃなく、けっこうまあ、ビジネスをやるうと考えてたから、そういう意味で沖縄本島、石垣島、久米島とか離島とかも含めて、どこがビジネスチャンスがあるかなって思ったときに、石垣島だったね。

問:じゃあ、石垣以外のところだったらあえて自分が店を出さなくてもいいと判断したんですね。

答:そうだね、別に俺がやっても意味がないかな。おもしろくないなと。

問:石垣以外の離島とかは考えなかったんですか?

答:石垣以外の離島はね、…考えたけども、あの〜、やっぱり生活をするうえで、まあ、すごく現実的な話だけでも、人口が少なすぎるね。あの〜、観光客が入ってくる

人数も少ない。まあ、そういうことで、長期移住となると、小さい島っていうのは非常に難しいんじゃないかなと考えると、程よい大きさの石垣だったね。

問：生活の利便性という点で考えて石垣ということですね？

答：そうだね。

資料3-5 Eさん夫婦（吉原地区にて店経営、川平在住）

※ 夫婦で石垣島に移住してきたものの、夫婦間でそれぞれが持っている沖縄経験に大きな差があったので夫婦それぞれから話を聞いている。

（夫）

問：移住されたのが2、3年前ということなんですけれども、そのときのきっかけというのが、西表で雑貨屋を営んでいる知り合いのところを訪れて、そうした生活にあこがれを持ったということだったとは思うんですけども、西表に知り合いを訪ねられたときにはもう移住のことはご夫婦で視野に入れていらっしやったんでしょうか？

答：…（10秒ほど沈黙）…

問：もしもし？

答：あ、はいはい、…全然、旅行で行ったので

問：じゃあ、そのときはほんとに遊びで、観光で行かれたということですか？

答：そうですね。

問：その観光で行く前に、夫婦でいずれはどこかへ移住しようとかっていう話は？

答：いえ、特に。こんなところで生活できたらいいなあって冗談では話してましたけど、本気では別に考えてなかったです。

問：そうですね。それじゃあ、冗談で話してたところから、本当に移住するようになるまでで思うところの切り替えというか、気持ちの変化というのはどういうところで起こったと思いますか？

答：う〜ん…どう…（数秒間沈黙）…まあ、徐々にというか、時間がたつにつれて、思いが強くなっていったんですね。

問：わたしが石垣で実際インタビューさせてもらった人で多かったのが、40代、50代過ぎるまで本土で生活して働いて蓄えをためて、それから移住してきた人が多かったんですが、そういった方向性では考えられなかったんですか？？もうすぐにもという…

答：そうですね。別に今やりたいことを後に取っとく必要もないし、行きたいと思ったらすぐ行動した方が、断然。

問：でも、生活環境とかもがらっと変わってしまう中で不安とかはなかったですか？

答：移住って考えると、あれですけど、たぶん東京とかでもみんな地方から来てると思うんですね。それと同じで、同じって思えば、別に同じ日本なので、特に心配することもないのかなあと思って。

問：移住前に観光で西表に行かれたということだったんですけれども、それ以前に沖縄へ行った経験は？？

答：えっと、わたしはないです。うちのかみさんの方は行ったことあるんですけども。

問：じゃあ、旦那さんにとっては最初の沖縄の経験というのは西表ということですね。

答：そうですね。

問：それまでは沖縄に対して、行ってみたいなあとかっていう興味などはあったんですか？

答：そうですね〜、特に、やっぱり、東京からですと、あの〜、飛行機代も高いですし、沖縄行くんだったらやっぱり、ハワイとかグアムとかいうほうが自分の中ではありましたね。

問：少し抽象的な話になるんですけども、実際に西表に行く前に沖縄に対して持っていたイメージとかはどのようなものでしたか？

答：そうですね〜、「南国」ぐらいしかなかったですね。「あったかいところ」っていうイメージだけです。

問：実際西表へ行ってそうしたイメージっていうのは何か変化はありましたか？

答：そうですね〜、やっぱり、そんなに情報をもてなかったもので、あの〜…そうですね〜、まあいいところだなあって。いままでは沖縄っていうのは全く、例えば遊びに行くにしても、考えてなかったんですけども、まあ、その、例えばハワイとかグアムとはまた違った新しさっていうか、楽しさっていうか、そういうところだなと思いましたね。

問：ちなみに、グアムとかハワイに行かれた経験は？

答：ないです。

問：でも、どちらかといえば沖縄というよりは海外の嗜好のほうが強かったということですよね。

答：そうですね。

《妻》

問：先ほど、旦那さんからいろいろお話を聞かせていただいたんですけども、話を聞いていくと、移住前の沖縄に対しての経験が夫婦の間でずいぶん差があるようだったので、お話を聞かせていただきたいんですけども、よろしいでしょうか？

答：はい。そうですね、わたしはバイトしてたんで、なんか有志とかで住みこみのバイトとかして何ヶ月か住んでたんで。

問：そのバイトっていうのは、前にちらっと聞いたのはヘルパーのバイトで、西表にいらっしゃったんですよね？

答：そうです。

問：それはもう最初から西表という感じで他には考えてなかったんですか？

答：本島に旅行に行こうと思って、最初沖縄に行くつもりだったのかな？で、そのときに、カナダ人の女の子と知り合って、で、その子が石垣行くとって言ったのかな？あれ？石垣がいいよって、その辺で、旅の途中でどここの島がいいって話してて、石垣がいいってきいて、石垣に船で行って、石垣で知り合った人が西表がすごくいいよって言ってて、それで西表行ったらすごくよくて、それからずっとそっちで。

問：じゃあ、それから数ヶ月間ずっと西表で暮らしてたんですね。

答：そうですね。そこで友達になった人が後で、もう10年前かな？結婚してまたその人のところに遊びに。

問：西表に行く前に、一度石垣へは行ったことがあったんですね。

答：もちろん、石垣から船が出ているので。

問：そのときっていうのは沖縄の離島にいずれは移住したいとかっていう気持ちはあったんですか？

答：うん、そうね、友達が移住とかしてたんで、まあ、行きたいなっていうふうには思ってたけど、みんな年がすごい上なんで、何かのプロになってから行ってみてたんですね。食べていけないから。わたしも自分で何かできるようになってから、そこで家買って暮らせたらなあ〜って、まあ、たぶん思ってたかな。でも、現実的にすごい、けっこう、そんなことは考えたこともなかったかな。

問：一番最初に友達に石垣がいいって言われて行ったときっていうのはもう本当に観光目的で？

答：そうですね。仕事もやめて旅行行ってたんで、どこ行こうかなって、旅先で会う人がここいいよって言って

くれたところに。

問：それで行って見たらよくなって…

答：西表がすごくよかったですよ。

問：例えば、具体的に西表のどういったところに魅力を感じられたんですか？

答：すごいね、西表って言うと自然です。

問：友達に紹介されて石垣とか西表に行かれたとは思いますが、実際行く前っていうのは沖縄に対してもとから興味はあったんですか？

答：別に、あの、1人旅立ってたんで、泊るとこなくてこまるとか、あったかいところだったらそれはないかな〜って。特に深い意味はないです。

問：先ほど西表の自然にすごく魅力を感じたとおっしゃってたんですけども、行く前はどんなイメージをもってたんでしょうか？

答：いや、まったく。あの、別に都会から行った訳でもないんで、普通に自分が住むところにも自然はあるんで、生えてる木がちよっと違う、ジャングルだったんで。石垣は、まあ、本土と比べると都会じゃないですけど、普通に信号とかあったんで、西表は信号もなくて。たぶん風光明媚なところにすごく感動して、それは一番はまりましたね。

問：最近だと、沖縄ブームとかでテレビや雑誌などで取り上げられているので、そういうのを見て持った沖縄のイメージを持ってわたしの場合だと石垣に行ったんですけど、そういったことは？

答：いいえ、まったく、そんなイメージは。

問：じゃあ、沖縄といえばこれっていうようなものは…

答：あったかいぐらい。

#### 資料4 R社社員インタビュー内容

問：会社設立以降、移住希望者からの問い合わせや利用の件数が増え始めた時期はあるんですか？

答：ちょっとね～具体的な数字って言うのはなかなか出せないんですけどね。

問：あの～僕もこっちへ来て1（？）年半ちょっとぐらいなんですけど、直接的な問い合わせがいくらあるかっていうのはね、たまにありますけどね。たまにっていう感じですよ。

問：そうなんですか？

答：だからまあ、本出していますから、その本、そういうのを読んで、そのうえでっていう場合が多いです。突然、その、移住したいんですよとかいって、あの～ネットで調べたんですよとかっていうことはあんま、ぼくは少なくともとったことはないです。

問：本を出されているということですけれども、(R社でつくられている)移住者向けの雑誌はいつ頃から出版され始めたんですか？

答：やっぱりあの～、本格的なものっていうのは、「沖縄スタイル」が一番最初だと思うんですよ。だから、「沖縄スタイル」いつぐらいに出たのかなあ？まあ、だから2、3年前。もう、だからそれに特化した企画がね、そういう、もう、まるまるその一冊にクローズアップしたっていうのは「沖縄スタイル」がたぶん最初だと思うんですよ。

問：その沖縄スタイルを出版する経緯としては沖縄の移住ブームが起こってから以降につくられはじめた雑誌なんですか？

答：そうですね、あの、まあ、確かに流れとしてはなんかそういうのみたいのがあったと思うんですけど、ただ、その～、何ていうんですかね、言ってみればその、知人ぞしるみたいなんじゃないですけど…う～ん、まあ、そんなにたくさん情報があつたわけでもないし、で、まあ、テレビとかそういうマスコミとかでちょろっと、まあ、何ページか書いてあることがね、記事が書いてある程度だったりとかする。で、より詳しい、あの、何て言うんですかね、もっと詳しいようなその、丸まる一冊沖縄の、沖縄に関する事について書いてあるのが「沖縄スタイル」。で、あとなんでしたっけ？

問：他にも「沖縄に住む」とかいろいろ出されている雑誌とかは「沖縄スタイル」に続いて出したようなかたち(になるんでしょうか)？

答：そうですね。だからあとは結構そういうことですよ。ほんとに後続ということになると思うんですよ。だからもう、ほんとに、「沖縄スタイル」が最初。

問：出版以外に実際に移住支援も行っているとうかがったんですが、具体的にはどういった支援が多いんですか？

答：事業内容としては、例えばその、アパート紹介したりとか、ケースバイケースなんですよ。

一定の何かそのやり方があってそれに従って動いてるっていうのではなくて、まあ、ご相談を受けたらそれに対してまあ、お答えする。

問：じゃあ、移住したいと考えてらっしゃる方ひとりひとりの場合とか条件に合わせて(ということなんですか?)。

答：そうですね。だから、まあ、その、そういうご相談になった場合に、そのご相談にのるというのがあって、で、まあ、できることをまあ、やっていく。その～決まったやり方で、誰がやっても、その、どこそこ紹介してとかそういうことはないですね。

問：相談されるなかで、こういった相談が特に多いとかっていうのは？

答：やっぱり、あの～、そうですね、やっぱり住まいとかね、仕事のこととかだと思うんですけど。でも、住まいとかね、あの、不動産やさんとか他にもありますけれども、まあ、ちょっと難しいと思うから、よほど何か特殊な事情があればね、そっちもそれを探してるっていつてればね、お教えできるけれども、普通に実際なんかいろいろ探してるっていうぐらいであれば、それはもう、ご自分で探していただくほうがいいかなってなるんで。積極的にそんなに仕事とかについてはご紹介したりはしないですね。自分で職安に行ってみつけていただく方が適性とかもありますからね。

問：住むところについての相談がけっこうあるということなんですか？

答：そうですね。どこの、どのへんに住んだらいいかっていうのが、まあ、間違いのないですね。

あと、まあ、離島に住みたいですということが仮にあったとしても、結構難しいわけですよ。自然(?)とかいろいろ違いますからね。だから、そのへんも相談に乗りながら、どこかいいところあったら紹介する。

問：なにか物件などを紹介するってなればR社さん単独ではなくて、別の不動産会社とのれんけいになりますよね？

答：そうですね。

問：そのときに特定の提携を結んでいる不動産会社はあるんですか？

答：ああ、それはないですね。

問：ないんですか？

答：はい。

問：じゃあ、そのときそのときに応じていろんな不動産会社をまわって、ということですか？

答：そうですね。だからまあ、いろんなところに声をかけてみたりとか、具体的にこうしてほしいって要望があれば、あちこち声をかけて、特定のどこかの不動産屋さんに決めてるとかそういうことはないですね。で、まあ、不動産の雑誌を扱ってますから、まあ、不動産会社たくさん取り上げてるんです。それに直接、あの～、こんな条件なんででとるんちゃうという感じで相談することは結構多いかな。

問：移住先については具体的にどういった地域が今は好まれる傾向にあるんでしょうか。

答：好まれる傾向としてはね、離島とかね、田舎ぐらしがしたいって人が多いですね。

けど、まあ、離島とかだとね、病院とかもうなかったりする場合もあるし。離島に住みたいんだけど、離島の中でも都会を求める人があったりするわけですよ。それは無理な話なんですよ。そういう人わりとけっこういるんですよ。…そういう人の場合はそういう話をきいたら、ちょっと、こうこうで難しいですよっていいですよ。だから、年配の方なんか特に病院のこととか考えると、

沖縄の南部、だから那覇とかそのへんの周辺とかは病院たくさんあるんですよ。だからまあ、何つうのかな、全くの都会へ住みたいなら南部。

問：じゃあ、おすすめしたりするということですか？

答：よくおすすめはしないけど、そういうところですよってことを伝えるんです。特に若い人でとか、畑とかしたいとかやったらまあ、北部とか、中部・北部。農地、土地とか自分で買って自分で耕したりとかして。

問：離島を希望されてきた方にも利便性の問題とか生活上の問題であまり離島ぐらしはおすすめせずに、本島のほうで…

答：おすすめせず、ていうか、覚悟してくださいねみたいな感じ。それをちゃんと知った上で、行ってほしい。

問：離島へ移住したいと相談に来られる方は多いですか？

答：そうですね。そういう方はだいたい八重山とか宮古とかが多いですね。そこがまあ、メジャーっていうところもあるでしょうね。いきなり久米島とかが頭に上ってこないんですよ。だからまあ、結果的に石垣とか宮古は多いということになってるのかな。

問：好まれる移住先に変化はありますか？

答：そういう変化はまだ今のところ感じないですね。

## 参考文献

- 朝田良輝 (2002) : 「沖縄県石垣島における戦後開拓集落の変容過程と土地買占め」, 大阪市立大学文学部修士論文
- 岩佐吉郎 (2007) : 「沖縄における観光業地域の発展」, 地理 52 - 11, p91~106
- 株おきぎん経済研究所 (2007) : 「賃料動向ネットワーク調査概要」
- (財)沖縄コンベンションビューロー (2004) : 「沖縄観光マーケティング調査」
- 沖縄県 (2006) : 『観光要覧』
- 沖縄総合事務局総務部調査企画課 (2006) : 「県内移住者に関する基礎調査」
- 沖縄タイムス社 (1998) : 『庶民がつづる沖縄戦後生活史』
- (株)海邦総研事業支援部 (2007) : 「転入・観光動向にみる沖縄への地域別吸引度」, (株)海邦総研
- 加藤千夏・菊本泰子・高橋直哉・藤村有加 (2004) : 「『ちゅらさん』における沖縄の表象・生産・受容」, 岩淵功一・多田治・田仲康博編『沖縄に立ちすくむ—大学を越えて深化する知』, せりか書房
- 総務省 (2005) : 『平成 17 年国勢調査報告』
- 多田治 (2004) : 『沖縄イメージの誕生—青い海のカルチュラル・スタディーズ』, 東洋経済新報社
- 田仲康博 (2002) : 『メディアに表象される沖縄文化』せりか書房
- 野村浩也 (2005) : 『無意識の植民地主義—日本人の米軍基地と沖縄人』, 御茶の水書房
- 日本銀行那覇支店 (2006) : 『移住者増加による沖縄県経済の影響について』

## 参考URL

- 大宅社一文庫雑誌記事検索 web 版 <http://oya-bunko.com>
- 聞蔵II <http://database.asahi.com>
- 日経テレコン 21 <http://telecom21.nikkei.co.jp>
- 八重山毎日オンライン <http://www.y-mainichi.co.jp>
- Webcat Plus <http://webcatplus-equal.nii.ac.jp>

# 沖縄市の町づくり ―コザミュージックタウン音市場と周辺商店街

辻野 菜穂

## 目次

I はじめに	III 音楽による町づくり
II 調査地について	1) コザの衰退
1) 沖縄市	2) コザミュージックタウン音市場
2) コザ	3) 周辺商店街の町づくり
3) 嘉手納飛行場概要	IV まとめ

## I はじめに

2007年7月、沖縄市胡屋十字路の一角に「コザミュージックタウン音市場」がオープンした。沖縄市の経済が衰退の一途を辿る中、「基地の街・コザ」が育んできた独自の文化を音楽という切り口からアプローチする事で中心市街地の活性化を図ろうというコンセプトの下に建設された音楽施設である。この施設の誕生により、沖縄市は「音楽による町づくり」という振興政策を本格的に始動させた形になり、そしてコザミュージックタウン音市場の周辺に存在する商店街もまた、ミュージックタウンの受け皿としての役割を担う事で「音楽による町づくり」に参画しようと様々な取り組みを行っている。2007年9月、沖縄市コザを訪問し、オープンから約1ヶ月経ったコザミュージックタウン音市場の概況や、周辺商店街の状況について聞き取りを行った。今回のレポートでは、これらの調査結果をまとめると同時に、沖縄市の政策としてのミュージックタウンと、周辺商店街という二つの視点から沖縄市の「音楽による町づくり」について考察したいと思う。

## II 調査地について

### 1) 沖縄市

沖縄市は、沖縄本島の中部、東海岸側に位置する、那覇に次ぐ県下第二の都市である。人口は132,767人（平成19年10月時点。沖縄市ホームページより抜粋）、面積48.99km<sup>2</sup>であるが、その約37%を米軍基地（嘉手納飛行場ほか）が占めている。

古くからエイサーや沖縄民謡（島唄）などの伝統芸能や民芸品・絵画などが盛んな地域としても知られているが、産業に関しては第3次産業従事者がもっとも多く、沖縄県の統計調査によると、全体

の約78%を占めている。

第1図：調査地



沖縄県立図書館ホームページ内デジタル書庫沖縄素材集より作成

## 2) コザ

コザは、現在の沖縄市の胡屋地区を中心とした地域に相当する。美里村との合併によって1974年に沖縄市となる以前は「コザ市」という一つの独立した市であった。戦前は「越来村」と呼ばれていた農村であったが、沖縄戦において上陸した米軍によって建設された「キャンプ・コザ」を中心に、1950年代から軍人・軍属を顧客とした飲食店や商店などで市街地が形成され、1956年に正式に「コザ市」となった（波平2006 pp.28）。

嘉手納飛行場と隣り合わせという立地（第2図）において「基地の門前町」として著しい経済発展を遂げ、当時の経済活動の殆どを基地に依存しており、ベトナム戦争当時には市経済の全体の80%が基地関係からの収入であったと言われている。嘉手納飛行場第2ゲートへと続いている「ゲート通り」（写真1, 2）や「中央パークアベニュー」（旧・センター通り 写真3）を中心に、軍人・軍属を対象とした飲食店や服飾店、ライブハウスなどが軒を連ね、夜になると米兵が行き来する一見独特な街並み、そして琉球文化とアメリカ文化、その他の様々な異国の文化が融合した独自の文化「チャンプルー文化」を持つ。その影響でロックやフォークを中心とした音楽活動が非常に盛んであり、「オキナワンロック」などといった独自の音楽文化が形成されてきた歴史がある。

第2図：コザと嘉手納飛行場の位置関係



資料：コザミュージックタウン音市場事業概要より抜粋

(左から) 写真1, 2：ゲート通りの商店



2007年9月6日 コザゲート通りにて筆者撮影

写真3：中央パークアベニュー



2007年9月6日 筆者撮影

基地との関わり合いに関しては、先にも述べた米軍相手の商売や、基地関係職への従事など、特に経済の面で基地に依存していた部分があると同時に、多発する米軍要員による住民への傷害・暴行事件に不満が噴出し、「コザ暴動」(1970年12月20日)などの暴動が起こされた歴史も存在する。(「沖縄を知る事典」編集委員会2006 pp.128-129)

合併し、沖縄市となった現在も旧コザ市であった地域の愛称として「コザ」という名前は廃れる事なく使われ続けており、この町に対する人々の愛着を感じる事が出来る。

### 3) 嘉手納飛行場概要

嘉手納飛行場は極東最大級と言われる在日米軍基地である。沖縄市と、嘉手納町・北谷町の3市町村にまたがり、総面積は約20km<sup>2</sup>。第5空軍指揮下で、防空・反撃・空輸・支援・偵察・機体整備等の総合的な役割を担っているほか、居住地区には学校・図書館・スポーツ施設・スーパーマーケット他、多種の米軍向け支援施設が存在する。

元は旧日本陸軍航空隊の中飛行場として1944年9月に開設されたが、沖縄戦中、1945年4月にアメリカ海兵隊によって占拠され、整備・拡張の下、米軍主力飛行場となり、現在に至っている。約3700mの滑走路二本を有し、200機近くの軍用機が常駐する。米軍にとって「太平洋の要石」である沖縄の中でも最も重要視され、極東最大の機能を持つ基地である。

## III 音楽による町づくり

### 1) コザの衰退

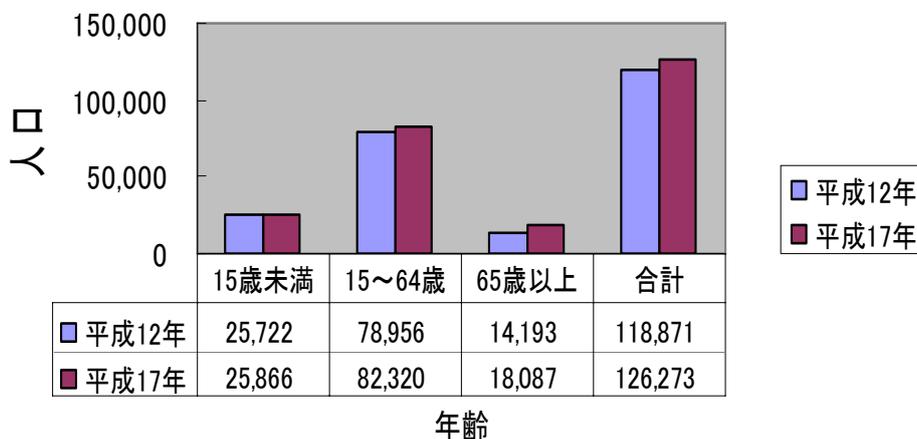
前述のように基地の門前町として隆盛を誇ったコザであったが、バブル崩壊後、経済衰退を迎える事となる。衰退が顕著に現れ始めたのは約14~15年前と言われており、要因としては様々なものが考えられるが、2000年の大店法から大店立地法への移行による郊外型大型店舗の増加や、居住人口の減少・高齢化による商店街の後継者不足、観光産業振興政策の遅れなどが主だったものとして挙げられる。

郊外型大型店舗の台頭に関しては、沖縄市は、北谷のハンビータウン(サンエー)、アメリカンビレッジ(ジャスコ)、ショッピング泡瀬(ダイエー)、具志川のジャスコなどに周囲を取り囲まれており、またこれらの店舗が主幹線道路の要所要所に存在する為に、買い物客が沖縄市まで到達しない、という状況にあるという。

居住人口の減少と高齢化に関しては、統計データを見る限りでは沖縄市の人口は近年増加の傾向にあるものの、年齢別に見ると高齢者の人口が僅かではあるが増加しつつあることが伺える(第3図)。商店主の高齢化に伴い、時代と消費者のニーズに機敏に対応する事が困難になり、新規の顧客を獲得する事が出来ない、あるいは閉店してしまう商店が相次ぐ事で商店街が空き店舗が目立つ「シャッター

一通り」となってしまう、商店街全体の活気が下がっていくという結果になっていると考えられる。

第3図：沖縄市の年齢別人口推移（平成12年・平成17年）



沖縄県企画部統計課ホームページデータより作成

観光産業振興政策については、沖縄市観光協会で行った聞き取りによると、沖縄市への入域観光客数は、近年は微増傾向にあるものの、例年沖縄県全体の約0.5%程度であり、また、観光客の増加を目的とした政策もこれまで行われてこなかった、という事であった。そもそも1980年代まで基地関係者を相手にした商売に特化していた為に観光による経済振興への関心が極端に低かった事に加えて、近年の「沖縄ブーム」に起因する、「青い海・青い空」というようなリゾートに重きを置いた沖縄県の観光政策に便乗できる自然資源、あるいは戦跡などの歴史資源といったものが沖縄市にはなく、また北谷の美浜タウンリゾートのような強い集客効果のある施設もない。「チャンプルー文化」を根拠とした独特の街並みやゲート通りのライブハウス、昔は那覇から飲みに来る客も居たと言われる中の町など、コザ独自にして最大の魅力である文化に関しても、ソフトの充実に対してハード面での施設の誘致を行ってこなかった事やモータリゼーションへの対応の遅れなどにより、十分な集客効果を発揮しきれずにいるという。

以上のような要因を含んでいる事によって、現在のコザは「素通り観光」とも言われ、県内の買い物客のみならず県外からの観光客も他地域に流れてしまっており、中心市街地の空洞化に歯止めが効かない状態に陥っている。

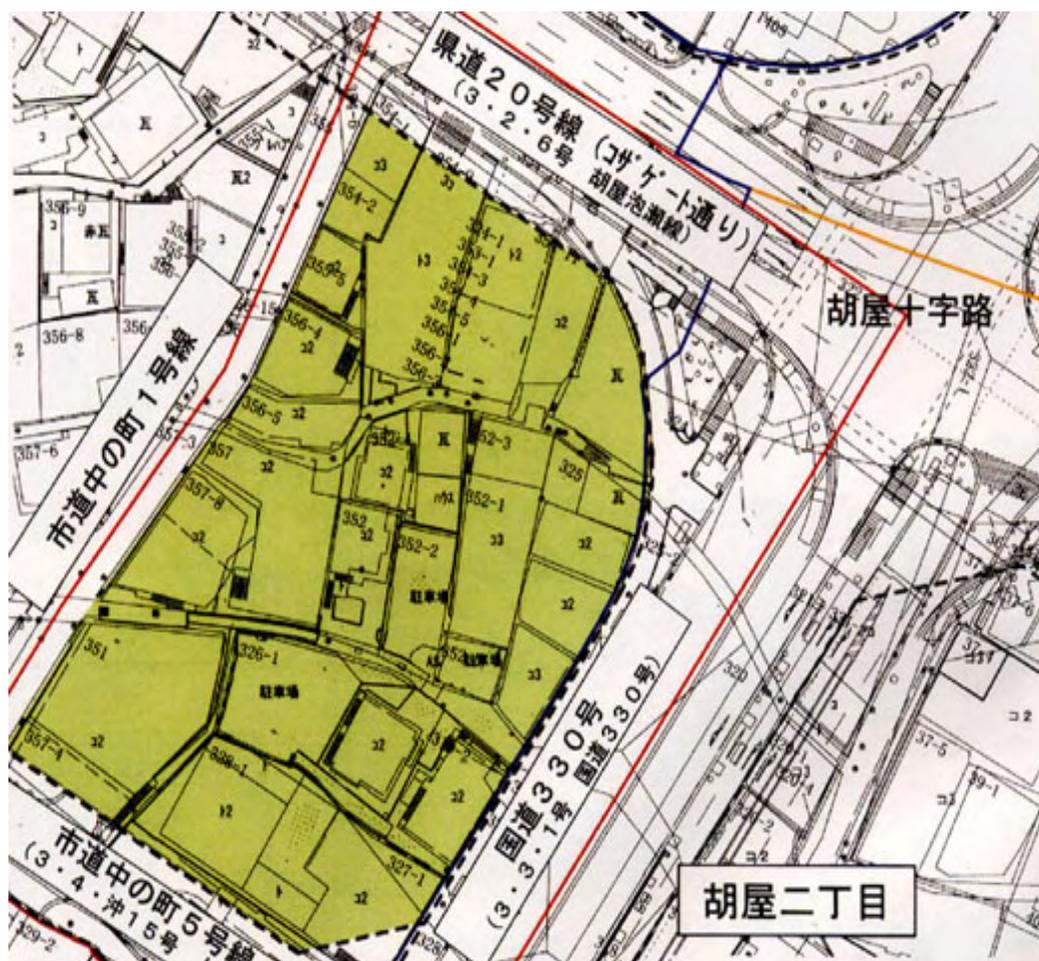
## 2) コザミュージックタウン音市場

以上のようなコザの現状を打開すべく、1999年から展開されたのが「中の町・ミュージックタウン整備事業」と「中の町A地区第一種市街地再開発事業」である。

「沖縄米軍所在市町村活性化事業（島田懇談会事業）」による振興プロジェクトの一つで、多目的スペース（音楽ホール）・音楽スタジオ・音楽広場からなる「音市場」の建設を行う「中の町・ミュージックタウン整備事業」と、その他の商業業務・住宅・駐車場などの建設を行う「中の町A地区第一種市街地再開発事業」という二つの事業によって「コザミュージックタウン音市場」という新たなコザのシンボルとなる複合施設は建設された。

元々、中の町A地区（第4図・写真4）は、建造物の老朽化や密集などにより防災上の面からも区画整理が必要とされていた地区であり、実際、昭和36年に土地区画整理事業の都市計画決定を受けている。しかし基地経済によって隆盛を極めていた当時は地域の同意が得られず、その後バブル崩壊の煽りを受けて計画がストップしたままの状態であったものが、都市再生機構を施工者とし、同市内の施設「子どもの国」に全額投入する予定であった島田懇談会事業の予算を転用する事で2005年に着工、2007年7月27日オープンという経緯となっている。

第4図：区画整備以前の中の町A地区



資料：中の町A地区第一種市街地再開発事業パンフレットより抜粋

写真4：区画整備前の中の町A地区

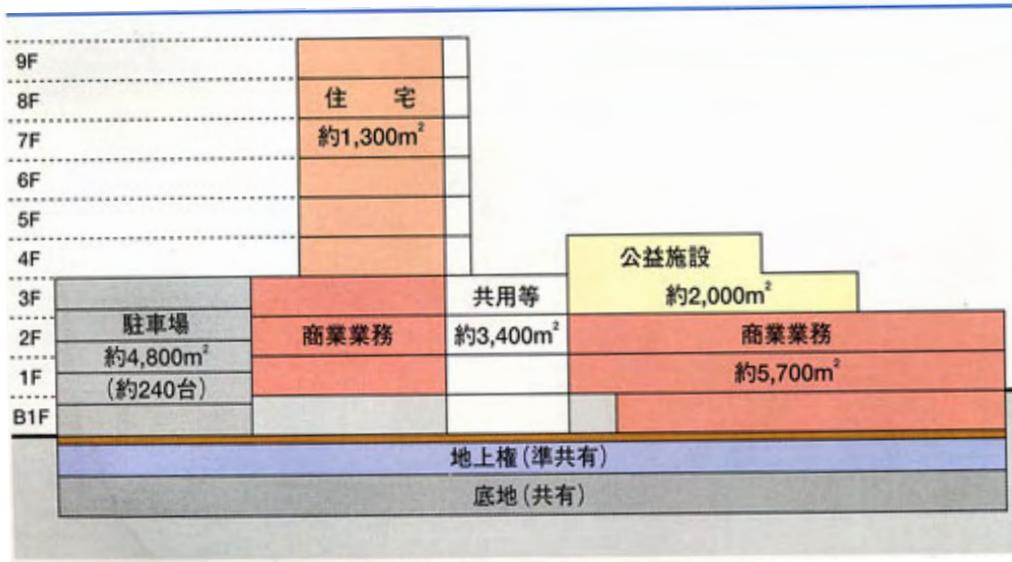


資料：コザミュージックタウンの音市場事業概要より抜粋

建築面積5,150m<sup>2</sup>、地上9階地下1階の建造物で、収容人数1100人の多目的スペース（ホール）・音楽スタジオ・プロジェクトルームからなる公益施設、飲食店や商店などが軒を連ねる商業業務施設、住宅、240台分のスペースを持つ駐車場、音楽広場という5つの施設によって構成されている。（第5図）

音市場には3つのコンセプトが掲げられている。コザで音楽・芸能活動を行う若者がライブやイベントでホールを使用できると同時に、全国ツアーを回る有名ミュージシャンのライブを誘致し、県内・県外から人を獲得する『賑わい創出』、音楽スタジオと、音市場と連動して始動した人材育成プロジェクト「パッケージ事業」による『人材育成』、簡易録音設備などを備えたプロジェクトルームで自主制作のCDの製作などが可能となる『産業支援』の3つである。中でも『人材育成』に関しては、ライブなどの音楽活動のみならず、音市場への人材供給、「ライブハウスはしごツアー」のような音楽観光のガイド養成、音楽とITに関わるビジネスの起業家支援、著作権ビジネスに関わる人材育成など、コザの音楽・芸能文化を最大限に生かした街づくりに向け様々な側面からのアプローチがなされている。

第5図 ミュージックタウン施設構成



資料：コザミュージックタウン音市場事業概要パンフレットより抜粋

以上のような機能を持つ音市場は、あくまで「音楽による町づくり」の中核として中心市街地活性化の拠点となる施設で、ここを中心に町全体の活性化が図られるものであり、また、「音楽による町づくり」そのものに関しても、行政側が一方的にそれを進めていくのではなく、地域住民と一緒に作って作り上げていくものでなければならない、と沖縄市としては考えている。

実際、コザミュージックタウン音市場は公設民営の施設として誕生し、「ピースフル・ラブロックフェスティバル」なども手がけてきた株式会社ミュージックウェーブを指定管理者としている。ハコは行政が作り、運営は民間が行う事で住民が中心となった町づくりを行うというのが基本的な方針である。

また、沖縄市内には既に市民会館と市民小劇場「あしびなー」という二つのホールが存在するが、音市場のホール設備をロックなどのバンドサウンドに対応した設備のみに絞る事で、クラシックや演劇は上記の施設、というような住み分けを図り、そしてミュージックタウンに集まった観客が商店街に流れる事で商店街の経済衰退に歯止めをかける、といった構想など、ミュージックタウンをきっかけに、沖縄市全体の経済の活性化を図り、活気を養う、というのがコザミュージックタウン音市場の目的であるとされている。

写真5：コザミュージックタウン音市場



2007年9月6日 胡屋十字路にて著者撮影

### 3) 周辺商店街の町づくり

沖縄市には現在、一番街商店街（写真6）、サンシティ商店街、パルミラ通り、ゲート通り、中央パークアベニュー、ショッピングセンター、胡屋大通り、銀天街商店街（写真7）などの商店街が存在する。戦後、嘉手納飛行場第2ゲートから胡屋大通りにかけて自然発生的に出来たゲート通りを中心に店が集まり、胡屋十字路方面へと広がっていき、現在のような形になったと言われている。軍人・軍属相手の店舗が多く並ぶゲート通りや中央パークアベニューは別として、その他の商店街は主に地域の人々の生活を支える場所として賑わっていたが、次第に衰退が進み、通行量はここ十年で4～6割減少の傾向にあるという。（沖縄市2006）実際、6つの商店街を見学したが、平日の人通りは非常に少なく、またシャッターの下りている店舗の多さも目を引いた。

このような現状に対し、商店街の通り会は、遠のいた客足を呼び戻す為に様々な取り組みを行ってきた。その一つが集客イベントである。一番街商店街の「七夕まつり」、銀天街商店街の「屋台まつり」、パルミラ通りの「ムーンライトフェスタ」などといったイベントが各商店街の通り会によって個別に開催されてきたが、2006年10月に情報の共有化、次世代との連携、各商店街との協力を目的として、7つの通り会が集結し、「コザ商店街連合会」が発足した。同年、それまでパルミラ通り会が単独で行っていたイベント「ムーンライトフェスタ」を連合会で開催し、1000人以上の動員を記録し大成功を収めたのを皮切りに、「ボジョレーパーティー」「JAZZとサンマ」「THANK YOU sweets KOZA」など、各種イベントを開催し、賑わいの再生に尽力している。

しかし、このような様々なイベントも、当日は多くの参加者が集まるものの、平日の商店街への集客にはなかなか繋がらないという。商店街に買い物客を呼び戻すには、イベントだけではなく商店街自体を改善する事が必要とされているが、品揃え・価格において大型スーパーに対抗する事は難しく、また店主の高齢化、他の通り会との折り合いなどの問題も重なり、現状打開の手立てが見つからない状態である。空き店舗へ新規店舗を誘致する事で活性化を図る「ドリームショッピングランプリ」も市の補助支援の下、平成12年から始まったが、経営が続かず、すぐに閉店してしまう店が大多数であり、現在は数店舗しか存続していない。また、長年に渡りシャッターを下ろしていた為に老朽化が激しい店舗を新規参加者に提供できる状態にするだけの経済的余裕がない、というような事情も新規店舗参入を困難にしている。

基地関係者の通行・利用についても商店街関係者に聞き取りを行ったが、英語が喋れない・ドルを取り扱っていないので対応ができない、あるいは買い物に来てくれるのなら来て欲しいが殆ど来ない、などといった意見があり、ゲート通り・中央パークアベニュー以外の商店街はそもそも地元住民のみを対象にしており、軍属関係者を顧客対象としては見てはいないという事が分かった。

第2項でコザミュージックタウン音市場と商店街の連携に関する構想について少し触れたが、ミュージックタウンの「音楽による町づくり」というコンセプトには、周辺商店街も積極的に参加する姿勢を見せている。実際、コザ商店街連合会や各通り会が開催しているイベントに関しても、その殆どがストリートライブを中心とした構成となっている。しかし、平日の商店街の雰囲気や業態を音楽と絡めていく事が出来るかという点、家庭雑用品や服飾といった、地元住民の生活と強く結びついた商売を営んでいる商店と「音楽」「コザのチャンプルー文化」を結びつける事はまず不可能であり、また業態を変えるだけの活力もないという状況の中で、「是非参加したいけれども、できない」というのが現状であるという事であった。

コザミュージックタウン音市場オープン後の影響については、商店街への人通りもゲート通りほどではないが若干の増加傾向にあるものの、まだまだ通過するのみで売り上げとは結びつかないという。その他には、交通渋滞が頻発するようになった為にこれまで来ていた人が入りにくくなった、駐車違反の取締りが厳しくなり、道端に車を駐車して買い物に来ていた人が来にくくなった、といった意見を聞く事も出来た。

写真6：一番街商店街



2007年9月6日 著者撮影

写真7：銀天街商店街



2007年9月5日 著者撮影

## IV まとめ

今回の調査は、「音楽による町づくり」という一つの町づくりのコンセプトに対する取り組みについて、コザミュージックタウン音市場を作った行政サイドと周辺商店街サイドという二つの視点から考察したいというのが当初の目的であったが、実際調査を行ってみて、両者のズレであるとか構想と現状というものを目の当たりにしたように思う。非常に深刻な経済状況に置かれているコザにおいて、その文化を資源とした「音楽による町づくり」という新しいアプローチが進められようとしており、その核施設となるコザミュージックタウン音市場には周辺住民から非常に大きな期待が寄せられている反面、周辺商店街が戸惑いを隠せない部分があるのも事実であった。

確かにコザ文化と音楽は密接な関係にあり、個人的にもミュージックタウン音市場、そして「音楽による町づくり」というものには非常に興味を引かれるが、飲食店やゲート通り・中央パークアベニューに見られる雑貨店やカフェなどを除いた、その他の商店街が担っている日常生活の部分と音楽を結びつけるのは容易ではなく、また店主の高齢化が進んでいる商店街において、ミュージックタウン音市場の客筋から考えられる年齢層をターゲットにした商売を始める事も容易ではないと思われる。衰退に歯止めが利かない状況で、行政の一大事業というチャンスに藁をも掴む思いで便乗したいと思うものうまうまいかない、というジレンマを痛感した。

しかし、今調査の段階ではミュージックタウンのオープンから1ヶ月しか経過しておらず、具体的な連携や体制というものは今後形成されていくものであるとも感じる。沖縄市が提唱する「ミュージックタウンを中心とした、コザ全体を含めた町づくり」に今後も継続して注目したいと思う。

今回の調査に至るまでは沖縄市、そしてコザについて深く知る機会がなく、また訪れたのも初めてであったが、実際に赴いた事で、今回の調査テーマ以外にも様々な側面—コザという町が辿ってきた歴史や文化や、それを土台としながらも時代と共に著しく変化する町並みなど—に非常に興味を持った。これを今回の報告書で一区切りをつけてしまうのではなく、可能な限り、引き続き学習していきたいと強く感じている。

最後に、お忙しい所を聞き取りに協力して頂いた沖縄市経済文化部、沖縄市観光協会、コザ商店街連合会、沖縄市一番街商店街振興組合、沖縄市サンシティ商店街振興組合、沖縄商工会議所中小企業振興部の方々、その他調査に協力して下さった多くの方々にこの場を借りて心より御礼申し上げたい。

## 参考資料

- 「沖縄を知る事典」編集委員会 編 (2000) 「沖縄を知る事典」中外アソシエーツ  
沖縄市 (2006) 「広報おきなわ 2006年12月号 (No.390)」  
沖縄市「コザミュージックタウン音市場事業概要」パンフレット  
沖縄市建設部振興開発室中の町再開発課 (2006) 「中の町・ミュージックタウン整備事業」パンフレット  
独立行政法人 都市再生機構 (2006) 「中の町A地区第一種市街地再開発事業」パンフレット  
波平勇夫 (2006) 「戦後沖縄都市の発展と展開 ―コザ市にみる植民地都市の軌道―」沖縄国際大学  
総合学術研究紀要 9-2, pp.23-60

沖縄県企画部統計課 統計資料閲覧室

<http://www.pref.okinawa.jp/toukeika/index.html> (最終アクセス: 2007年10月28日)

沖縄市役所 ホームページ

<http://www.city.okinawa.okinawa.jp> (最終アクセス日: 2007年10月30日)

沖縄県立図書館 ホームページ デジタル書庫 沖縄素材集

<http://www.library.pref.okinawa.jp/okilib/syoko/sozai/index.html> (最終アクセス日: 2007年10月30日)

地理学報告書—沖繩編

発行日 2008年5月1日

編集 山崎孝史 (大阪市立大学大学院文学研究科教授)

発行 大阪市立大学文学部地理学教室

〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138

Tel & Fax 06-6605-2408

HP (掲載リンク名「地理学報告書」)

<http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/user/yamataka/home.htm>

E-mail [yamataka@lit.osaka-cu.ac.jp](mailto:yamataka@lit.osaka-cu.ac.jp)